
星に蒔く種

川本陶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星に蒔く種

【Nコード】

N8164D

【作者名】

川本陶子

【あらすじ】

地球温暖化の影響なのか、ある酷暑のひと夏に起きた出来事です。あまりの暑さに、人々は地球の未来への不安を感じています。加えて犯罪の増加などから未来への絶望が広がり始めた頃、不思議な出来事が起こり始めます。それは偶然ではなく、ある秘密がそこにはありました。それを辿っていくうちに主人公が、生きるうえでのヒントを見つけていく物語です。

ブローグ

ブローグ

この夏は暑すぎる夏だった。摂氏35度を越える日がすでに何日も続いている。それによって人々は、地球温暖化が本当に始まっているという危機感を抱き始めていた。しかし同時に、自分に出ることなどほとんどない、とも感じていた。

テレビや新聞では、偉い人たちが毎日、温暖化による危機的状況を訴える。だが、果たして真実は大衆に正しく伝わっているだろうか。

北極の氷が溶け、生態系に狂いが生じ始めているとテレビは言う。人々は白熊が飢えに苦しむ姿に心を痛めても、この暑さでは冷房の使用を控えること自体、そもそも無理だとも思っている。

北極が氷の世界でなくなるとか、ましてや日本が生活に適さぬほど暑くなるなど、以前は誰も本気で考えていなかったはずだ。たとえばそんなことがあるとしても、何百年、何千年も先だと思っていた。しかしこの夏、はじめて人々は、それは何百年も先の話でなく、自分が生きている間にも起こりうるのだと思い始めた。少なくとも若者たちにとっては、自身の将来、あるいは子どもたちの未来には、恐怖が現実となる可能性は高いだろう。それでも人々はいまだ、自分たちが今行動すべきだという実感をつかみきれずにいた。

メディアは温暖化の問題を伝える一方、相変わらず工業や都市の発展していく様子を嬉しそうに垂れ流す。マスコミも政治も、「地球にやさしく」と言う言葉を免罪符のように唱えながら、実際には経済の発展を最優先しているかのように見える。

都会には、巨大なオフィスビルや商業施設がどんどん増設されて

いる。あのビル一棟の消費エネルギーはいったいどれほどの量だろう。それを思うと人々は、自分一人がエアコンの代わりに団扇を使い、風呂の残り湯で洗濯をしたところで、あの白熊を救えるとは容易に信じられない気がするのだ。

人間は元来、野生動物ほど、未然の危機を感知し対処する能力を持ち合わせていない。危険が迫っていると教えられても、それを回避するための行動を自発的に起こせる人間はそれほど多くない。恐らく、たいていの人々は怯えながらも、これまでと同じ暮らしを続けるはずだ。

多分なんとかなるだろう、あるいは自分だけは大丈夫だろうと思いつちもつとする。人間とはそういう生き物であり、それこそが私たちの生活の土台である、「習慣」を成立させているのだ。

人間は「習慣」に従って生活を営む。それは思考を麻痺させ、時には行動の自由を制限するほどに強力な力を持つ。しかし、「習慣」によって日常生活がスムーズに進行するのモまた事実である。ものが変化せず、問題なく生活が営まれているときには、「習慣」は人々にとっては都合のよいものなのだ。だが急激な方向転換を強いられるときには、これまでの習慣を壊す必要に迫られる。

「習慣」を打ち破ろうとするとき人は、非常に大きなエネルギーを必要とする。そのエネルギーを発生させるには、時間をかけ、意識的に行動を繰り返すことで徐々に大きくするか、あるいは大きなショックによって、もはや「習慣」が成立しない状況を作るしかない。

つまり、危機的な状況に追い込まれることにより、今までと違う大きなエネルギーが発生する場合がある。たとえば大きな災害に見舞われたときなどがその例だ。そのとき、人間の生活を覆いつくしていた「習慣」は崩れ去る。

人間は本質だけの存在になり、生きるため、最善の方法を選択するしかなくなってしまう。災害時には、これまでになかった助け合いの精神が生まれたり、いがみ合っていた隣人とも力を合わせたりするようになる。

それを考えれば、この現代社会において、本気で温暖化を食い止めるようにするなら、否応なしにこれまでどおりのエネルギーが使えない状況に追い込まれなければならない、ということだろうか。いまのままでは人々はいつまでたっても、不安を抱えたまま、昨日と同じ今日を生き続けるだろう。

もしも世界が昔のような、自給自足の生活に戻ったらどうなるだろう。人間自身のエネルギーのみで生活をしなくてはならず、もちろん贅沢や娯楽の多くは廃止されることになる。暮らし方を急激に変えれば、たしかに二酸化炭素の発生は大いに減少するかもしれない。しかし、そこでまた別の問題が発生することも明らかだ。

経済活動は麻痺し、体力のない老人にとっては生活そのものが困難になる。多くの企業は存続出来なくなり、都会を離れた場所で第一次産業に従事している者以外は、路頭に迷うだろう。

だからこそ人間は、カードを裏返すようには簡単に変化をしないのだ。まさにそれこそが人間最大の知恵であるのかもしれない。

気づいている人間が全体の一割なら、それを行動に移せる人間は、さらにその一割にも満たないだろう。しかしその気づきが二割に増えれば、行動する人間もまた増加する。そんなふうに、今はまだ目に見えなくとも、変化は少しずつ起きていく。人間が、より自然に近い生き方をゆっくり取り戻していくうちに、企業はこれまでと違う使命、それを遂行する手段を発見し、社会が健全に保たれる可能性もあるかもしれない。

この夏は、誰もが未来を不安に思うほど暑くなっている。すでに六月の終わりにから記録的暑さとなっていたが、八月に入るとさらに

状況は悪化した。都会で働く人間は、毎年のように夏の暑さに閉口している。それでも数ヶ月のことと我慢して夏をやり過ごすのが常であるが、今年の暑さはすでにそのレベルを超えていた。

高温の記録は、日々更新され続けた。これがいつまで続くのだろう、気温はどこまで上がるのだろうと考えれば、誰もがかすかな恐怖を感じた。

それでもいつか解決策が提示され、危機は回避されるに違いない。人々はみな心の奥深いところに根拠のない期待を抱いていた。昨日と同じ今日が来て、そして必ず同じような明日が来ることを漠然と信じている。世界が終わるなんてことがあるはずはない。そう信じなければ恐ろしくて眠れない。それほどにこの夏は暑く、人々は疲弊していたのだった。

第一章

「八月五日」

年々暑さが増す都会でも、これほどの暑さはじめてだ。誰もが不眠続きの毎日を過ごしていた。とくに、会社勤めの者にとっては辛いはずの眠れぬ夜も、ここまで来るとなんだか笑ってしまうほどである。この暑さはまるで大きな冗談であるかのように思えた。そう思うことで、世界の崩壊という恐ろしい予感をごまかしていたのだ。

極度の疲労により、同じことの繰り返しである日常を越えた興奮状態が、人々にもたらされていた。たとえばそれは、台風の日に風の中へ出て行きたくなる気持ち、停電の夜にろうそくを探し家族が大騒ぎした思い出、普段より遅くまで起きていることを許される子ども時代の大晦日、それらに少し似ていた。

見知らぬ他人同士でも、「暑いですね」「まったくですな」と声を掛け合えば、不思議な連帯感が生まれてしまうような、それほど常軌を逸する暑さだった。

その日、日本中の半数以上が眠れぬ夜を過している熱帯夜、深夜のニュースがある事件を伝えていた。

冷房の効かない部屋で、イライラと団扇をふりまわすビールグラス片手の中年男。冷えすぎた寝室で、「クーラーのせいで体の調子が悪いのよ、でも使わないわけにいかないでしょう、この暑さでは」と不平をこぼす主婦。眠れないからかえって勉強がはかどると机にかじりつく受験生。それぞれの部屋のテレビがそのニュースを映し出していた。

「これで同じような事件がすでに六件目となっています。」効かせ過ぎの冷房のように冷静な、アナウンサーの声が伝える。

一ヶ月ほど前から日本各地で不思議な事件が起こっていた。それは公共の場所に大金の入った封筒が置かれるというものだ。

まずはじめは、日本全国、一都一道二府四十三県に一箇所ずつ、つまり全国四十七箇所と同時に現金の入った封筒が見つかった。そのほとんどは県庁など役所や公共機関のトイレ、廊下などにひっそりと置かれ、すべてに「これは危険な金ではありません。私が働いて得た金です。どうぞ一番大切なこと、必要なことに役立ててください。」と書かれた手紙が入っていた。警察の発表によると、筆跡鑑定の結果、すべて同一人物によるものであるという。

中の金額は数万円から最高額百万円までまちまちであったが、なにしろ四十七箇所もあるのだから総額では二千万円を越えていた。四十七通の封筒はすべて、職員や一般利用者によって警察に届けられた。もっともそれがすべてであるかは置いた本人にしかわからない。しかし、ひとつの県に一箇所ずつ見つかることを思うと、やはり置かれたのは四十七箇所ではないかと想像される。一人

で同時に置くことは不可能なため、なんらかのグループが組織が手分けをして、それぞれの場所に置いたのだらうと推測されていた。

とにかく、手紙を書いたのは同じ一人の人間であることと、おそらくすべてが警察に届けられたこと以外はなにもわかっていなかった。

その後も似たような出来事が頻発し、今日のニュースで六件目である。二週間ほど前に東京駅のコインロッカーから出てきた鞆には一千万円という大金が入っていた。鞆の中には先の手紙とはまったく違う筆跡で、「おやのいない子ども、ひとりぐらしのおとしより、ホームレスの人たち、びょうきの人、こまっているみんなのためにつかってください」と書かれた紙が入っていた。それがまるで五歳くらいの子どものつたない字であつたため、なおさら人々の好奇心の的となつた。

今夜のニュースが伝えたところでは、それは東京の郊外、公共図書館の書棚から見つかったそうだ。封筒には三十八万五千円という半端な金額が入っていた。ノートの端切れのような紙には「子ども達のために本をたくさん買ってください。」と書かれていた。

この出来事が起こるたび、知事であつたり、小さな町の町長などがインタビューを受け、みな一様に、「非常にありがたいことです。できれば匿名でなく正規の寄付として申し出ていただきたい。そうすればきちんと役立てることができるのですが・・・」といった内容のことを話していた。お金を置いていく本人たちにしてもそれくらいのことにはわかっているだらう。そうでなくとも、最近の報道を見ていれば気がつくはずである。しかし一向に方法を変えないのは、なにか他に隠された意図があるのではないか、と考える者もいた。

眠れぬ主婦も、サラリーマンも、フリーターも、仕事から帰った

ばかりの水商売の人たちも、誰もがそれぞれの推測をしながらテレビを見ていた。睡眠不足が続いているのに加え、凶悪事件ではない出来事がマスコミを騒がせていることに、人々はなぜか不思議な高揚感を感じていた。「これは本物の善意なのか、それともなにか別のことが始まるうとしているのか。」誰もが疲れた頭で考えていた。

8月6日

「はい。全部で十二名です。十九時半でお願いします。Y商事の島村と申します。」

宴会予約の電話を切った後、ユリは誰にも気づかれない程度の小さなため息をついた。今夜は結婚退社する同僚の送別会だ。寝不足疲れで今日は早く帰りたい、という気持ちのため息となった。それだけでなくもうひとつ、結婚というゴールを見つけたその人に対する羨ましさ、というよりむしろ、自分の行き場のなさが無意識に頭をよぎったからでもあった。

島村ユリはこの商社で4年働いている。正社員ではなく、そして派遣社員でもない。知り合いの紹介でアルバイトとして勤務している。

大学時代、ユリは出版社への就職を目指していた。皆がそうするように、卒業後は社会に出て働くと考えたとき、特別の能力を持たない自分でも、出来るなら好きな分野の仕事をしたいと思った。

ユリの好きなもの。それは子どもの頃からずっと変わらない。読書をする事だった。小説、マンガ、雑誌、活字ならなんでも読む。映画も見ると、音楽を聴くのも好ではあるが、読書はいつもユリにとって別格の楽しみだった。

彼女は文字そのものが好きだった。はじめて絵本に触れたあの日以来、文字はずっと彼女にとって現実以上に生き生きと世界を示し続けた。漢字とひらがな、カタカナが組み合わせるそこには匂いがあり手触りがあった。より視覚に訴えるはずの映像より、もっと強烈にいきいきと、そして明確に世界を映し出した。

子どもの頃に夢中になって読んだ絵本もマンガも、今も生きる指針としてユリの無意識に深く刻まれている。子どもの頃に触れた本には、もっとも単純で、それゆえに馬鹿馬鹿しくさえ思えるシンプ

ルなルールが含まれていた。たとえば願いを叶えるには努力が必要であること、他人を傷つけてはいけないこと、誠実であることなどだ。ユリは無意識のうちに、それらから美と真実の基準を自己のうちに築き上げていた。

学校から帰り、ランドセルを放り出して大好きな本に夢中になった思い出。夏休みの午後にはカルピスの中で氷がたてるカラン、という音。そして暑さをかきたてるセミの声とともに本がそこにあった。

冬には暖かいストーブ、しゅんしゅんと音を立てるやかんの湯気。母親が台所で夕食の支度をしている、その傍らで本を読んだときほど安心感に包まれた瞬間がこれまでであっただろうか。

就職先に出版社を志望することは、迷いなく決心していた。はじめ図書館司書になる道も考えたが、本に囲まれているより創る側に回るということが、その世界の一步奥へ進めるようで魅力的に思えた。就職活動は早めに始め、大手出版社に絞り彼女なりの精一杯の努力をしたが、結果はすべて不採用だった。

すっかり気が抜けてしまったユリは、卒業後、しばらく自宅近くのショッピングモールでアルバイトをしていた。そして四年前から知り合いの口利きにより、現在の職場で働くようになったのだった。

ここでもアルバイト雇用のため責任のある仕事はさせてもらえず、周りから言われる雑用をアシスタント的に黙々とこなす毎日である。しかし仕事にはとくに不満があるわけではなかった。人に「雇われる」とはそういうことだと思っからだ。

ユリは初めて社会に出たときから、コピーひとつ頼まれても、出来るだけ能率よく工夫をして仕上げるタイプだった。コーヒーを入れるのもお茶の後片付けも率先してやり、しかも丁寧に素早くすることを考えてきた。その結果として、今ではある意味この部にとっ

てなくてはならない存在となった。

しかし、それは会社のためではなく、自分はそんな風にしていくなか、と考えていたからだ。望みの職に就けず、特別の能力もない自分は、仕事をそつなくこなしていくしかないという気持ちがあった。

そして彼女の性格もまた、今の職場に向いていたのだ。大きな会社であるほど人間性は重要になる。社員数が多いほど、人間関係をどう保つかが業務の大きな部分を左右する。彼女は役立つアルバイトとして、業務も人間関係もうまくこなしていた。

ユリは昔から人と比べて、他人に関心を持たない人間だった。他人に関心がないというのは、人間嫌いであることとは違う。むしろ彼女は人間への興味が深く、好奇心も強かったからこそ、表面的な関係にはあまり心を砕くことがないのだ。社内での、女性同士の他愛ないおしゃべりも楽しむことはできたが、彼女にとっては重要なことではなかった。だからこそ他人に合わせることもまったく苦ではなかった。人を傷つけたくないし、傷つけられたくもない。ただ煩わしいことが嫌いなのだ。いつでも誰に対しても当たり障りのない態度で接する癖がついていた。

そして競争心も少ない彼女は、これまで人から悪意をもたれることもなかった。同年代の社員たちの愚痴を聞き、つまらない冗談にもつきあう。上司にとってはよく気がつくバイトの女の子、若い社員からは頼りやすい存在として、しっかりと居場所を築いていた。与えられた仕事を確実にこなし、人間関係も円滑によい雰囲気をつくること、それが自分のここでの義務だと考えている。だからこそアルバイトとして四年を過ぎても、疎ましく思われることもなく重宝されていた。

それでも今、電話の後にもれた小さなため息は、ここ数年続く、彼女の心の中にあるもやもやした思いの表れだ。

「自分の行き場はどこにあるのか」

答えの出ない問いをずっと抱えていることに、本人が一番気づいている。しかしその答えを出すための努力は何もしていなかった。ここ数年、日々は飛ぶように過ぎていった。「正月が来たと思ったらあつという間に暮れになる。」そんな大人たちの口癖を昔は信じなかったものだが、今ではその感覚を、まさに自分自身が知っている。会社にも仕事にも不満はなく、この年齢で転職しても、際立った能力のない自分には難しいとも考えていた。ならばたとえアルバイトでも、安定した一流企業にいたほうが利口な気もする。自宅住まいの彼女にとっては生活に困ることもないわけだった。やがては結婚するのなら、それはそれでまずまずの人生に違いない。問題はただひとつ、ユリ自身が結婚にまったく意欲がわかないことだ。

今日の送別会の主役である佐々木さんは、結婚が決まってからとても幸せそうだ。

三十二歳の佐々木さんは、ユリが働き始めた頃に仕事を教えてくれた人でもあり、比較的仲良くつきあっていた。美人で勝気、性格のはつきりした佐々木さんは、ユリに対してはじめのうちは先輩風を吹かせ嫌味な態度で接してきた。「あなたはアルバイト、私は社員。あなたは私よりも格下。」という態度をあからさまに見せた。しかし、反発せず文句も言わず、仕事を黙々とこなすユリのことを次第に気に入り、なんでも「はいはい」と聞くユリに対して、心を開くようになつていった。他の女子社員とはあまり仲良くしない佐々木さんは、同僚や上司の悪口、上手くいつていない恋愛のこと、ユリにはなんでも話したがった。

ユリはユリで、佐々木さんと他の女性社員との間のいざこざなどを、多少面白がって見ているところがあつた。その多くは仕事内容や業務態度に関するのではなく、佐々木さんのぱつと目を引く華やかさや、それに付随している自意識が原因していることにも気づいていた。

これほどの大企業で、いまだにこんなステレオタイプな嫉妬がある

ことに、ユリは漫画を読んでいるかのような面白さも感じていた。それは女同士の妬みではあったかもしれないが、嫌悪を感じるほどのものでもない。底の浅い子どもものけんかと同じようなものだったからだ。

佐々木さんは他の女性社員に対しては、プライドの高い美人社員を演じているが、ユリには本音を見せていた。うまくいかない恋愛のことも正直に話すし、私は美人なのだから玉の輿に乗って当然、と言うのが口癖で、何が何でもリッチな男と結婚すると息巻いていた。この会社に入ったのもそれだけが目的だとはつきりと口にする。「なにがなんでも有閑マダムになるわよ！」と酔っ払って叫ぶときの佐々木さんは、氣どっている時の数倍正直で魅力的だとユリは思っていた。

佐々木さんは実際、そのためにお見合い、合コン、紹介、様々なパーティー出席と寸暇を惜しんで努力をし、その結果めでたく今回の退社となった。その裏側の努力を知っているのは社内では多分、ユリだけだったろう。水面下で必死に足を動かす白鳥みたいな佐々木さんは、目的がはつきりしていて格好いい、とユリは思う。

玉の輿結婚が決まるとさっそうと佐々木さんは、独身の女性社員たちにしらっと自慢をし始め、「やっぱり女の幸せは結婚」というようなことを口にし、自ら反感を買い求めていった。まわりの女性たちはまんまとそれに乗り、トイレや給湯室で、彼女に対する悪口が囁かれた。ユリも何度か耳にしたが、嫌な気分になるよりも、皆がそれぞれにドラマを演じているようにしか見えなかった。

ユリは、決めた目標に向かって奮進する佐々木さんが好きだ。しかし悪口をあちこちで聞いても、格別腹も立たないのは、その悪口を佐々木さん自身が欲していると知っていたからだ。佐々木さんは妬まれるのが好きな人だった。うぬぼれと自意識を周囲に振りまき、人がイライラするのを楽しんでいる。自分への悪口が聞こえれ

ば聞こえるほど優越感が増し、アドレナリンが放出する。佐々木さんは自分の力で理想の男を捕まえ、同僚たちの妬みをはなむけに退社していくのだ。そんな彼女のことをユリは心の中で「あっぱれ！」と感じていた。

「結婚する」とか、「人に羨ましがられる絵に描いたような幸せ」とか、ゴールが明確に決まっていたからこそ、佐々木さんはそれを手にすることが出来たのだ。自分にもそんな「なにか」があれば、行動を起こすことが出来るのだろうか。自分探しなどと右往左往するほど、自分に価値を見出していないユリは、突き詰めて考えることはせず、心の奥深くにあるもやもやがため息の原因であることを忘れようとしていた。

送別会は部全員が参加ではなかった。仕事を抱えて残業がある者もいたし、佐々木さんをライバル視している女子社員は数人、私用があるとかで不参加だ。ユリも断ることもできたが、他ならぬ佐々木さんのための会であることと、いつものように手配を任されたため、自分が抜けるわけにはいかなかった。

業務時間が終わり、早く出られる者から数人連れ立って社外へ出た。十九時を回り、仕事帰りの人達が道にあふれている。人の多さで気温も数度上昇しているのではないかと思われた。それでもビル群の隅に白く浮かぶ月だけは、ひんやりと涼しい顔をしている。しかし歩くユリたちの暑さはそうとうなものだった。冷房の効いたオフィスから出てきたせいもあり、体にまとわりつく湿った熱気が不快だ。

「うわー、サウナだ、サウナ。」大きな声を出したのは、ユリがここに来た年に入社してきた川田恭介だ。「島村さん、最近眠れますか？」とユリに聞く。「ううん、あんまり。冷房つけっぱなしで寝ると次の日がつらいからタイマーにしているけど、切れるとすぐに目が覚めちゃうの。」「そうですね。俺も毎日、寝不足ですよ。きついっすよ、マジで。」

この頃は、誰もが口を開けばこの暑さについてばかり話しているとユリは思う。

朝、出勤し、「おはようございます。」とともにまず話題になるのは昨夜の寝苦しさと通勤途中の暑さ。取引先の来客があったとき、お茶を出せばまず言われる一言が「いやあ、暑いねえ。」の一言。家へ帰って家族との会話もまずそれから始まる。友人や恋人と電話で話してもまず気温のこと。世界中の人がこの暑さを中心にして盛り上がっているのではないか、と思うほどだ。

暑い、暑い、とにかく暑い。暑さという目に見えない敵が遠くのほうからじりじりと近づき、今まさに至近距離に人間を囲み、襲い掛かるうとしていているようだ。

送別会での佐々木さんは、晴れ晴れとした笑顔で主役を務めていた。料理はおいしく、皆、上機嫌だったので、店を決めたユリはほっとしていた。

そろそろおなかも満足し、話題の中心が佐々木さんの結婚から離れ始めた頃、誰が突然あの出来事について話し始めた。

「昨日さ、また、あっただろ。あの現金を置いてくやつ。」その一言で全員が急に色めきだって自分の意見を言い始める。「みんな、ずいぶん興味があるのね。」と思いながらユリは興味深くそれぞれの意見に耳を傾けた。

「とりあえず見つけたい。そうすれば警察に届けても半年後には謝礼がもらえるから。」と言う意見。「結局は目立ちたいだけの愉快犯だ」、という意見。（それにしても資金がかかりすぎるけれど、とユリは思う。）

多かったのは、「本気で社会に役立てたいなら、きちんとした寄付の手段をとるべきだ。こんなまずいやり方は世の中をわかっていない金持ちの仕業だろう。」という意見。

「実はすべての事件はあるひとつの組織によって行われており、善行に見せかけて犯罪をたくらんでいる。それは今後徐々に明らか

になる。」というミステリーな推理。

みな自分の推測に夢中になっているようだ。ユリは「みんな寝不足ね、きつと。」と考えていた。この暑さと、そしてこの不思議な出来事、どちらもが連日つづいていることで、佐々木さんとは別のおかしなアドレナリンが出ているに違いない。

そんなユリ自身も最近は、深夜を過ぎ「八月 日、零時のニュースをお伝えします。」と言うアナウンサーの挨拶を聞いてからでないと眠れない。

実のところ、ユリはここしばらく、意識的にニュースを見ないようになっていた。

以前は帰りが遅いとき以外は、午後十一時台のニュースをよく見ていた。それをやめたのはこの春くらいからだろうか。ある日突然ぴたりと見なくなったのではなく、その前から途中でニュース以外の番組に変えたり、途中で電源を切ってしまうようになっていた。原因はひとつ、ニュースを見るたびに暗い気持ちになるからだ。

思えば自分が若かった頃、たとえば十代の頃は、世の中の事件にはもっとわかりやすさがあったと思う。凶悪な事件は今よりもずっと少なかったし、それらは怨恨であったり、お金が絡んでいたりと、ユリにとってはまったく理解できない次元で起こる事件であった。そして大人にはそんな事情もあるのだろうと想像することで、納得していた。それは自分の日常とは無関係に思えた。

現代のように理由の明確でない殺人事件や、ましてや自分自身の生活にもあり得るような小さなこと、たとえば知り合い同士のちょっとしたいざこざや、子供同士の喧嘩などが即、殺人につながるなどはそうそうあるものではなかった。

ユリが小学生の頃に、ある一家全員が惨殺される事件があった。その当時としては少ない凶悪な犯罪だった。テレビのニュースでそ

れを見た彼女は大きな恐怖と不安で、不眠になった。子どもは、社会も人間もまだよく知らない。友達と家族以外の一般的な人間はなにを考えているかも理解しない。だからこそ子どもは、自分の範疇以外のことに触れるときに必要以上の想像力を使う。知らないものに対する恐怖、恐ろしい出来事に対する恐怖は大人のそれよりもずっと大きいのだ。

この事件は当時のユリにとって常軌を逸する恐怖だった。怖くてもう学校にも行けない、と思ったものだ。しかしそこが子どもたるところだが、次の日、暗い気持ちを引きずって登校したユリは友達のおしゃべりやクラブ活動に夢中になり、すぐにその恐怖を忘れてしまった。

しかし大人になった今でも、殺人事件の報道があるとあのときの自分を思い出すことがある。今はあのような恐怖を感じなくなってしまった。そのことがユリには恐ろしかった。今日では殺人や凶悪な犯罪は毎日ある。それがごく当たり前のようになっていく。恐怖の代わりに思うのは「ああ、またか。」ということだけだ。

子どもの頃には違う次元の出来事だったことが、今や街の至るところ、電車の中、ビルの中、ごく普通の家族が住む家の中で起きている。身近に迫っているぶんだけ、恐怖感が大きくなるのが当たり前なのに、逆に小さくなっている。たぶん、すでに麻痺してしまっているのだろう。いちいち恐怖を感じていれば、生活することさえ出来ない。だから自分の感覚をごまかし、見てみぬ振りをするしかないのだ。

最近のニュースを見ると、この国全体が病んでいるように見える。社会すべてが悪意と嫌がらせの塊であるようにさえ見える。誰もが本当の問題から目をそらしている。心の深いところではなにかが間違っているように感じる。しかしもつとも間違っているのは自分なのかもしれないともユリは思っていた。そんなことから、ユリはしばらくニュース番組を遠ざけていたのだ。

そんなユリが、ここ最近ニュースを見ているのは、あの現金寄付事件の続報が気になるからだ。確かにやり方はおかしいかもしれない。でも人を傷つけることもなく、それに犯人（と呼ぶべきか？）は身銭を切るというリスクも負っている。

ユリの中には、この人たちはもしかすると、社会にはびこる虚無感に拮抗するものとしてお金をばら撒いているのではないか、という思いがあった。だからこそ、きちんと手順を踏んだ寄付のかたちをとらず、こうして人間を試すように街中に置いていくのだ。だとしたらとても面白い。その行為の奥には、なにかユーモアやエスプリが潜んでいる気がする。もし意図的にその目的を隠して行われているなら、自分がニュースを見るたびに感じる、あの嫌悪感のまったく反対の位置にある事件だ、と思う。だからユリは毎日、ニュースを見るのだった。

「私は全然違うと思うなあ。」みんなの考えを聞いていた佐々木さんが急に話し始めた。

「へえ、佐々木さんはどう思うの？」

「これはね、寄付することが目的じゃないのよ。」

「・・・ってことはやっぱり犯罪組織のしかけた罠ですか？」誰かが面白がって聞く。

「違うの。この行為を世間に知らせることが目的なのよ。ちゃんとした寄付をしてもニュースにはならないでしょう？せいぜい名前がどこかに載るくらいで誰も気にとめないわ。これは、誰だかわからない人間が世の中に役立てて下さいなんて言って、人目につく場所に大金を置いていくことが大事なのよ。お金が有効に使われるかどうかなんてどうでもいいの。」

「つまり目立ちたいってこと？」

「それもあるかもしれないけど・・・やっぱりちよつと違うな。つまりこんな大金を、もしかすると誰かに盗られちゃうかもしれないのに、トイレなんかにはぼんと置いていく。そこがミソなのよ。私

は人間を信用しますよ、こんな大金を世の中のために、街中に置いていくんですよ、ってことを見せつけてるのよ。」

「ふうん、要するに本物の善行ってことか。」

「部長、それだけじゃなくて、これをやってる人たちは、みんなからちよつと笑われたいんじゃないのかなあという気がするんです。身銭を切ってこんなところに置いてくなんてばかだなあ、って。ユーモアとか、基本的に他人を信用する人の良さとか、お金に執着しないこととか、そういう今の日本から消えそうになっているものを世間に見せようとしてるんですよ、きつと。」

ユリは佐々木さんの話に聞きいつていた。自分がなんとなく考えていたことを、彼女が明確に説明してくれたように思ったからだ。しかもこの自己中心的で、脳が中心が玉の輿結婚できている佐々木さんの口から、である。

「本当にそうかもしれないなあ。鋭い意見だねえ、佐々木さん。」上司が感心したように言った。

当の佐々木さんは、自分の結婚相手が冗談でも、たとえ善行でもこんなことをしたら笑っては済ませない、などと言って皆の笑いを誘っていた。しかし、そう言う本人の目は笑っていなかったのだ、やはり佐々木さんは佐々木さんだなあ、とユリは嬉しく思った。

ユリが自宅に着いたのは零時を回った頃だった。勤務地から自宅までは地下鉄と電車乗り継いで約五十分。その混み合った電車の中で、ユリはもう一度佐々木さんのことを考えていた。佐々木さんはやっぱり面白い人だった。でもさっきの話、どうして自分と同じことを考えていたのだろうか。まるで私の考えをはっきりさせるために話しているみたいだった。佐々木さんがあんなことを考えていたのがとても意外に思えた。

私は、あの事件にどこか救いのようなものを感じていたのだとユリは思う。世間で起こる、悲しい出来事に感じる虚無感を洗い流してくれるものとして。

シャワーを浴びた後、冷たい水を飲みながらテレビをつけると情報番組が流れていた。

「都内でまた封筒入りの現金が見つかったそうですよ。」

司会者の声に、ユリはタオルを手にベッドに腰掛けるとテレビ画面を見つめた。今回は百万円が入っていたと伝えられた。これまでと違っていたのはやけに長い手紙が同封されていたことだ。その手紙には、ここにお金を置いていく理由やその人の事情などがこと細かく書かれていたそうだ。

番組がざっと伝えた内容によれば、その人は病気を抱えた老齢の女性で、まもなく来る死を確信している。死後に必要ないくらいのお金を除いては必要がなくなった。最近のニュースを見ていて、これだ！と思い、同じようにこの金を置いていくことに決めた、というのが、手紙には夫に先立たれたことや、嫁と折り合いが悪いとか、息子は頼りにならないなどの愚痴めいたこと。生まれてからの半生のあらまし、結婚前の恋愛や、趣味の短歌にいかにも才能があつたかなど、誰に伝えたいのか思いのたけを吐き出した、書きたいことを書き放題の手紙だったらしい。

ユリは思わず、くすりと笑ってしまった。この女性は病気だというし、たしかに苦労続きの人生を送ってきたのだろう。お金を残す人もない孤独な身の上だ。笑うのは不謹慎だが、でもこの十数枚の手紙を同封するパワーは素晴らしい、と思ったのだ。佐々木さんではないが、あっぱれではないか。

ニュースを見て実行する行動力。嫁の悪口も自分の短歌への情熱もここにぶちまけて、自分のささやかな貯金が世の中に役立つことを願ってこっそり置いていく。もうすぐ終わるかもしれない彼女の人生はこの行為によって晴れやかなものになっただろう。

この手紙が、本当にこのおばあさんによって書かれた真実のものなのかは誰にもわからない。送別会で誰かが言っていたように、日本中がだまされているのかもしれない。それでも私は佐々木さんの

意見に賛成だ。なぜかこの一連の出来事を悪くとりたくはないと思
った。

明日もきつと暑いだろうと思いつつ、ユリはベッドに入った。

8月10日

暑さはさらに激しくなっていた。今朝の新聞には、街中で倒れ救急車で運ばれる人や、自宅で体調を崩す老人が増加しているとある。連日、こういった暑さに関する記事を目にすると、いやでも、胸騒ぎを感じずにはいられなかった。

休日、暑さのせいで早い時間に目覚めたユリは、新聞をすみずみまで読み、もてあまし気味の時間を過していた。新聞の長期予想によるとこの暑さはまだまだ続くところ。いったいいつまで続くのだろうと思うと、体から力が抜けるような気がした。

ユリは昨夜の佐々木さんの、幸福に上気する笑顔を思い出していた。自らの努力でゴールした人の笑顔は本物だ。ゴールに向かつて駆け抜ける人生のすがすがしさをユリは想像する。佐々木さんの笑顔はそれを裏づけるものだった。私は走り出してもいないし、それどころかゴールがどこにあるかさえ見えていない。それはユリにとって不安なことだった。

佐々木さんにとっての「結婚」のように、自分にも「幸福」のかたちはどこかに存在するだろうか。

幸福とはいったいなんだろう。幸福、という言葉の中にある甘い香り、憧れ。人はそのイメージを、それぞれの心の中で膨らませて生きている。それは、想像力の欠如した時代ほどわかりやすく単純なものになるのだろう。立派な邸宅、あふれる贅沢品、豊かな食事、人に勝る教育や健康、生まれや職業。それらが幸福の象徴になる。

しかし、この言葉の中にあるその芳しさは、そんな単純なものや、努力や計算によって得られるものではない。世界が調和し、完璧な姿を見せる瞬間、そんな偶然の産物だ。

たとえば、愛する人もまた自分を愛してくれる偶然。恐れも焦り

も手放し、ひたすら安らぎに包まれる瞬間。それは一瞬であると同時に、まるで生まれる前から続いてきたような、そしてこれからも永遠に続くような感覚をもたらす。それは時間や現実を越える。

ユリはひとつだけ、その幸福の形を知っていた。しかし今では、その貴重さを忘れてしまつてもいる。それは子ども時代、読書に没頭したあの時間だ。彼女が本やマンガの中から拾い上げたものは、人生の輝く道しるべでもあった。

読書をするときのユリは、曖昧ではあるが、世界とは何であるのかを捉えられるような感覚に包まれることがあった。そのとき、胸の中に暖かいものがわきあがってくる。その一瞬は、自分がどう生きるべきかという、とりとめのない問いの答えを指し示していた。

幼い頃のユリはけっして本ばかり読んでいたわけではない。友達と外で遊ぶことも楽しかった。子どものユリには、そうすることは当然であつたし、本を読んでいるだけでは発散しきれないエネルギーがあつたからだ。また、彼女の中には自分が求めているイメージと、現実の世界とのバランスを取ろうとする力が無意識に働いていた。そのため、読書だけに溺れることもなく、ごく普通の子どもとしての毎日をおくつた。

しかし、彼女が本当に心惹かれたのは、書物の中の世界だ。物語の中に理想や輝きを多く見出したユリは、逆に現実世界は、自分の都合よく進むとは限らないこと、理解しきれないものがあることを早くから知っていた。ときには、現実のほうが現実味がないと感じることもあった。書物の中では共感できる人物にも出会えた。その中にこそ親しみとつながりがあるように感じた。

それはユリに、現実や他人を、外側から客観的に眺める癖をつけた。現実の世界では自分自身も含め、誰もがなにか演技をしているように見えることさえあった。

ユリ自身はそんな自分の感覚を、人とは違うものとして嫌悪している。周囲の人間たちは、自分と比べて、もっと自然に現実と関わ

っているように見える。自分だけが、現実と一枚の薄い膜で隔てられ、それ越しにしか物事を捉えられていないと感じていた。

私は、いつの間にか、自分だけの観念世界の中にいるのではないだろうか。ユリの中にはそんな疑問と不安がいつも存在していた。

その日の夜、今日は少し早めに眠ろうとユリは考えていた。寝不足続きで、疲労が蓄積している。寝る身支度を整えてから何気なくテレビをつけた。ちょうどニュースの時間だ。「もしかして、またお金が置かれているかも。」と思い、しばらくそのまま見ることにした。

メインで報道されていたのは、現金置き去り事件ではなく、ある詐欺事件だ。特に驚くような内容ではなく、今ではありふれた事件のひとつになっている。これに類似した事件は頻繁に起きている。

健康食品や健康器具を扱う会社が、新たな器具を開発するにおいて、健康食品などを定期的に購入する会員から金を集めた。器具が販売された後、毎月の配当金があるという話に乗った会員たちは総額で数十億円を出資したが、一向にそれは果たされなかった。

会員からの訴えで明るみに出たが、その後の調査により、販売されていた食品のいくつかは、化学的にまったく効能のないことが判明したため、さらに大きな問題に発展した。そして、数日前から姿をくらましていた代表の男が、今日逮捕されたのだった。

テレビには出資した会員が顔を隠し、音声を変えインタビューに答える姿が映っていた。怒り心頭の様子で、「金を返して欲しい。」と声を荒げていた。

以前、ここで働いていたという従業員も、インタビューを受けていた。その男性の話では、従業員たちはかなりひどい労働条件で働いていたようだ。安い賃金、残業代無しの超過労働。ワンマンで筋の通らないことを押し通す、社長を含む重役たちへの絶対的服従の

強制。

「会社は人を騙して利益をあげているだけで、ちゃんとした仕事で稼いでるわけじゃない。結局、社員なんて表向きの飾りみたいなもので、上にとつては必要ないんですよ。給料払う分だけ損しているという感覚だったんじゃないですかね。私たちの生活はこれからどうなるんでしょう。」その男性は吐き捨てるように言った。

それに続いてテレビ画面は、社長の贅沢三昧の様子を映し出した。自宅は都心の一等地にあるけばしい洋館だ。駐車場に残されたままのスポーツカー、他にも数台の車が止まっている。

本社の最上階にあるという社長室にもテレビカメラが入っていた。ドアを入りすぐ脇には、張りぼてのような大きな石膏彫刻が置かれ、壁には彫刻とは調和のない、奇抜な現代絵画が掛けられている。派手な色の革張りのソファ、バロック調のテーブル。土産物屋にあるような大きいだけの東洋磁器、大げさな縁取りにドレープを寄せたカーテンは、温泉ホテルの宴会場を思わせる。見事なほどに、贅沢のみを押し出し、その結果、みすばらしさが浮き彫りになった室内装飾だ。

この手のニュースを見るたびユリは、「これっていつかの事件と同じじゃない？」と思う。それほど似たような事件は多い。これまでいくつの会社が、これと似た手口の詐欺を働いただろう。なのに、なおもまた同じことが起きるのがユリには不思議でしかたない。なぜこんな使い古された手口で、自らの欲望を満たそうとするのか。たとえ短い期間、思うままの生活を送っても、必ず破綻することは目に見えている。これまでに報道された、多くの似たような事件がそれを伝えていたではないか。

お金を出す人たちも、なぜいとも簡単に信用してしまうのだろうか。もしこれが合法的なビジネスであったとしても、これまでの事件を思い起こせば必要以上に慎重になるべきだっただろう。その不思議

こそがいわゆる「欲に目がくらむ」という状態なのだろうか。

次にテレビ画面は、社長が連行される様子を映していた。その男の表情を見ながら、ユリは考えていた。この事件だけではなく、大きな犯罪があるたびに感じることであった。

それは、稀代の悪人とされる人間の中に見える、「怯え」と「恐れ」の色だ。金の力によって権力を手にし、欲望を満たそうとする人間たち。

しかし、ユリには彼らこそが誰よりも人間や社会を恐れ、穴の中に隠れる小動物のように見えた。悪事を働くゆえに小さな人間であるという認識ではなく、もっと深い神経症的なものであり、ユリのような平凡な人間には想像のつかない、「恐怖感」がその根底にあるのだろうという気がした。

金や権力に執着する人間は、世界に対する防御としてそれを欲すると同時に、巨大化した欲望が暴走して、理想の小世界を築こうとするのか。それが合法的か、持続性があるかなどはどうでもいい。そうするしか行き場所が見つからないのだろう。自分の幸福に向かうはずの「欲望」であるはずなのに、彼らが持つ、巨大化して自己を超えた「欲望」は不幸へと向かうためのものでしかない。

そんな日々はなんて辛く恐ろしいものだろう、とユリは想像した。人はどんなきつかけによって、そのような恐ろしい生活を生きるようになってしまうのだろう。

8月11日

仕事帰りの電車の中、ユリは一冊の本を開いた。昨日、近所の古本屋へ出かけ、購入したうちの一冊だった。それは、フランソワーズ・サガンのインタビュー集だ。タイトルは「愛と同じくらい孤独」。この短い言葉がユリの心を惹きつけた。人間の哀しみを端的に表している、と思えた。

人は愛を知らないから孤独なのではない。愛を深く知る人間ほど抱える孤独も大きい。愛と孤独は比例関係にある、とユリは思う。これまでにサガンの小説は数冊読んだことがあった。「悲しみよこんにちは」、「ブラームスはお好き」などの有名な作品だ。インタビューをまとめたものが出版されていることは知らなかった。昨日この本を見つけると、タイトルと内容がどうつながっているのかはどうしても気になり、購入したのだった。

読み進むうち、作家のある発言がユリの心に引っかかった。

「卑怯なことは一度もしたことはありません。自分が恥に思うことは一度もしたことはありません。人を信用しないよりは自分がだまされたほうがいい、それは確かです。道徳上の唯一のルールは、出来るだけ完全に善人であること、人に対して完全にひらかれているということです。これは絶対に安全です。」

この言葉の意味が、ユリにはとてもよくわかる気がした。多分、サガンは正義感からこう言ったのではない。正しくあるためにそうするわけでもない。人が安全に、心穏やかに生活するための手段として、善人であれと言っているのだ。

出来るだけ完全に善人であること、完全に開かれているということ。それは損をすることだと言わんばかりの人間が多い今、これは確かに安全で、少なくとも平穏でいられる一番の方法だとユリも思う。

ユリは、自分にも小さな嘘や、人を傷つけることがあると気づいてもいる。いつも常識や礼儀にかなうわけではない、自分の弱さも知っている。それでも、社会や他人に身構え、心を閉じてしまうほどではない。

昨夜のニュースをユリは思った。逮捕された、あの社長の目の中にある暗さを思い出していた。そこには外界に対する怯えと恐れ、それを跳ね返すための恨みのようにすさんだものがあつた。贅沢の限りを尽くした生活の中で、彼は心の安らぎなどけっして知ることはなかっただろう。

このインタビュー集のサガンは、回転が速くユーモアがあり、自由で、そして天真爛漫な人物だった。しかし、裕福な家庭に育ち、早くから成功したせいかわ、どこか現実離れしているようでもある。けっして不幸そうではないが、自分の中に誰とも分かち合えない孤独を抱えているように感じられた。この本の中にいる女性は、まさに愛と同じくらい孤独を知る人間に見えた。

しばらく読むとまた心に留まる言葉を見つけた。

「二種類の幸福があります、まず事故のようにおとずれる幸福、頭の上に石が落ちるようなもの。たとえば恋愛、もちろん相思相愛。それと、もうひとつの幸福は、人生を愛して、人生と礼儀正しく振舞うことです。するとたいいていの場合、人生がお返しをしてくれます。」

とても素敵な言葉だ。この言葉には明るい光がある、と思った。人間の幸福と不幸は、偶然による「運」でしかないというどうしようもなさなたいし、行く道を照らす小さな光だ。

運命は選べるものではなく、人間は風にまかせて舞う木の葉のように、落下する場所を自分で選ぶことは出来ない。それを事実だと認めるのはユリには難しいことだった。ユリ自身は、自分が行き着

きたい先をまだ見つけていない。しかし、心のどこかで運命は自分で選択できる、という根拠のない希望を抱いていた。

このサガンの言葉は、人には自由がある、選択権を持っているという意味に思えた。幸福は偶然ではない。自分で選択可能なひとつの道だ。

気づくと自宅の駅に電車が近づいており、ユリは本を閉じると電車を降りた。

フ

ランソワーズサガン／愛と同じくらい孤独／新潮文庫／朝吹由紀子訳

8月12日

その日の昼休み、佐々木さんが一緒に昼食をとろうと声をかけてきた。

「一緒にランチするのも今日で最後ね。」佐々木さんが感慨深げに言った。今日は彼女の最後の出勤日だ。明日からユリは短い夏の休暇にはいる。

最終日の今日、佐々木さんは結婚の幸福感を周囲にふりまくかのように、いつにも増しておしゃれで綺麗だった。

仕事で嫌なことがあったとき、感情的になつて、ユリに愚痴をぶちまけながら酔っ払う姿を見せたこともある佐々木さんだが、そんなことがあった次の日には、よりいっそうおしゃれをし、弱みなどないと言いたげな強気な顔で出社していた。なにより、佐々木さんは仕事への努力を惜しまず、完璧を求める人だった。そんな佐々木さんをユリは好きだった。自分で望んだ結婚退社ではあっても、十年間勤めた会社を辞めるのは、やはり淋しいものであるだろう。

二人は一緒に会社を出ると、よく行っていた和食屋へ入った。そこは他の社員たちも多く利用しており、今日も同じ部の上司、同僚たちの姿も見えた。

「お疲れさん。」声をかけてきたのはユリたちの部署の部長だ。

「佐々木さん、ついに最後の日になっちゃったね。君が辞めてしまふのは残念だけど、元気で幸せにやってよ。」

「ありがとうございます。」

「ここ、一緒にいいかな。お昼はご馳走するよ。なんでも好きなものの頼みなさい。ああ、もちろん島村さんもね。」

三人は来月に控えた佐々木さんの結婚式の話などをしつつ、なごやかに昼食を終えた。新しく淹れられたお茶を飲みながら、部長は脇に抱えてきていた新聞を読んでいる。ユリは、佐々木さんと彼女

の新居について話し込んでいた。

「このニュース、なんだか気の毒な話だね。」急に部長が顔を上げて、二人に話しかけた。

「どのニュースですか？」

「うん。このコンビニ強盗の事件だよ。知ってるかい？アルバイト店員が事情聴取を受けてるっていう話。」

「ああ、それ今朝のニュースで見ました。」どうやら佐々木さんは知っているらしい。朝はテレビをつけないユリだけがその内容を知らなかった。「私、見ていないのですが、どんなニュースですか。」ユリが尋ねると二人は知っている限りの内容を教えてくれた。

一昨日の早朝、N県、小さな町のコンビニエンスストアに強盗が入った。人口も少ないこの小さな町では、その時間帯、店にも周囲にも誰もいないことが多い。その日もアルバイトの大学生が一人で店番をしていた。そこへ強盗が入ったのだ。

小さな果物ナイフを手に、レジから金を出して渡せと店員に迫った。擦り切れた野球帽を目深にかぶり、サングラスにマスクで顔を隠してはいたが、声の調子や雰囲気で犯人が若くないことを店員はすぐに見てとった。ナイフを持つ手は震え、犯人のほうが逆に後ずさりをしている。いかにも怯えている様子を見て、店員はカウンターの後ろに隠していたゴルフクラブを手に取り、声には出さずに「来るなら来い！」という風に構えた。

ゴルフクラブは、頻繁に起こるコンビニ強盗のニュースに、店長が備えとして用意したものだった。アルバイトたちは「一応、これを置いておく。でも無理はするな。危険な目にあうよりもさっさと金を渡して外へ追い出すんだぞ。」と常日頃、言い渡されていた。

その日、店番をしていたこの大学生も、無理に強盗に向かっている気などなかったのだが、この弱々しい中年強盗なら金を渡さずに追い払うことが出来そうだと感じた。いつも世話になっている店長

のためにも、という考えが一瞬頭によぎり、とつさにクラブを手にしたのだ。男の子は声を発さずにクラブをさらに前方にかかげた。するとそれだけで犯人はすっかり怖気づいてしまい、ナイフを床に落とすものすごい勢いで店から飛び出していった。

ここまでなら何事もなくてよかった、で済む事件であり、捜査はされても新聞に大きく取り上げられることも、このランチの席で話題に上ることもなかっただろう。この事件が人々の興味を引いたのは、そのあとの出来事によって、だった。

大学生は逃げる強盗を追いかけた。くたびれ果てた末に強盗に踏み切った中年男と、二十歳の若者では、どちらが早いかは明らかだ。おまけに彼は運動部で活躍する、体力も腕力もある若者だった。足をもつれさせながら逃げる犯人に、あつという間に追いつき覆いかぶさると、ナイフも店内に落としてきてしまった犯人は、抵抗する術もなく、男の子の下になってひたすらもがくだけだった。

「さつさと警察に突き出してくれ。」と犯人は心の中で叫んでいた。彼ははじめから、ナイフで誰かを傷つけることなど考えてもいなかった。うまくいけばいくらかの金を手にし、食事が出来る。それだけでいいと思っていた。この何日もまともに食べ物を口にしていないのだ。とにかく腹が減っていた。そのあとのことは何も考えではない。たとえ失敗しても刑務所に入れば、とりあえず、眠る場所と食べ物が確保できる。しかし、こんなにかんたんに捕まることは想定していなかった。「もうだめだ。腹が減って目が回る。サングラスもマスクもずれ落ち、男はその気弱な顔に、情けないあきらめの表情を浮かべていた。

そのときにこの大学生がとった行動は犯人を殴ることで、警察に連絡することでもなかったのだ。彼はジーンズのポケットから自分の財布を取り出すと、そこから一万円札を数枚取り出し、犯人に手渡した。「これ店の金じゃないから大丈夫だ。今日、銀行からおろしたばかりの俺のバイト代だから。持って行きなよ。」そう言う

と、わけがわからず身動きもできない犯人の手に握らせて、さつさと店に向かって戻っていったのだ。

自分の犯した犯行と、思いがけない店員の行動に動揺した犯人は、その金を手に握ったまま、よろよろと走って逃げた。「いたいなんなんだ、あのガキは・・・。」とつぶやきながら。とにかく、少しでも遠くへ行ってからなにか食べようと逃げてきた男は、どちらにしろもうすぐ騒ぎになるだろうと思っていた。あいつ、なにを同情したのか知らないが、今頃は慌てて警察に通報しているだろう。

「俺も、指名手配犯かなあ・・・。」そう思うと、思いがけず涙が浮かんだ。

彼の人生はずっと運がなく、貧乏続きだった。これまでもけちな嘘や悪事はいくつかあったが、さすがに強盗ははじめてだ。先も短い、こんな年齢になつてついにこんなことをしてしまったと思うと、堪えても喉の奥から泣き声がもれた。

擦り切れ汚れたズボンのポケットから、さっきの金を取り出して数えてみると、四万円あった。「バイトした金だと言ってたな。なんで渡してよこしたんだろう。」強盗相手に親切にする被害者など聞いたこともない。なにか裏があるのか。泳がせておいて今頃は警察が探し回っているのかもしれない。しかし今はそんなことはどうでもよく、とにかくどこかで食事をとろうと、男はまた歩き出した。

夏の夜明けは早く、空は白みかけている。その片隅には静かに薄れゆく月が男を見おろしていた。

すでに老人と言ってもおかしくない犯人にとって、食事をするとは、コンビニ弁当などではなく、あくまでも食堂ですることだ。田舎町では、深夜営業の店などなく、男はひたすら食堂が開店する時間を待つて歩き続けた。

やっと食堂が開いた頃には、すでにまったく知らない場所まで歩

いていた。一軒のさびれた食堂を見つけると中へ入る。そこは薄汚れた雰囲気の中華料理店で、テーブルには昨日から残っているような食べこぼしがあり、彼が席についても、それを拭き取るうともしない愛想の悪い中年女性が給仕をしている。その目は「こんな昼前からあれこれ注文して面倒な客だよ。おまけに身なりも汚いしねえ・・。」と言っているように冷たく彼を睨みつけた。しかし、男にとってそんなことは気にもならなかった。テーブルに座り、出来立ての温かい食事が取れるということ。そして味はどうあれ、満腹になるまで食べること。それが今の男にとってどれほど幸せなことであつたか。

食欲を満たしている間は、ついさつき自分がだいそれた罪を犯したばかりであることさえ、忘れていた。食欲という基本的な欲求は、ごく単純に沸きあがり、それを満たすことはやはりごく単純に幸せなことだった。

あつという間に食べ終わった男は、先ほどの金で支払いをすると店のおばさんに「ごちそうさまでした。おいしかったです。」と頭を下げた。おばさんは、ありがとうございます、さえ言わずに男をじろりと見たが、普段言われたことのない、「おいしかった」という感想には、まんざらでもない嬉しさを感じたのだった。

久しぶりに満腹になった腹を抱えて、男はまたぶらぶらと町を歩き続けた。頭の中には様々なことが浮かんでは消えた。これまでのついていない人生。家賃が払えずに追い出されたアパートにはもう入れなくなっていた。頼っていた親類には露骨に迷惑な顔をされた。親兄弟も家族もないし、行くところもない。そして、自分がさきほど強盗という犯罪を犯してきたことを思った。それを思い出すと自分の人生はすでに終わってしまったのだと感じた。

その日も午前中から、ぐんぐんと気温は上がっている。いったい今年の暑さはどうなってるんだ、神様がおかしくなったとしか思えないような暑さだ、と男は思った。本当になにもかかもおかしくな

っている。なぜ、勇氣もない、若くもない自分が、あんなことをしてしまったのだろう。この暑さのせいだったのではないか、とさえ思えた。

ふとポケットに手を入れ、そこに入っている金にふれてみた。「あいつ、店の金じゃなくて自分の金だから安心しろ、とかなんとか言っていたな。あのガキこそ、暑さで頭がおかしくなっているんじゃないだろうか。これで逃げろってことなのか？それより、せつかく稼いだ金を俺なんかにくれちまって、大丈夫なのか？次の給料日まで暮らせるのだろうか。これ、返してやったほうがいいんじゃないかなあ。」

男は、追われているかもしれないという不安に怯えながらも、実は犯罪を犯す前より、今のほうが幸福であることに気づいていた。それは単純にお腹が満たされているからだだった。空腹のときは本当に切羽詰っていたのだ。なにも考えられず、他の選択肢はないと思いきみ、罪を犯した。

「俺みたいにくずみたい人間は、強盗をやったって、泥棒したって、うまくいきつこないんだ。さっきだって完全に失敗だ。おまけに店員には顔を見られて。本当なら今だって腹減ったままで、うろろしてるか、あるいは警察に突き出されていたんだ。でも今、俺はこんなに満腹だ。それは、あいつの、あのガキのおかげなんだよなあ。さっきのラーメンもチャーハンもうまかった。本当にうまかった。この先、なにやったらどうしようもないなら、この金、返してやるのが筋じゃないだろうか。」

さきほどから彼がうろろと歩き回っていたのは、警察から身を隠すためではなかった。お金を手渡してくれた男の子の顔が頭に浮かんでは消え、そのたびに「金を返してやりたい。」という思いにかられた。

馬鹿馬鹿しい考えたとはわかっている。手に入れた金を返しに行く強盗がどこにいるというのだ。何度も何度も金を受け取る若者の

姿を想像し、そのたびにまた打ち消しながら、歩き続けていた。

しかし彼には最初からわかっていた。もし強盗がうまくいったら、かなりの金を手にしたところで、その先の人生があるわけではないことを。罪を犯したのはもう行き場がなかったからだ。切羽詰まり、悲しくて、誰一人味方もなく、この世のすべてから見放されたと思っただけだ。すべてがどうでもよかったのだ。ただ、腹が減って疲れきり、なにか食べたかっただけだ。そしてたったそれだけのために自分は罪を犯してしまったのだ。

今、食欲は満たされていた。強盗の目的は果たしたのだった。この先の人生などないに等しいが、しかし、たったひとつだけ自分に出ることがあるなら、それは若者に金を返してやることだと思えた。

それを思うたびに彼は少し幸せな気分になった。少なくとも、この先、警察に怯えて、貧しい生活が続けるよりは、甘く魅惑的な匂いがした。

男はしばらく駅前のベンチに座り、その幸福な考えを頭の中で玩んだ。若者はこの金を強盗が返してくれたと知ったら驚くだろうし、もしかすると喜んでくれるかもしれない、と男は思った。そして、彼はゆっくりと警察署に向かって歩き始めた。

「それで強盗は結局、自首したんだけど、警察で、男の子に返してくれて言って、ポケットからお金を出したんだよ。飯食った分のおつりで三万七千円ほどあったらしい。律儀に一円単位まできれいに並べて、『申し訳ないが飯を食った分だけ使わせてもらった。残りは全額返してあげてほしい。』って言ったんだって。『部長が説明してくれた。』

「でもね、それってせつかくの強盗の善意だったんだけど、その男の子は警察に届け出も出してなくて、おまけにいったん捕まえた犯人を故意に逃がしたってことで、警察に呼ばれちゃったんだっ

て。」「佐々木さんが付け加える。

「犯人も小さなナイフなんかちらつかせて、よほどびくびくしてたんだろうなあ。その店員は、男を見て金に困ってるようだったし、本当の悪人には見えなくて、自分の金を渡しちゃったと言ってるそうだよ。」「

「でも、犯罪者には違いなしね。そのあとでもつと凶悪な事件を起こさないと限らないでしょう。だからニュースでは、自己中心的な判断だつて言つて、その男の子に案外批判的なよ。」「

事件をまったく知らなかったユリは、興味深く二人の話を聞いた。確かに店員の行為は軽率であつただろう。しかし犯人はそれに応えた。食事をしたおつりを返すためだけに、自首をしたのだ。

ユリの胸になにか説明のつかない思いがわいた。まだ明らかになつていない重要なことが、この事件に隠されているような気がした。そしてそれは、あの現金置き去り事件とどこかでつながっているようにも思えた。先日、佐々木さんが話していたことの中にヒントがあるようでもあつた。しかし、つながりの根にあるものがなにであるか、まだ誰にもわかつていなかった。

8月12日(2)

その日、ユリは会社帰りに、学生時代からの友人と食事の約束をしていた。定刻で退社したユリは帰り際、佐々木さんに挨拶をしたが、結婚式でまたすぐに会えるので別れの実感はありません。それでもこの場所で会うことはもうないということが寂しくもあった。

今夜、約束をしている友人の祥子は、ユリとはまったく違う個性の持ち主だ。

学生時代、ユリが、恋愛や友人関係を少し離れたところから見してしまうのにたいして、祥子にとってはそれこそが人生そのものであるようだった。常に誰かに恋をしており、それが壊れそうになると、なんとか維持しようと努力をする。自分で納得するまでは、絶対にかんたんにあきらめたりはしない。

友人関係においてもそうだ。ユリと意見が合わないときも、祥子はどちらかが折れるまで食い下がり、そんなとき、ユリが何気なく彼女を避けても、話の決着がつくまでは口論を避けようとはしなかった。

そういう祥子を数年間見てきたユリは、彼女は間違いなく現実の中で生きている人間だ、と感じていた。自分がいつも世界との間に引いている境界線、それを祥子につくらなかった。いつも自分をさらけ出し他人と関わりあう。

それゆえ学生時代の祥子は、ユリより傷つくことも多かったはずだ。恋愛に関することではいつも悩みを抱え、ごたごたしていた。同じサークルに所属する他大学の女の子と争いを起こしたり、恋愛を掛け持ちしたり、あるいはされたりと忙しかった。

当時のユリは、いつも祥子に恋愛相談を持ちかけられ、夜中に泣きつかれることも幾度となくあった。「面倒だなあ」と思うことあったが、それでも、そんな祥子をまぶしく感じていた。そこまで

恋愛にのめりこみ、感情を露にするのは、泣き続ける彼女の外見とは反対に、ある種の快感もあるのではないかと想像した。一途にのめりこめる対象がある祥子が羨ましくも見えた。どれほど傷ついても恋にぶつかっていく姿を見ていると、そこに彼女のたくましさがあると思つたし、彼女が愚痴をこぼしても、根底にはポジティブなものであることがわかつていた。

祥子は納得するまでは頑張るが、これ以上はどうにもならないと悟ると、自分を貶めるようなことは決してしない。そのときは、別人になったようにあつさり次と次の恋へと向かうのが常だった。そしてもうひとつ、恋愛中は、その恋について愚痴つても、恋が終わった後に、別れた恋人の悪口や後悔を口にすることはしなかった。

そんな祥子に、ユリは佐々木さんと共通するものを感じていた。二人は自分と比較すると、「女度」が高い、と思う。観念ではなく、現実の中にどんどん飛び込んで生きている。そして最終的には、自分を守る強さを持っている。そういう力を持つ女性をユリは素晴らしいと思うのだった。ユリも本能的に自分を守ってはいたが、子どもを生み育てていく覚悟を無意識のうちに持つ、女性本来の強さやサバイバル能力に欠けていた。自分はどこか大人になりきれていないと感じていた。それは、パズルの最後のひとピースのように、自分に欠けている重要な部分であるような気がしていた。

約束の時間を過ぎて、カフェに入ると祥子が奥のほうのテーブルで手を振っている姿が見える。「ごめんね。待ってた？」久しぶりに会った祥子は相変わらず身綺麗にしている。

彼女は大学を卒業後、一度就職したが一年ほどですぐに結婚退社し、その後は専業主婦をしている。まだ子どもには恵まれておらず、夫が年齢が離れており理解もあるため、趣味を楽しむ優雅な主婦生活だ。そのせいか、学生時代とさほど変化のない雰囲気のまま、服装もいかにも恵まれた主婦らしい、甘くふわふわした印象のもの

だった。それは祥子の女性らしい風貌にとっても似合っていて、ユリにとってはこのイメージ以外の祥子など想像もつかないのだった。

久しぶりに会った二人はしばらく、共通の友人たちの噂など話が弾む。前に会ったのは今と同じ夏、もう一年近くも前だが、こうして会えば学生時代と同じように話せる友人だ。祥子と話しているとユリは将来の不安などなかった十代の自分に戻ったような気がする。その後、二人は店を変えて食事をした。ユリが、いつもどおりの祥子だと思っていたことが、そうではないと知ったのは、デザートが運ばれてきた後だった。

祥子はおいしそうにデザートを口に運びながら、「私、最近、デザートも結構凝ったものとか作れるようになったのよね。」と言った。

「へえ。いいなあ。祥子は元々料理大得意だったものね。旦那さんも幸せよね。」

「ユリはさ、まだ結婚とかしないの？」

「うん。とくに考えてないけど。」

「どうして？彼とはいつかは結婚するつもりなんでしょう。私たち、もうすぐ三十歳よ。焦ったりしないわけ？」

「焦りはあるよ。でも結婚に対してじゃないの。」

「じゃあ、なんに対しての焦りよ。」

祥子の問いに答えるのはあまり気が進まなかった。あまりにも子どもっぽい考えだと笑われそうだと思ったからだ。

「何よ。何に焦ってるの？仕事のこととか？」答えるまでは引き下がる祥子ではない。ユリはそう思い、口を開いた。

「あのね、くだらないって笑わないでね。」

「さあ、どうかな。いいから早くいいなさいよ。」

「私、結婚したいって気持ち全然起きないの。彼とはいっかはするかもしれないけど、今はそんな実感もわなくて。それより、今は違うことで焦りがあるんだ。」自分が大人になりきれない焦り、

などと言えば、ばかばかしいと言われるだろうか。

「だから、それが何なのって聞いているんじゃないの。」

「自分でもよくわからないのよ。ただ自分の理想の人生が、出来れば自分の力で自由に生きていけるといいなあっていうようなことなの。」

「なにそれ。結局、独身でいたいってこと？仕事で成功したいとか？」

「まさか。私なんてなんの才能があるわけでもないし。そういうことでもないんだけど、ただ、ちっちゃなことでもいいからなにか好きなことを仕事にして、それをずっと一生続けていくような、そんな生き方をしたいのよ。なにかに縛られてしまうのが恐いんだと思う。」

「それでなによ。なにか一生続けたいようなやりたいこととかあるの？」

「祥子の言葉がやや責めるような調子を帯びてくる。」

「それがないから焦ってるのよ。だけど、結婚しちゃうと、なにも見つけれなくなってしまう気がして。それはわがままな考えだとは思っけど。ねえ、人生って、どう生きるのがいちばんいいのかな。」

「いい年をして、何を子どもみたいなこと言ってるのよ。そんなこと言って、結婚もせずにいるとあつという間に年をとるわよ。今の会社も、いつまでいられるかわからないでしょう。私たちなんて将来、年金ももらえないかもしれないのよ。そのうち彼のほうが心変わりすることだってあるかもしれないんだから。夢みたいなこと言ってないでしっかり考えなさいよ。」

祥子が早口でまくし立てると、やはり思ったとおりの反応だったと思い、ユリは話したことを後悔した。その通りであることは、ユリも充分にわかっていた。だがその反面、働いて自分を養っていくことくらい、本気ならば不可能ではないだろうとも思っていた。

問題はそう生きた結果、いつか死ぬ日が来たときに、果たして満足だったと思っただけで死ぬるかどうかだ。ただ眠って起きて、食べるために働き、孤独に生きていくことを望んではいるのではない。結婚

をしてもしなくても、自分の好きなように生きたと思える人生にしたい、その思いがユリには強くあった。しかし、その条件は果たして何なのだろう。それが人それぞれ違うものであるなら、自分にとってのそれはどんなものなのだろう。

「ねえ、ユリ、あなた、自分探しとか言つて、目的もなく外国へ行つたり、おかしなセミナーとかに出たりするのはやめなさいよ。」
「そんなこと考えてないわよ。どうすればいいかわからないからこそ、生活のことは現実的に考えているつもりだもの。」

「なに言ってるのよ。今の会社だつて自活できるほどお給料もらつてないくせに。親のすねかじりだから、居心地のいい会社でアルバイトなんかしてられるんじゃないの。本気で自分で生きようと思うなら自活するのが基本じゃないの。」痛いところをつかれた、とユリは思う。自分は祥子が言うように、頭の中であれこれ考えても、結局なにひとつ行動は起こさない。何かすべきことがある気はするのに、相変わらず暑さに耐えながら、ひたすら会社と自宅の往復を繰り返すだけだ。

「そんなのわかつてるわよ。」ユリは思わず、いらだつた言い方になり、そして少しの間、二人はお互いに黙ってしまった。

「ごめん。ユリはもうちょっとしっかり生きたほうがいいよ、っ
て思ったから。余計なお世話だよな。」祥子が静かに言う。

「祥子の言うとおりだつてことはわかつてるよ。」

「私ね、離婚したのよ。」少し置いて、祥子が唐突に言った。

「ええっ！嘘でしょう。」

「ほんと。それも原因がさ、旦那の浮気よ。浮気つて言うか、離婚まで至つちゃったわけだから、本気だつたわけだけど。」ユリは答えに詰まった。たしかに学生時代は、彼女の数多い恋愛のいざこざを知っていた。だが結婚後は、年の離れた夫と、幸せにやっていることが大前提としてユリの中にあつた。彼女のわがままも、その

私生活によつて支えられているものと思い込んでおり、その状況に波風が立つことがあるなどと想像もしなかった。

「もつずいぶん前からごたごたしてたの。ユリとはそんなにしょつちゅう会つてなかったから、昔みたいに愚痴るのも悪いなと思つて話してなかった。彼ね、私とだつてずいぶん年が離れてるくせに、浮気してたもつと若い子と再婚するのよ。結局、若い女が好きな人のよね。しょうがないわ。こっちはどうしたつて年とつていくわけだし。」

「でもその子だつてどうせ年はとるじゃない。」

「そりやそうだけど、そのときはもつと若い子を探すんじゃないの？でもその頃には彼のほうがもう相手にされないかもね。うふふ。」

祥子はそれほど悲しそうな様子には見えなかった。今まで数時間、二人で話していて、そんな大きな変化があつたようには感じられなかった。しかし、夫となつた男性とは結婚前、大恋愛だつたこともユリは知っていた。ユリの気持ちに答えるように祥子が話す。

「正直言つて、結婚して何年もたつと、もう好きとか愛してるとかではないの。でも長く家族だつたわけだし、ずっと続けてきた生活や習慣すべてを捨てるつていうのは結構たいへんよ。あとは若い子にとられたつてことを認めるのは辛かつたな。」

「そう。」

「ユリ、仕事して一人で生きるつていうなら、ちゃんと生計を立てられるようにがんばりなさいよ。もし結婚してもしなくてもそれは大事だと思う。私ね、何が悔しいつて、彼が若い子の方にいつちやつたことよりも、慰謝料をたつぷり払つてくれることなの。それ、私が年をとつて用済みになつたから、手切れ金つてことでしょ。本当はそんなものいらない！と言いたかつたけど、仕事もしてないし、結局もらうの。実家へ戻るのも嫌だしね。格好悪いでしょう。お金なんてもらわずにさつと別れて、新しい生活をする自分でいたかつたな。」

「そう、神戸には帰らないでこっちにいるのね。またいつでも会えるよね？」

ユリは、祥子の強さにふれて、泣きたい子供のような気持ちになつていた。こんなときに自分の幼稚さが本当に嫌になるのだ。

「もちろん。でも仕事探して働くから、これまでみたいには暇じゃないかもね。」祥子にはっこり笑った。その笑顔は、今後の生活への期待もやや滲んでいるようで、ユリを少し安心させた。

「私、ユリの言ってることわかるよ。恋愛とか結婚とか関係なく、自分を幸せにするものがあればいいよね。それを大切にして生きていければね。私はいつも恋愛最優先だったし、それがすべてと思つてきたけど、恋愛って棚ぼたみたいな幸せなもの。いつ消えるかわからない。そうじゃなく、自分の中から生まれてくるような、一生消えない幸せがあればね。子どもがいれば私も違つてたのかもしれないなあ。」

「まだ、子どもは持てるよ。幸せは必ずあるわよ。」

「そうね。これからはっきりと仕事をして、そしてまた結婚もするわよ。」そういう祥子は美しく、そして幸せそうにも見えた。

「そうだね。」

「明日、地球が滅びるとしても最後の日まで、私は恋愛するわよ！」宣言するように祥子が言った。

「なにそれ。」とユリが答え、その日、二人は笑って別れたのだつた。

帰りの電車の中で、ユリは祥子の言葉をもう一度思った。

「明日、地球が滅びるとしても恋をする、かあ……。」「やはり、彼女はいつも恋をしているのが似合う。彼女にとってそれが生きている証、人生の核なのだろう。まもなく地球が滅びるとしたら、私は何をしたいと願うだろうか。」

そのとき突然、車内に男の怒鳴り声が響いた。そちらへ目をやると、中年の男が若者に向かって怒鳴っている。声の調子からしてかなり酔っ払っている様子だ。そういえばさきほどから、ぶつぶつと独り言のような声が聞こえていた。

「なんだよ、うるせえんだよ！」長髪にひげを蓄えた不良っぽい感じの男の子も怒鳴り返す。車内の客はみな身をこわばらせて、事がおさまるのをじっと待っている。こんなときは誰もが無視を決め込む。ユリもこの状況が耐えられないと思うが、なにかを出来るわけでもない。へたに関われば巻き込まれて怪我をする可能性もある。ユリは下を向き、「いやだな、次の駅で降りてしまおうか。」と考えていた。

そのとき、「はいはいはい。やめなさいよ。」甲高い声がし、ふと見ると、どこから現れたのか別の男性がそこに立っている。誰かが仲裁に入るなど、滅多にないことだ。それは喧嘩をしている男よりもさらに年配のサラリーマン風の男だった。喧嘩に割って入ろうとしているが、彼もどうやらかなり酔っているようだ。足元がふらついている。大丈夫かしら、とユリは思う。間に入っていくて殴られてもしないか、そうでなくても、騒ぎがよりいっそう大きくなるのではないだろうか。

「なんだ、てめえは！」案の定、からんでいた中年男がサラリーマンに向かってすごむ。

「はい。飲みすぎました。申し訳ありません。」ろれつの回らない口調でサラリーマンが答えている。

「飲みすぎはだめです。なんで飲んじゃうでしょうかねえ。こんなになるまでねえ。」サラリーマンは、男をなだめるのではなく、自分自身に対して愚痴っているらしい。相手はすごんで脅してくるが、彼にはまるでこたえないらしく、唐突に「ね、唄ってもいいですかねえ、私、一曲歌っていいですかねえ。」と男のシャツを引っ張りながら大声で言うと、なんと本当に唄いだしてしまったのだ。

極度の音痴で下手くそな演歌を、身振りも大きくまさに絶唱だった。その様子にあっけにとられたのは、ユリをはじめとする乗客だけでなく、喧嘩をしていた二人も同じだった。その唄のあまりのひどさに、近くに座っている若い女の子たちがくすくすと笑い始める。ユリも喧嘩のことは忘れ、今は完全にこの車両の中心人物となったサラリーマンを、呆然と見つめていた。

2コーラス目までしつかりと唄い終えた彼は「ありがとう！ありがとう！すいません。下手くそな歌をお聞かせいたしました。こんな私ですみません！」と、車内中にくねくねと体を向けながら叫んだ。するとさつき、くすくす笑っていた女の子たちの友達なのか、若い男の子のグループが「いいぞお、おじさん！」と叫んで拍手をした。気づくと主役の座をすっかり奪われてしまった中年男は、そばの席に座り、ぼんやりとサラリーマンを見上げている。どうやらもう喧嘩をする勢いは失われてしまったらしい。

まもなく、次の駅へ着いて怒鳴りつけた相手の男の子が降りてしまつと、男はいびきをかいて眠ってしまった。車内は大騒ぎが嘘のように静かになり、また人々が囁きあう話し声だけになった。気持ちよく一曲歌った男性は、そのあとユリから少し離れた席に座ると、目をつぶり気持ちよさそうに体を揺すっていた。

「あのおじさん、すごく酔ってるみたいだけど、結局うまいこと喧嘩をおさめちゃった。すごい才能かも。どこで降りるんだろ。寝過ぎなければいいけど。」ユリはなんとなく気になって、ちらちらとその男性を見ていた。

少しして、電車は次の駅に停車した。サラリーマンは急に目を開け、いかにも目を覚ました酔っ払いらしく、間抜けな表情でまわりを見回すと、ばたばたと鞆をつかみ、よろめきながらホームへ飛び出ていった。

「この駅だったのね。ちゃんと降りられてよかった。」ホーム側の

座席に座っていたユリは、あんなにふらついていてちゃんと帰れるのだろうかと思しながら、窓越しにサラリーマンの姿を見ていた。すると不思議なことに、彼はホームに出たとたん、まったく素面であるかのようなしつかりとした足取りで歩き出したのである。両手で抱えていた鞆を左手に持ち替え、ずり落ち気味だった眼鏡をきちんとかけなおし、背筋を伸ばして階段を下りていくのが見えた。そうしてみると彼はどこか一流企業の重役のようでもあった。

「なんなの、これ。」ユリは目を見張った。

「あの人、喧嘩をやめさせるためにお芝居をしていたってこと？」まさか。そんなことはあり得ない。多分、外の空気を吸ったために急に酔いが冷めたのだ。あるいは、奥さんが恐くて、駅に着いたとたん、しゃんとする癖がついているのかもしれない。そうに違いはない。ユリはそう考えて、この出来事を自分の中で片づけたのだった。

8月14日

八月も半ばとなり、暑さはいつそう厳しくなった。ユリは短い夏休み中だったが、この猛暑では外へ出る気にもなれず、家に閉じこもっている。

世間ではお盆の帰省ラッシュが始まっているらしく、テレビをつけると、渋滞の高速道路が映し出される。ユリは、「こんな気候と渋滞の中で、どこかへ行かなくてはならないのは辛いだろうなあ。」とぼんやり考えた。猛暑であろうと、大渋滞であろうとへこたれることなく、毎年、この時期大挙して移動する人達の勤勉さに感心する。

気温はなおも、日々、過去の最高気温を更新し続けていた。

ここ数日間、世間では、ある政治家の発言が話題の的となっていた。地方講演会での発言の一部だ。

「今年の夏は日本のみならず、世界中、異常な暑さを記録している。一般に、これは地球温暖化によると考えられており、不安が人々に蔓延しているようだ。しかし、いたずらに不安をかきたてるような報道が多いのも事実である。」

私は、すべて温暖化が原因であると決めつけるのはどうかと思っている。地球は、これまでも氷河期があったり、また大きな災害や、天変地異を繰り返しつつ発展してきた。それを思えば、現在の状況も自然現象のひとつであり、私たちがあたふたしてもしょうがないのではないか。」

それを聞いた国民の多くが苛立ちを覚え、他の政治家やメディアも彼を執拗に責めたてた。なぜなら暑さは、深刻な状況であり、政治家がすべてを把握した上で言ったとはとらえられなかったからである。

八月も、日を増すごとに、熱射病で亡くなる老人や子どもたちが増加していた。世界でも、南米で暑さによる死者がかなり出たり、ヨーロッパでもこれまでの気温の記録が日々塗りかえられ、四十度以上の日さえ何度もあった。その他にも、大きな災害が相次いで起きている。これまでにはない規模の突風や竜巻、恐ろしい雷の被害、大津波に飲み込まれた小さな島。世界中にそれらの被害に苦しんでいる人がいるのだ。

自分の発言が、思った以上に大きな波紋を起こしたことを知り、政治家はすぐに謝罪を発表した。

「私は、自分たちに責任がないと言ったわけではない。もちろん、これまでの人間の行為が温暖化を引き起こし、現在の気候に関係していることは理解している。ただ、すべてそれだけが原因ではないかもしれないと想像しただけだ。自分の発言がこれほど皆を混乱させるとは思っていなかった。申し訳ない。」と話した。

ユリはこの発言を聞いたとき、「確かにその通りかもしれない。」とも考えた。人間は宇宙のすべてを理解しているわけではない。なにより、この政治家の意見が正しいか正しくないかなどより、他にすべきことがあるのではないだろうかと思った。今、世界中で災害や問題が起きているのは事実だ。もしも人間にその力があるなら、なんとか食い止める努力をすることが先決だ。政治家はまず、具体的な対策をうちだすことが仕事だろう。

日本中が、暑さに恐れおののいている今、誰もが、この発言には思うところがあったらしい。テレビでは、街を歩いている様々な年代、風貌の人たちに、「この発言についてあなたはどう感じたか」というインタビューを行っていた。もっとも多かったのは「無責任だと思う。」という意見だ。

「たとえ温暖化だけが原因でなく、これが地球の自然現象だとして

も、政治家という立場である以上、何らかの対策をとり、努力する姿を見せるべきではないか。」

「こんなに世界中で問題が起きているのに、あたふたしてもしょうがないとはなにごとか。」など、やはり批判的な意見が大半だった。

もしかすると、この政治家は、私たちに向かって不安になりすぎず落ち着け、と言いたかったかもしれない。人々に見えない裏では、汗を流して働いているかもしれない。いややはり何もせず、自分は外を歩き回ることも、汗をかいて働くこともないから、危機感を感じていないだけかもしれない。しかし、そんなことはユリにとってどうでもいいことだった。

私たちを取り巻く環境があきらかに変化している。まるでそれは、自然が人間に対して牙をむいているようだ。しかし、自分も含めて人間は何も変わっていない。街には人があふれ、店もレストランもこれまでと何も変わらずに賑わっている。

このままで本当にいいのだろうか。レジ袋を廃止して、リサイクルに励むだけで、この変化に対応できていると誰が言えるだろう。政治家でも誰でもいい。具体的な対策があるなら、それを示してくれば、たぶん私はそれに従うだろうな、とユリは考える。

インタビューの最後は、夜中に街をうろつく若い女の子が答えていた。

「どっちにしろ、地球は滅亡しちゃうってことでしょう。絶望だねー。だったらやりたい放題やんなきゃ損じゃん！どうせ長生き出来ないんだしねえ。あはは。」たしかに彼女の言う通りかもしれない。このままではいつか、人間が地球を滅ぼすことになるだろう。それは二酸化炭素の排出だけではなく、変化しようとしていない人間の心、その思いがりによって起こるのかもしれない。指針も、解決策もない問題が頭上に黒く渦巻いている。そんなことを思うと苦いものが、胸の奥からこみ上げてくるようだった。

ニュース番組の終わりに、女性キャスターがカメラをじっと見つめて言った。

「今、地球に変化が訪れていることは紛れもない事実です。私達は、それがたとえ無駄であるとしても、今なにかを行動していかなくてはならないでしょう。それが、私たちが生きているこの星に対して、敬意と愛を示すことであると私は思います。」

今夜は最後に、皆さんにこの言葉を伝えたいと思います。“もし明日世界が終わるとして、私は今日、林檎の種をまくだろう。”

ではまた明日。失礼します。」

ユリは聞き覚えのあるようなその言葉を、ただじっと聞いていた。

8月15日

その日、ユリは久しぶりに朝寝坊をし、目覚めて時計を見るとまもなく午前十一時になろうとしていた。

一階のリビングへ降りていくと、家族はみな出かけたらしく、家は静まり返っている。ダイニングテーブルには母の字で、「ユリへお父さんと買い物に行ってきます。夕方には戻ります。カナはお友達と出かけるそうです。」とメモがあった。

「みんな、お出かけなのね・・・。」

家の中はひんやりとしていた。母が出がけに冷房をとめてからまだそれほど時間はたっていないのだろう。ひっそりと静まった家でひとり、冷たい牛乳を飲みながらぼんやり外を眺めていると、今日はあまり暑くないように見えた。庭の木の葉が風に揺れ、裏表をひるがえしながら輝いている。空も真っ青でないうす曇りの色をしていて、もしかしてあの暑さはもう去ったのではないか、と思わせた。思わず窓を開けて顔を庭先に出してみたが、それは思い違いであることがすぐにわかった。

「暑い！」締め切っていた室内とはまったく違う空気がそこにはあった。「そんなにすぐに涼しくなるわけないか。」

それでもせっかくの休日を、こうして毎日エアコンの下で過すのもどうだろうと思い、ユリは久しぶりに一人で出かけることにした。

繁華街へ着いたときにはすでに午後二時を回っていた。気温は正午を過ぎた頃から、どんどん上昇し始めた。外を歩いていると、自分の体温と外気のどちらが熱いかわからなくなってくる。最近のユリは、暑さのせいで休日買い物や食事に出ることも少なくなっていた。しかし、久しぶりにこの人ごみを見ると、人々は相変わらず元気だと思える。体調を崩す人が増えていると聞くが、この気温でもみなこうして楽しそうに歩いているのを見ると、これまで

となにも変わっていないようで、それはユリに安心感をくれると同時に少し不安にもさせた。

ユリは映画館へ入ると、そこで数時間をつぶし、夕方にはもう帰ることにした。見た映画はあまり気に入らず、これなら家で本でも読んでいたほうがよかったかな、と休日的一天を無駄にしたような気になっていた。

ユリが地下鉄の切符を買うため列に並んでいたときのことだった。いつもは定期券を使うのだが、今日は会社の沿線とは別の、普段あまり出かけない街へ来たため、切符を買うのも久しぶりだ。

券売機を待つ列はどこかなり長く伸びている。ユリは並ぶ間、ぼんやり他の人達を眺めていた。友達同士、楽しそうにおしゃべりしている女の子達、恋人同士らしい二人、中年女性、お年寄りなど、さまざまな人達がそこにいた。皆、額や着ている洋服には汗がにじんでいる。

まもなくユリの順番が来て、機械にお金を入れたときに、「遅いんだよ!」という声が聞こえた。自分が言われたのかとユリは一瞬、びくりとしたが、それほどたまたした覚えもない。

「すみませんねえ」というおどおどした声がして、ユリが目の端でそちらをみると、小さなおじいさんが小銭を探しながら、機械の前で焦っている。文句を言ったのは、そのすぐ後ろに立っている三十代くらいの男らしい。ユリは自分もせかされないよう、さっさと切符をとり列を離れたが、おじいさんのことが気になり、少しの間列の後ろで見ていた。少しすると無事に買えたらしくおじいさんが列から出てきたが、いらついた男の「このじじいがっ!」と言う声が聞こえた。ユリにはやるせない気持ちかわいてくる。慣れないお年寄りが切符を買おうとする間さえ、待つことが出来ないのだ。汚いののしり言葉を吐いたところでなんの得があるというのだろう。そして自分自身も含めて、ただ黙って見ているだけの周囲の人間たち。気温がさらに上がるような感じがして、小さな怒りの感情がユリに

残った。

地下鉄に乗っても、さきほどの男の捨て台詞が耳に残り、ますますこの一日が冴えないものに思えた。「やっぱり家にいたほうがマシだったかも。」

中途半端な時間のせい、車内は比較的すいており、ユリは座席に座ることが出来た。座つてすぐにからんとか何かが鳴っているのに気づく。音のする方を見てみると、ユリの座席とは反対側の車両の端、空き缶が揺れに合わせて転がっていた。誰かが飲み捨てていったのだらう。

それにしてもなぜ、自分が飲んだ缶を持って電車を降り、それをしかるべき場所に捨てることが出来ないのか。モラルのない人間が多すぎる。さきほどからややイライラしていたユリは缶の出すその音をいまいまいしく聞いていた。缶は相変わらず、座っている人たちの足元を転がっている。自分の足に触れても、人々は次の揺れでそれが別の人のほうへ転がっていくのをじっと待っている。まるで感覚のない石になったように、この缶をどうすべきかという思考を麻痺させているかのようだ。ユリはそれを見ているとなんだか恐いようにも思えた。全ての人がそれを無視している。どうして拾い上げようとはしないのか。

しかしユリは、自分自身については言い訳をしつかり用意していた。私は離れた席にいるから拾わないのだ、と思っていた。ここから立っていつて、他人の足元から缶を拾い上げるのは、あまりにもこれ見よがしではないか。足元に放っている人たちに対して嫌味な感じに映るだらう。それがユリが缶を処理しようとしなない理由だ。もし自分の足元に転がっていたら私はちゃんと拾って捨てる。そう考えていた。

そのとき、ユリの向かい側に座っている、若い女の子三人のうちの一人が急に立ち上がった。年齢には似合わない濃いメイクをし、

言葉遣いもありよくないその子たちが大声で笑ったび、ユリはさつきからいらついていた。

その子は車両の奥へ向かつて歩いていくと、転がる缶をさつと拾って席に戻ってきた。友達がその子に「どうしたの。なんで拾ってんの？」と尋ねている。

「だつてうるさいじゃん。さつきからカランカランってさあ。誰も捨てないからあたしが捨てるんだよ。」

「なに、あんた、いい子じゃん。」仲間たちははからかうように言う。「なんで。当然だよ。うるさいと思ったら拾うよ。みんな揃って無視してるほうが恐いよ。」

ユリは思わず、その子の顔を見た。私もこの女の子と同じように感じていた、なぜみんな無視しているのだろうと思いつつも、自分では拾おうとしなかった。

誰もがまるで意識を失くしたように空き缶を無視したとき、そこにいるのは人間ではないのではないかとさえ感じた。ユリはそれを朝の通勤時にも感じる事があった。電車に乗り合わせた人たちが皆一様に不機嫌で、いや不機嫌というよりも感情や意思を失ったかのようにそこにいるのを見る。それが一人二人ではなく、ほとんど皆がそんな風に見えるのだ。

その無表情さが悪いというわけではない。朝早い通勤時から、皆が笑顔で楽しそうにいられるわけがないのは、同じ状況のユリにだつてわかつていた。しかし、そうならざるを得ない状況とその困難さがどんどん大きくなっている気がしていた。

皆が早朝に家を出なければならぬほど、遠くまで通っていること。こんなに多くの人間が一台の電車に詰め込まなければならないこと。誰もが自分の仕事に喜びを持って就いているわけではないこと。抱え込むストレスの多さと心労。休養の少なさから来る体力的な疲労。それらが絡まりあい、皆がこんな風になっている。そしてひとつの車両には、そこにいるすべての人の苦悩が充満している

ように見えた。

ユリ自身も毎朝、同じように感情も意思も封印し、ひたすら駅に着くのを待っている。そして空き缶を拾うことすらしない。

「着いたよー。」大きな声にはっとして、顔を上げると向かい側の三人が、楽しそうに笑いながら降りていった。

この出来事は、ほんの日常のささいなものではあったが、それはユリに、自分の欠けたピースの存在を見せつけるような出来事でもあったのだ。

8月15日(2)

家に帰ると、両親も妹もすでに戻っていた。母親が台所から、「おかえりなさい。ちょうどご飯だけど、食べてきた？」と声をかける。

「ううん。食べる。」ユリが着替えてテーブルに着くと、テレビで若い女優がインタビューに答えていた。まもなく新しい映画が封切られるらしい。邦画もテレビドラマもほとんど見ないユリは、彼女をよくは知らなかったが、整ったその顔に見覚えがあるのは、毎日コマーシャルでひっきりなしに見るからだ。

妹のカナが「この子って本当にきれいな顔してるのよね。めっちゃめちゃ整っていると思わない？でもなんとなく年齢にそぐわないっていうか、老けてるっていうか、若さとか可愛らしさがないのよね。」と、ユリに話しかけてきた。

「この子、いくつなの？」

「この間、ついにお酒が飲めるようになった、って言ってたから二十歳になったばかりだと思うけど。なんか雰囲気、落ち着きすぎな感じでしょ？」

たしかに妹の言うとおり、実年齢とは無関係の落ち着きが漂っている。顔だけを見れば人形のように可愛いのだが、その奥には、すでに多くの経験を積んだ人間だけが持つ、真実を知るゆえの落ち着きがあるように見えた。コマーシャルでニコニコと笑っている姿しか知らなかったユリは、妹とは逆に、それが魅力になっているように感じた。

テレビではインタビュアーが、彼女の演技にたいする思いなどを質問している。

自分の感情にいちばんぴったりくる言葉を、ひとつひとつ選ぶようにその子は答えていた。時に、思いのほうが先行し、それについ

てくる言葉がないという風に、やや早口になり照れ笑いのように微笑む。そんな時はさきほど感じた落ち着きとは反対に、少女の幼さが見えた。

アイドルとは、使いまわされた言い回しで当たり障りない発言をするか、テレビ向けに受けを狙う発言をするもの。そんな印象しかなかったユリには、この女優の、真剣に思いを伝えようとする姿は、とても新鮮で興味深いものだった。

「この子、今ドラマとか出てる？」

「連続ドラマに出てたけど、この間終わってたばかりだよ。でもまた、次のドラマで主役やるみたい。この子の主役ドラマって途切れることがないのよね。とりあえず今、若手女優ナンバーワンって言われてるみたいよ。ユリちゃん、こういう子が好みなの？」カナが面白がって聞く。

「確かに年齢の割には落ち着きすぎかもしれないけど、しっかりしてるし鋭そうじゃない？テレビタレントの若い子にしては珍しいなと思って。私が二十歳のときに、こんなふうに大人に向かって自分の意見を話せたかどうか・・・。」

「でもさ、この子って、自分はテレビのアイドルじゃなくて映画女優なんだ、って大人に食ってかかったり、急に泣いたり笑ったり、わがままって言うか、感情が不安定って言うか、人気の反面、けっこう批判も多いんだよ。でもそれが話題になって人気が上がるんだから、戦略がうまく効いてるのかもね。」

カナの話を半分に聞きながら、テレビに耳を傾けると、インタビュアーが「これからの夢、目標があれば聞かせてもらえますか。」と言った。

「はい。私、読書が趣味なんですけど、ターシャ・テューダーさんが大好きなんです。先日もある本を読んでいたら、ターシャさんが好きだという詩が出ていて、すごく感動して暗記しちゃったんです。」

「それ、聞かせてもらえますか？」

「はい。正確に覚えてはいませんがいいですか？」

『世の中は落とし穴だらけ。でもその中の善を見落としてはいけない。理想に向かっていている人はたくさんいる。勇気ある行動は、あらゆる場所にあふれている。自分の心に正直に、愛するふりをしてはいけない。愛にたいして懐疑的になってもいけない。無味乾燥で現実主義の世の中にあっても、愛は雑草のように生き続けるものだから。』 “ っていうものなんですけど。すごく素敵じゃないですか？ なんだかこれを読むと、元気が出るっていうか、私も勇気を持つて目標に向かっていこうと思うんです。もったいい女優になりたいです。」

「暗記するなんてすごいですね。ところで、不勉強で申し訳ないですが、そのターシャというのどういう方ですか？」その質問に、彼女は「そんなことも知らないの？」という冷やかな目をして、「アメリカの有名な絵本作家です。」と答えた。先ほどから、彼女が自分の感情を誠実に表現しているのに対し、このインタビューは感性、情緒的な面でやや役不足のように見えた。ありきたりな質問とその場しのぎの相槌ばかりだ。

最近、二十歳になったばかりの女優、つい先日までは十代の少女だった彼女が、感受性の強さゆえに感情が不安定であったり、自分の感性に向き合うため、大人にたいしてときに生意気になるのは当たり前前の現象でもあった。

インタビューは「今後ともご活躍を期待しています。」というように、ステレオタイプな言葉で締めくくられた。

読書好きのユリにとっては、ターシャ・テューダーはよく知った作家だったが、インタビューに詩を引用して答える二十歳の女優なと見たこともなかった。そして、女優が引用したその詩の内容に心ひかれた。

「えらそうよね。」と妹は言ったが、ユリはこの女優にはじめて

興味を感じた。若さによる生意気さも、自分がすべてのような自意識の表れも、そのあふれ出る感受性によるものなのだろう。大人たちに囲まれたそのインタビューの席で、彼女だけが唯一、自らの意思を輝かせて生きる存在であるように見えた。

夕食を終え、しばらくしてからユリは、さきほど女優が暗唱した詩を思い出そうとしてみた。「なんていう詩だったっけ。でも確か内容はこんなふうだったかな。世の中が悪く見えても、いいところも見落としてはいけない。理想に向かい、勇気ある行動する人はたくさんいる。愛を疑ってもいけない。」

ユリはふと今日、自分が出会った出来事のことを思った。おじいさんに怒鳴っていた男の人。あれで暗い気持ちになったけど、そのあとに地下鉄で空き缶を拾う女の子を見た。あの女の子も理想に向かって行動する人の一人と言えるのかもしれない。いい部分を見落としてはいけない。そして心を閉じてはいけない。その単純なルールを、私は忘れていたのではないだろうか。

それにしても、あの若い女優がこのような詩を引用したことが、ユリには不思議だった。しかもそれが、自分の遭遇した今日の出来事と、どこかつながっていることがさらに不思議な感覚をユリにもたらししていた。

・マックス・

アーマン／デシデラーター／ターシャの家／メディアファクトリー刊
より

8月16日

夢とは、はたしてどこから来るのだろうか。それとも夢の存在する場所へ、自分が出向いているのだろうか。それは自分自身が生み出しているのか。時には、どこから自分の中へ送られていると思えるような夢もある。

遠い昔に知る人や、懐かしい風景を夢に見るとき、やはりそれは「記憶」であり、自分自身の中から生まれていると思う。子どもの頃に住んでいた場所を、ユリはよく夢に見た。夢の中の自分は現在の姿であっても、何故かいつも今の家ではなく、幼い頃過した古い小さな家に住んでいる。

その町の風景も、なにも変わることなく夢に現れた。自転車で走った学校までの道のり。風の匂いや、道端の小さな花の花びら一枚まで鮮明に夢に見ることが出来た。しかし、それらはどこか、現実とずれている感覚がある。

夢には、それが現実とは違う次元だとは思えない要素がいくつかある。たとえば色彩の違いだ。ユリの夢はいつもしっかりとフルカラーであるが、その色合いは現実とは微妙に違う。木々は緑、花は白く咲いていても、その色はたとえば、インクジェット式プリンタのインクが、どれか一色不足したときのように、なにかが欠けている。たしかに現実とは違う色合いだった。

他にも現れる人物の表情がはっきりしないことや、歩くとき足元の道が少しゆがんでいるようなこともある。そして現実と比べると夢はあまりにもひっそりとしている。登場人物が少なすぎるのもその原因だろう。ユリの夢にはいつも、自分自身と他にほんの少しの人しか登場しないのだった。

夢は、視覚でとらえられる色やかたちは、たしかに現実ほど完璧

ではない。色を構成する要素のひとつ、かたちを構成する要素のひとつ、なにかが欠けているような、危ういバランスの中にある。まさにそれが「現実感に欠ける」理由かもしれない。しかし、夢は視覚以外に関しては、現実よりもはつきりしてもいる。それは「印象」において、である。

今では思い出せない子どもの頃の間を、夢の中では味わうことが出来る。内容はよく覚えていなくとも、朝目覚めたとき、物悲しい気分が残ることもよくある。夢の中では、感覚や感性は現実世界以上に鋭くなっている気がした。

夢は、手が届きそうで届かない大切などこかへ運んでくれるようでもあり、それ以上進んではならない恐ろしい道のようなこともある。

時には、説明のつかない不思議な夢を見ることもある。たとえば、記憶や想像では創り出せない、自己を越えたところから映像が送られるような物語だ。

ユリは読書好きなこともあって、想像力が豊かではあった。しかし、彼女は現実離れたことにのめりこんだり、重点を置くタイプではない。だが、その日見た夢は、恐怖や不思議といった感情を越え、どうにも説明のつかない胸騒ぎをユリに残した。現実ではないものが、目覚めた後の現実の中にも入り込んでくるように感じ、頭から離れなかった。そんな夢の記憶はこれまでになかった。

その夢の中でユリは、静かな薄暗い建物の中にいた。季節は冬だったのだろうか。昼間でも暗い室内の様子は、ユリが訪れたことのない古臭い洋室だった。壁や天井の様子、そして置いている家具も古びており、どちらかといえば崩れかけの館といった風情だが、不思議な品のよさと落ち着きに満ちていた。小さな窓から外を見ると、ただっ広い野原が広がり、遠くに連なる山々は枯れ木で覆われ、寒々しい姿を見せている。

ユリは、見覚えのないその部屋を眺めながら、昔のイギリス貴族

のマナハウスとは、このような雰囲気なのではないかと思った。そして見知らぬその場所になぜか居心地の良さを感じていた。

部屋にはマホガニーの家具が置かれ、火の入っていない大きな暖炉の上には、埃がかかった銀の燭台があった。壁には大小のさまざまな絵画がかけられている。ユリはその一枚ずつに目をやった。木の生い茂る風景画、草の上に立つ美しい馬の絵、どれもこの部屋にふさわしく思えるものばかりだ。だが、その中に一枚だけ明らかに異質と思える作品があった。

「こういう絵は美術館とか、もっと贅沢に飾りつけた部屋にありそうな気がするけど。」とユリは思った。

ユリは、西洋美術にはさほど興味がない。美術展も人に誘われて数年に一度出かける程度だった。しかし、その絵に描かれた人物の顔になぜか見覚えがあった。

「わかった。どこか、レオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザに似ているんだわ。」そう思ったとたん、その絵を自分が知っていることに気づいた。それはやはりダ・ヴィンチによるもので、「聖ヨハネ」を描いた作品だ。中学か高校かの美術の教科書で見たことをユリは思い出した。

「どうしてこんなところにダ・ヴィンチの絵があるのかな。美術館クラスの絵じゃないの？そうか、きっと複製ね。」と考えた。

壁に掛けられたその絵は平面から浮き上がり、まるで実際の人間がそこに存在しているかに見えた。ユリはその顔から目が離せなくなり、そのまましばらく見つめていた。キャンバスに描かれた人間の表情が、これほどまでにリアルなものだろうか。そこには絵ではなく、人間に似たなにかが存在していた。上手く描かれているなどという事実を超越した個性と精神があった。その唇は今にも言葉を発するかのようにうつすらと微笑んでいる。天を指す指先も、こちらを見据える眼差しも、何かを伝えようとしているように見えた。

この人物は、なにか人間を越えた力を持っている。それは「超能力」というような言葉で表現できるものとは違っていた。「全知全

能」という言葉がユリの頭をよぎった。

そのとき不意に、絵の中のヨハネの指先が少し動いたように見えた。微笑んでいる唇の端がさらに少し歪んだ。ユリはそのときはじめて恐怖を感じた。

「これはなんなの。」体がびくりと動き、思わず壁から身を反らした。しかし、その絵に背を向けることが恐くて、向き直り走り去ることも出来ずにいた。そのとき、ヨハネがうつすらと口を開き、言葉を発したのだ。ヨハネが日本語を話すとは思えないが、それは言葉ではなく、テレパシーのようなものだった気もするし、夢らしく都合よく日本語になつていたかもしれない。あとから考えても、日本語を話したかどうか定かでないが、内容はあまりにもはつきりとユリの頭に残っていた。

その言葉は、「お前たちは、その目が半分しか開いていないことを知らない。それゆえに真実を半分も知りもしない。今、見えているものがすべてではない。私が指し示す先を見よ。」というものだった。言い回しは正確に覚えてはいなかったが、大体はこんな感じだった、とユリは翌朝のベッドの中で思い返した。

不思議な夢だった。見覚えのない室内にいたこと、そして記憶から消え去っていた「聖ヨハネ」の絵。なによりヨハネが残した言葉自分が思いつくような言葉ではない。なにかとても象徴的な夢であるように思えて胸が騒いだ。

「半分しか目を開いていないとはどういう意味だろう。見るべきものを見ていないということ？ 私が指し示す先を見る、って何を見ればいいの。」

その日、ユリは駅前にある大型書店へ出かけた。あの絵について、そしてヨハネという人物について調べてみようと考えたのだ。ヨハネっていったい誰？ キリスト教に関係ある人だったわけ？ ユリの知識はその程度だった。

書店には、あのヨハネが表紙になっているダ・ヴィンチの本もあった。あれこれと読んでわかったことは、描かれたのは十六世紀初頭であること。タイトルは「聖ヨハネ」となっているものもあれば、「洗礼者聖ヨハネ」とされている本もあった。「洗礼者」というのは、荒野で苦行生活を送り、ヨルダンの川辺で人々に洗礼を施したことから、そう呼ばれているらしい。キリストその人の洗礼を行ったのも彼だということであった。

さらにヨリが知ったのは、ヨハネはキリストの親類でもあったということだ。彼はエルサレムの神殿祭司ザカレアとエリザベスの息子であり、母エリザベスは聖母マリアの従姉妹だった。つまりヨハネはキリストとは又従姉妹の関係になるのだ。

「あの夢の中で感じた、彼のもつ、人間ではないような特別な感じはそこから来ているのかしら。」と思った。しかし、ヨリが本当に知リたかったことは、ヨハネの歴史的、宗教的背景ではなかった。ヨリは、彼が言った言葉の意味を知リたかったのだ。だが、それについてヒントになるような本を見つけることは出来なかった。またそれは当然であるとも思えた。

「たんなる夢だものね。」心のどこかでは、そうも思っていた。それでも、今朝、目覚めたときの不思議な高揚感、なにかとても重要なことを伝えられたような気分は今も残っていた。彼の右手の指先が指しているものは何であるのか。私が見ていない半分とはなんだろう。それを知りたいという気持ちを残したまま、家へ戻った。

8月17日

夏休み最後の日に、ユリは久しぶりに恋人と会う約束をしていた。数日前に彼から電話があり、食事でもしようということになった。彼はいつも仕事に忙しく、この夏も数えるほどしか会っていないが、長い付き合いの二人にとって、今ではそれが当然のようになっていく。

初めて出会った大学生の頃から、彼はいつも先のことをしっかりと見据えて努力を怠らない人だった。そして自分が立てた計画通りに、現在は外資系銀行に勤めている。ユリにとって彼はいつも現実的で、地に足がしっかり着いた男らしい人物だった。なにか聞けば現実的で的確な答えをすぐに出してくれる、そんな安心感があった。そんな彼は、今と同じように、学生時代から勉強や就職活動でいつも忙しかった。彼にとっての最優先事項が恋愛ではないところにもユリは惹かれていた。恋愛のことばかり考えているような他の男の子たちは、ユリにとっては異性とは感じられなかった。恋愛に夢中な祥子と仲良くしていたユリには、そんな男の子たちが同性のようには思えてしまうのだ。

彼のほうもまた、ユリのおっとりとして、表面的には感情の揺れが少ないところに惹かれていた。自分の目標に忙しい彼にとって、わがままに感情をぶつけてくる女の子はうつとうしいと思っていたのだ。

仕事に就いて少し落ち着いたらユリと結婚する、と当時、彼は言った。それはなんの確約もない、あやふやな約束でしかなかったが、お互いにとくに他の選択肢があると考えてもいなかった。それからすでに長い年月が流れ、これまでも時々、彼はいつかは結婚しようというようなことを言った。しかし、二人とも心の奥底ではそれに踏み切る気持がなくて、どちらから具体的に決定することもなく、

ただ年月だけが過ぎていった。

待ち合わせ場所には彼のほうが早く来ていた。ユリも時間には正確なほうだが、彼はいつも時間より早めに来る。

「久しぶり。」

「そうね。」久しぶりに会っても、とくにわくわくするとか、いつもと違う感情がわくこともない。今では、学生時代からの仲のよい友人となんら変わることはない相手だが、だからといってそれが恋人と言えない理由もなかった。

「ますます暑くなつたよなあ。体調は大丈夫？」と彼が聞く。

「うん。まあまあね。でも本当に今年の暑さは異常よね。このまま暑くなり続けたら、どうなっちゃうのかしら。」ユリの言葉に答えることなく、彼は「予約してあるんだ。」と言って、車を発進させた。

店に着き、いつものように食事をしながらそれぞれの近況を話した。ユリは彼の仕事のことなどをぼんやりと聞いた。

「そういえば、この間、祥子に会ったの。」

「へえ。懐かしいな。彼女が結婚してから、ずいぶんと会ってないな。どうしてた？元氣だった？」

「それがね、突然、会おうって言われて、私も本当に久しぶりだったのよ。祥子は相変わらずきれいで、元氣だった。でもね、びっくりしたんだけど、あの子離婚したんだって。」

「ええっ？マジで？」ユリは先日のことを話した。

「そうか、でも祥子ちゃんらしいな。元氣そうだったなら安心だね。そんなに落ち込んでもないのかな。彼女のことだから、本当に恋愛に生きて、またもつといい相手を見つけるんじゃないの。」

「私も、そうだいいとは思っけど。祥子には変わらないでいて欲しいのよね。幸せな苦労知らずの奥様で、わがママを言い続けているのが一番祥子らしいっていうか、こっちも安心するのよ。でも、

今は一人で時間をもてあますかもしれないし、今後はもう少し頻繁に会おうと思ってるの。優も時間がとれたら、今度一緒に会おうよ。

「うん。」と、彼が答えたとき、小さな間があったことにユリは気づきもしなかった。

食事の後でユリは、突然、恋人から別れ話を切り出された。あまりにも思いがけないその話に口を挟むことも出来ず、ただ黙って彼の話を聞いた。ユリではない別の女性、仕事で出会ったある人と結婚したいと言うのだった。

彼の言い分は、ユリのことはずっと好きだった、今も大切に思っているが恋愛感情とは違うというものだ。今では学生時代からの大切な友情のひとつになっている、と彼は言った。そう言われるとユリは言葉が出てこなかった。その感情は自分が彼に感じているものとまったく同じだったからだ。ユリもまた、今では限りなく友情に近い感情しかない。しかし、それこそが結婚するには都合のいいことだと思っていた。そしていつか行き場所がなくなっても、最終手段として彼と結婚するという方法が自分には残されていると考えていた。

彼は、その女性には、ユリに対するものとはまったく違う恋愛感情を持っていると言う。今すぐにでも結婚したいと思っていると彼は話した。

ユリは、彼の性格上、激務の中で恋愛をすることなどないとかをくくっているところもあった。そのうち、お互いにちょうどいいタイミングが来れば結婚をし、これまでと同じように日々は続いていくのだろうか、くらいに考えていた。

話を聞きながらユリは、どうしても結婚したいわけでもないのに、自分の勝手な思いで怒りをぶつけるのもおかしい気がした。とは言え、すぐに納得し祝福をするのもあり得ない状況だ。

彼が悲壮な表情で謝罪し、その女性への思いを語るのを聞いてみると、「安いドラマみたい。」という思いがして、ユリはひどくこの状況がうつとうしかった。これまで自分に対しては男らしく、冷静だった恋人が、別の女性に対しては感情露に、恋愛至上主義に変わるのも納得がいかない気がしていた。

こういうとき、ユリはいつも相手にストレートに気持ちをぶつけることが出来なかった。自分の気持ちの整理してからでないと言葉が出てこないのだ。今、言いたい事があっても上手く言えないならば、そのまま言わずに飲み込んでしまうのが常だった。その夜も、ユリはとりあえず話を聞くだけ聞き、表情を固くしたままに今日は帰ると言って自宅へ帰った。

一人になってから、ユリは彼とのこれまでのことをもう一度考えてみた。彼がその女性に感じているような情熱を自分は感じていないのは事実だった。ならば自分が無理に彼と結婚をするのは間違っているし、なんの必然性もない。しかし、これまで長い間つきあつて来て、お互いをよく知っているのもまた事実だ。これまでお互いに嫌いにならず、飽きることもなくつきあつてこられたのは、やはり異性でありながらもかなり気が合っていた証拠であるようにも思えた。それはつまり、結婚相手としてこれほど合う相手はいないということにはならないだろうか。

彼と別れるとしたら、恋愛体質でない自分が、新たな恋や結婚相手を見つけるのは容易ではないのもわかつている。今の職場もいつまで働くはわからない。先日、祥子に言われたとおりになってしまった。本当にいくあてがなくなってしまった、とユリは思った。

ユリは何時間も一人、堂々巡りで考えた。答えの道筋もないまま、これまでのこと、これからのことを思っていると、自分が彼に何かを奪われたような、ひどく損な役回りを押しつけられたように思えてきて涙が出た。それは純粹に恋人を失うことではなく、自分の予定や期待が失われたことにたいする涙であることが、自分自身、情

けなかった。

「いったい私はこれまで何をしてきたんだろう。真剣に結婚を考えただけでもなく、かといって他の道を考えたわけでもない。その結果がこれだ。すべては自分の責任だ。」ということがユリには嫌というほどわかってはいた。

その夜にユリはある夢を見た。高校の制服を着た十六歳の自分がいた。その当時、ユリは生まれて初めてと言える恋をしていた。相手は同じ高校の三年生の男の子だった。ユリの友人がつきあっていた男の子の親友が彼だった。学校帰りによく四人で出かけるうちにユリはその子に恋をした。

一緒にいるといつも喧嘩になる自分たちに、友達は「ユリたちって気が合うのか合わないのか、わからないわよね。」と不思議がられた。おしゃべりをしているといつも言いあいになり、自分の思いをうまく伝えられないことが悔しくて涙が出た。

彼はそんなふうにすぐに泣くユリを、いつも少し馬鹿にして女の子扱いしていた。彼の成績はあまりよくはなく、しかもそれを気にも留めず、気にしているのはいつも外見のことばかりだ。夜、電話をすればどこを遊びまわっているのか、家にいることなどほとんどなかった。学校はさぼってばかりで会えないことも多く、約束もすぐに破る。

それでもユリは、彼のそんな目に見える部分ではないなにかに惹かれていた。それは性格とか個性とかではなく、彼を包む空気のすべて、存在そのものを認めてしまっていることから来ていた。それは好きになろうと思って始まった恋ではなく、終わろうとして終われるものでもなかった。

彼が時々話す好きな音楽やマンガの話、見た映画で泣いたこと。そういうことがユリの心にまっすぐに突き刺さった。ごくまれに、彼となにかを共有するような感覚を持つことがあった。そのとき時間が止まり、二人をとりまく状況も消えてなくなる。心と心がふれ

あうような瞬間を感じることがあった。そしてそれは哀しいことにこの世界では、家族や大親友であってもあまり起きないことをユリは知っていた。

女の子に好かれることばかり考えているのも、彼にとつての必然であるようにユリには見えた。夜遊びや不良じみたことをするのも、たくさんの女の子とつきあうのも、彼がいつも何かを探しているからなのだろうと思った。

一度だけユリが、「どうしていつもそんなにふらふらしてるの！」と怒ったことがあった。そのとき彼は、いつになく真面目にこう答えたのだ。

「そんなのわかんないよ。毎晩、出歩いて、知らない人や面白い人に出会うからね。女の子も声をかければみんなすぐに着いてくるしでも昨日は面白かったことが今日は面白くなるんだ。どんな刺激もどんどん薄れてきて、次はもっとおもしろいことを探さなきゃって思う。でもこうやって続けていっても、先にはなにがあるんだろうと思うこともあるよ。でも今はこうするしか方法がわからない。」

その言葉を聞き、ユリはとても悲しかった。こうして側にいて喧嘩をいくらしただころで、彼の歩く道はあまりにも一人きりであり、自分もまた彼とは別の一人きりの道を歩いているという気がした。方法はどうであれ、彼の人生にたいする誠実さがそこにあった。そしてその誠実さゆえに、孤独に歩いていくその姿が見えるような気がした。

高校を卒業すると彼は、別れも告げずに一人でアメリカへ行ってしまった。そこでは勉強をしているとか働いているとか、女の子に養われているとか、様々なうわさを聞いたが、ユリは真実を追究しようとは思わなかった。とにかく元気で自分の好きなように生きていてくれればそれでいいと思っていた。それほど好きな相手だっ

た。あまりにも好きだからこそ、どうあがいても、お互いが別々の他人であることを受け入れるしかなかった。そのことに気づかせてくれた恋愛だった。ユリは、彼が自由を手放してしまわないことだけを願っていた。

その夢のはじまり、ユリは高校生の姿をしていた。学校の中で彼の姿を一瞬見た気がしたが、すぐに見失ってしまった。

気づくとユリは一瞬にしてもう大人になっていた。自分の娘なのか、小さな女の子をひとり連れて、見知らぬ道を歩いている。多分、現実のユリよりも十年ほど未来の姿であるようだった。

娘が自分をどこかへ連れて行くつもりでいる。彼女は会いたい人がいるのだと言っている。その人には会ったこともないが、夢で見たと言っている。その居場所も行ったことはないが夢で見てわかっている、ユリの手を引っ張っている。

着いた先はビルの中の小さな飲食店だった。「ここにいるの。」と小さな娘は言う。それは幼い頃のユリ自身の姿をしていた。娘が中から連れてきたのは、ユリの好きだったあの男の子だ。

夢の中でユリは驚くこともなく、その人と向き合っていた。なぜかここに来る前から、女の子が会いたいというその相手が彼であることを、知っていた気がしたからだ。

夢としては不思議なことに、彼はユリと同じく、年月を経たぶんだけしっかりと変化していた。昔に比べるとずいぶんと太っていたし、見たことのないひげを蓄えていた。二人は言葉を発することなく、ただ向き合って立っていた。そのとき昔と同じように、時間が止まり空気が透き通っているのをユリは感じていた。「間違いなく彼だわ。」と思った。

夢はすぐに場面が変わり、ユリは女の子と二人帰り道にいた。少女の手を握って信号待ちをしていると、突然、彼女がその手を振りほどいて走りだし、立っている男性を突き飛ばしたのだ。ユリは慌てて、少女を引き戻すと「なぜ、そんなことをするの。」と叱った。

すると彼女は真剣な顔で「だって、夢で見たの。別な男の人が走ってきてあの男の人を殺そうとするの。だから助けなくちゃって思ったの。」

「そんなの夢でしょう。それに誰も走って来なかったじゃない。」
「でも会いたかった人には、さっきの場所でちゃんと会えたよ。夢とか直感はずれることもあるけど、でも信じたほうがいいこともあるの。」と彼女が言ったとき、ユリは目を覚ました。

先日、ヨハネの夢を見たときとよく似た、不思議な感じがユリの中に残っていた。すっかり忘れていた昔の恋を思い出した。そして年をとって変わった彼の姿が、まるで現実そのものように思えた。「夢を信じるべきだ」という言葉も、奇妙な説得力を持って、目覚めた後のユリの心に残った。

ユリはもう一度、夢のストーリーを思い返し、今感じている感覚をより明確なものにしようと努めた。なにかそうする必要があるように感じたのだ。するとそのとき、突然、ユリの心にひらめいたものがあつた。

「この間、夢で見たヨハネの言葉はこのことを言っていたのだ。」とはつきりと感じた。「半分しか目を開いていない。真実を半分しか知らない。」とは、つまり、人は自分の外側にある現実だけを、人生としてとらえているということではないだろうか。あの少女が言った夢を信じるべきということは、つまり、現実ではない夢の中にも真実が含まれることがあるということだ。そして人は外的な状況だけではなく、自分の心の中を見つめてこそ、世界の全体像を見るということではないだろうか。なぜ、そんな考えが浮かんだのか、ユリは自分自身でも理解できなかった。しかし、先日の夢と今日の夢が不思議に結びつき、それを自分に気づかせたような気がしていた。

ユリは好きだったあの男の子のことを思った。夢の中の彼はしっ

かりと中年男性へと変貌を遂げていた。少女に言われた言葉のせいか、ユリは、彼のその姿が少し先の現実であるように思えた。それが嬉しくもあった。彼が昔の美しい少年のままであったら、もつと哀しい気分になった気がする。時は誰もに同じように流れる。それでも本質的なものは、地中深く眠る鉱物のように変わらない。

ユリは、ちゃんと大人になった彼を見て、彼が自分の望むとおり、今も自由に幸せに生きていると信じた。彼の誠実さ、人生を自分自身で理解していこうという精神が、きっと彼を幸福に導いているだろうと信じられたのだ。

今ユリは理解していた。現在の恋愛が終わったこと、自分はそれを納得する必要がある。彼を愛していなかったと認めることだ。愛にいろいろなかたちがあるとしても、やはり自分にとってこれは愛ではなかった。

十六歳のときの恋の哀しさ。あれこそが自分にとって本当の愛だった。人間として生まれたことによる彼の本質的な孤独、哀しみに寄り添っていたかった。それによってなにひとつ変化するものなどなくとも、それだけが自分の存在意義であるように思えた。

生まれて初めてキスをした夜、空には白く半月が浮かんでいた。その美しさを今でもはつきりと覚えていた。世界がこんなに美しく見える瞬間が人生にはあるという不思議を知った。この時がすぐに消えても、一生忘れることはないだろう。そしてそれを感じるこの気持ちはずっと失わずに生きていこうとも思ったのだった。

もう今では思い出すこともなかったその場面を、ユリは、あるひとつの完成された美しい絵のように思い出したのだ。

その日、ユリは電話だけで恋人に別れを告げた。自分に遠慮なく結婚してほしいということを伝えた。彼に対する怒りはいつさいなかった。もう会うことも電話もお互いにやめることにした。友人としての関係を保つ理由もないように思えたからだ。もしかまた会うこ

とがあれば、今とは別の感情がわいてくるかもしれない。自分が彼の恋人に嫉妬を感じないとも限らない。それは心から彼の自由と幸福を願うほどには、その人を愛していなかったしるしでもあった。

8月18日

短い休暇が終わり、今日からユリはまた出社した。朝、自宅出る時間にはすでに三十度以上に気温が上がっていた。それでも今日のユリは、暑さに不平を感じることもなかった。

恋人と別れ、結婚するという選択肢を、少なくとも今のところは失った状態になった。今日からはもう佐々木さんもない。ユリはますます、自分がとりえも個性もない空っぽの人間になった気がしていた。少なくとも今は、自分に出来ることを真面目にやるしかないという気持ちだった。暑かろうと寒かろうと、とにかく行くべき場所へ行き自分の仕事をする。それしか今のユリにできることはなかった。

その日、世間ではまたひとつ変わった事件が起きていた。それはある空き巣犯罪だったが、犯人の捕まっていたいきさつが、メディアにはおもしろおかしく取り上げられていた。

ある街に、空き巣をして生計を立てている一人の若い男がいた。彼も社会に出たばかりの頃は、自分なりの理想を持ち、これから自立した社会人として、人生を築いていくのだという希望に満ちていた。

家庭環境に恵まれない子ども時代を送った男は、幸福な家庭を築き、それを守り抜く人生こそ理想だと考えていた。金には執着がなかった。収入は家族を養える程度に得られればいいと思っていた。そして今よりもっと若く世間知らずだった彼は、職場とは、同じような目的を持ったものが集まり、助け合って楽しく働ける場所なのだと想像していた。

しかし現実には、彼の期待どおりとはいかなかった。

彼が働いたのはある製造工場だった。なんとか仕事をひととおり覚え、さらに自分なりに能率よい作業を身につけた頃、彼は職場の中の問題に気づき始めた。そこは恐ろしいほどの支配社会だったのだ。

作業とは無関係な部分でも、絶えず上司の指図を受けていた。多くの従業員はトイレにいく時間まで管理された。それ以外の部分でも様々な自由が制限され、それはまるで上に立つ人間たちの楽しみであるかに見えるほどだった。

少しでも同僚と話せば、作業中に口をきくなと怒鳴り声がとぶ。理由もなく無能扱いをされ、人間性まで否定するような罵声を浴びせられることもたびたびだった。さらに上司の機嫌が悪ければ延々と説教が続く。当然、その間の作業は中断されるのだが、それは問題視されないことも男には不思議だった。

このような作業場では、規律や統制が必要なことは男にもわかっている。しかし、唇の端に泡を浮かべ、道理の通らぬ説教をしている上司のにこった瞳を見ると、その怒りの感情の底にあるものが恐ろしく思えた。

当然のように、仕事に嫌気がさした同僚たちはどんどん退職していった。彼らが辞めるときには皆、同じようなことを男に忠告した。「お前もこんなところから早く逃げたほうがいい。俺たちは確かに学歴もないし、利口でもないさ。でもこんなひどい職場にいることはないよ。たとえ体力的にきつくても、絶対にもっといい職場があるはずだ。そんな仕事を見つけたら必ずお前も誘うから来いよ。」

しかし、辞めていった同僚たちから、新しい職場への誘いが来たことは一度もなかった。多分、どこも同じようなものなのに違いがない、と男は思った。

不思議なことに、日々、多くの人が辞めていっても業務は回るように出来ていた。男はしばらく働くうちに、その仕組みにも気がつ

いていった。

基本的にここでの仕事は誰にでも出来る単純作業だ。それでも人によって作業効率に差は生まれてくる。

少しでも工夫をし、よりよい仕事をしようとする者もいる。彼らも職場に不満がないわけではないが、いつも最大限に能力を出し切るうと努力をする。会社や上司のためにそうするのではない。彼らは自分自身のため、さらに言えば楽しみのために努力をする。よりよい方法を創造することが、楽しみにつながると知っている人間だ。

言われたことをただその通り、期待以上でも以下でもなく、こなしていく者たちもいる。そしてうまく手を抜き人に押しつける人間、あるいは失敗を人のせいにすることでごまかそうとする者たちもいた。上司にはこのタイプの人間が多かった。問題はすべて作業員の責任とされていた。作業員たちも上司に倣っているのか、手抜きやごまかしが横行していた。

作業員のレベル統一は、会社にとっては重要でないことに、男は気づいた。優れた働きぶりの一部の先輩たちは、例外なく朗らかであり、男にも心を開いた態度で接してくれた。入社した当時、男は彼らを見て自分もそんな風になりたいと、明るい目標を心に掲げたものだった。

しかし、会社が実際に求めている人材は、必要最低限、あるいはそれより劣る程度の労働能力だったのだ。

ここでの作業は単純なものだ。会社にとっては、人数さえ揃っていれば個々の性質や能力など関係なかったし、辞めたい人間はほとんど辞めていってよかった。単純作業であるために、それ以上の能力を持つ者や、自我の強い者は辞めていく。しかし、ここでは、経験、能力、人間性を問わず誰でも受け入れるため、人材が途切れるということがない。また、人がやりたがらない作業を請け負うことで、仕事が途切れることもなかった。

つまり自分たちは人間としてではなく、ここで組み立てている部品と同じなのだ、とあるとき男は思った。いつでも取替え可能な小さな部品。ぞんざいに扱われ、不良品ならば交換される。

しかし、そうは思っても、男は仕事を辞めようとは考えなかった。彼は基本的にプライドや自意識の強いタイプではない。転職しようにも雇ってくれるところもないだろうと思ったし、会社がどんな考えであろうと、自分はやるべきことをこなし、生活するだけの収入を稼ぐ必要があった。そしてここで働き始めてからすでに十数年が過ぎていた。

ある日、同僚のＴさんと昼休憩が一緒になった。Ｔさんは口数少ない物静かな中年男性で、仕事も的確な、そしてどこか知性を感じる風貌の持ち主だった。新人や、態度の悪い若者の面倒もよく見、自分が損をしても他人をかばうようなところのある人だ。男は心の奥でひそかに彼を尊敬していた。

社員食堂で安い定食と一緒にとったあと、Ｔさんが男に話し始めた。

「実は私、今日で辞めるんです。今までお世話になりました。」

「辞めるってなぜですか？」 雰囲気の悪い工場内でも、Ｔさんの姿を見るたびほつとしていた男は、動揺して尋ねた。

「家族が病気をしましてね、その世話をしたり、いろいろあるものですから。」 笑顔をくずさぬままにＴさんが答えた。相変わらず言葉が少ないが、男はそれ以上聞き出すのもためらわれ、職場に戻った。午後の作業中もずっと「Ｔさん、辞めてしまうのか・・・」という思いが頭を離れなかった。

これまでに友人が辞めていったときよりも淋しく、心細かった。時に、自分までおかしくなりそうな工場内で、Ｔさんは唯一のよりどころであり、良心の指針たる人だったのだ。

別れの言葉も、もちろん送別会などもなく、Ｔさんとはいつもと同じように「お疲れ様でした」の言葉だけで別れた。

あとで同僚に聞いたところによると、Ｔさんの妻が重病に倒れたとのことだった。大きな手術を控え、それは命にも関わるものだと言う。しかし、手術後、落ち着くまで休暇をとりたいというＴさんの希望を、会社ははねつけたのだ。Ｔさんとしては、いま仕事を辞め、収入を失うわけにもいかなかったのだが、何がいちばん大切かを考えたうえで退職を決めたいらしい。

その話を聞き、男は暗い気持ちになった。Ｔさんは身勝手なわがままを言うような人間ではない。これまで真面目に、人の分まで背負い込むように仕事をしてきた人だ。愚痴も他人の悪口も一言も口にせず、つつましく生きている。その人が、家族という一番大切なものを大切に、そんな願いさえも叶えることが出来ないのは、なぜなんだろう。人生とはそんなものなのか、と男は思った。会社はいとも簡単にその人を切り捨て、そして自分もやはりＴさんに何ひとつ手助けが出来なかった。

その日、男は憂鬱な気持ちのまま、自分のアパートへ向かってとぼとぼと歩いていった。

自宅までの通り道には小さな公園がある。錆びついたブランコが風にキーキー揺れる、ちつぽけで殺風景な公園だ。休日の昼間通りかかると、半ズボン姿の小学生が数人、ジャングルジムではしゃいでいるのを見かけることがあった。その姿は不思議と自分が子どもだった頃、二十数年も前の時代と少しも変わっていないように見えた。

あまり育ちのよさそうでない子どもたちが、駄菓子を手手に笑ったり言い争っている姿をぼんやり見つめることもある。他人の子どもをじつと見ていれば通報されかねない時代だから、長く立ち止まることはないが、少年たちを見ていると自分の子ども時代が切なく思い出された。

男の父親は、子どもが生まれるとすぐに蒸発してしまい、彼は母と二人きり貧しい子ども時代を送った。母は仕事が忙しく甘えるこ

とも出来ず、顔を合わせると怒鳴られてばかりだった。それでも男は、子ども時代が不幸だと感じていたわけではなかった。勉強は嫌いではなく、成績もよいほうだった。友達もいっぱいいたし、みんなのように習い事をさせてもらえるゆとりはなかったが、毎日草野球をして遊ぶ仲間も大勢いた。

そして子ども時代を思うとき、彼が一番懐かしく、手放してしまつた宝物だと思つるのは「自由」だった。あの頃の自分が唯一持つていた財産は「自由」だけだったのだ。

友達と真つ暗になるまで遊び、心配して探しまわつた母親にひつぱたかれたこともあつた。母を心配させてはいけないという気持ちが、いつも心の隅にあつたが、それでも自分の前には「自由」という果てしない平野が広がつていた。

夜道を歩き、公園の前まで来たとき、男は立ち止まると街灯の明かりに照らされたそれを見た。満開の桜だった。植えられてまだ年数の浅い小さな樹だったが、小枝の先まで満開の花に埋もれていた。その美しさに男はしばらく見とれた。薄桃色のその花は、さらに子ども時代の自分を思い出させた。

母親に手を引かれて学校へ行つた一年生の自分。友達と校門前の桜の花びらを拾い集めたこと。そして街灯に白く光る花は何故か昔母親が洗濯物を干す姿を思い出させた。思い出の中の母は白いエプロンをして、そして干し物もすべて白だった。実際には全てが白だったはずなどないが、何故か白さが思い出され、目にしみた。洗濯物を干す母親にまわりついていて自分の姿。そしてそのときの風の温度や、それにのつて届く草の匂いまでが感じられる気がした。

「なんてきれいなのだろう。」毎日通る道なのに、これまでその美しさに気づかなかつたことが不思議だった。毎日、下ばかり見て通勤しているから気づきもしなかつたのだろう。

男はふと、今日辞めていったＴさんのことも思つた。彼は仕事を辞め、その妻のそばにすることを選んだのだ。人がいちばん大切な

ものを大切にするために人生があるのなら、俺はなにを大切にして
いるだろう、と男は考えた。

「自由になりたい。」 貧乏でもいい。誰にも何にも支配されず、
自由で心だけ満たされているようなそんな生活がしたいんだ。男は
そう思うと、そのことだけで頭がいっぱいになってしまった。

次の日、男は仕事を辞めた。やはり引き止めてくれる人もなかつ
た。最後の仕事を終えて外に出ると、そこには男が心に描いたあの
「自由」が広がっていた。これからはすべてを自分で選択しようと
心に決めた。工場で見たようなシステムに組み込まれてしまわぬよ
う、次の仕事も注意深く決めようと思った。

しかし、それから数カ月後の暑い日に、彼はユリが見たニュース
の「犯人」となっていたのだった。

8月18日(2)

精神の自由だけは二度と手放さないと決めた男は、その後、なかなか仕事を見つけることが出来なかった。高校を卒業したとき、母親が買ってくれた安物のスーツを着こんで何度も面接に出かけた。しかし、早く仕事に就こうと焦れば焦るほど、そのために仕事を辞めたはずの「自由」が遠く消え去っていく。そして最後に彼が考え出したのは、仕事に就かずに金を稼ぐ方法だった。

安物のスーツでも、それなりのサラリーマンに見える雰囲気は男は備えていた。その顔つきや優しい口調は、営業マンであるといつても信じられる。彼はそれを生かし、最低限の生活費を得る方法を考え出したのだ。

その日も男はスーツ姿に、デイスカウトショップで買った合成皮革のビジネス鞄で部屋を出た。時刻は昼下がり、彼は静かな住宅街へと向かう。彼はいかにもといった豪邸の前は、通り過ぎることにしている。そういう家は防犯システムを装備しているからだ。

彼が訪れるのはごく普通からやや劣る程度の住宅である。呼び鈴を押す彼の姿は、もしも誰かに見られても通りがかりのセールスマンか、なにか商用で尋ねてきたようにしか見えなかった。誰もいないことをしっかりと確認すると鍵を壊し、中に入る。そして出来るだけ住人の迷惑にならないよう、汚さず散らかさず、現金を探す。時には見つけれないこともあったが、それでも毎日繰り返しれば、十分に生活費をまかなうことができた。

男は自分なりのルールを決めていた。それは現金を見つけても金額は持ち去らないことだ。出来るだけ一件の被害を少なくし、被害者の負担にならない程度の盗みをするのだ。もちろん良心からでもあったが、もうひとつは、自分自身の自由を守るためには、他人の自由をも尊重すべきだと考えていたからだ。被害者にとって負担に

なるほどの盗みであれば、その人たちの自由を奪うことになる。そうでない程度の盗みなら許されるはずだ、と自分勝手に決めていた。なんとか罪を繰り返すうち、そしてそれが成功するたびに、小額の盗みくらい罪ではないと思うほど男の神経は麻痺していた。

毎朝、決まった時間にスーツ姿で電車に乗り込むと、工場勤務の頃よりも立派な仕事をしているような気さえしていた。そして、あのころには遠いものであった「自由」も今は手にしている。

男は、罪悪感に苛まれることは、再び「自由」を失うことだとわかっていた。だからこそ盗むのは小額に抑え、相変わらずつつましい生活をし、罪の意識に陥らぬように細心の注意をしていたのだった。

その日、男は木造のかなり古い一軒の家を見つけた。ずいぶん古臭い感じだが、造りはしっかりしていそうだ。こんな家には案外、たくさん現金があつたりするものだと思つた。塀の中にはうつそうと木が茂っており、鍵を壊すにも作業がしやすいだろう。まず、男は呼び鈴を押す。何度も鳴らしても誰も出てこない。よし、と男は玄関の鍵を確認すると、なにか様子がおかしい。音がしないようにそつと開けるとなんとすると開いてしまった。中を覗くと、どうやら鍵が壊れているようだ。玄関はまるで空き巣に入られたように乱れている。自分も空き巣ではあるが、いざとなれば飛び込みのセールスマンのふりをすればよいのだからと、小さな声で「失礼します」と言つてみた。やはり誰も出て来ず、奥の様子はしんとしている。なにかどこかおかしいと男は感じた。足元を見ると、靴を履いたままで部屋にあがつたと思われる足跡が、奥のほうへと続いている。

「やはり泥棒が入つたのだ！」男は自分もそれを目的に入つたことも忘れ、大変な事件に出くわしたとろたえた。そしてきちんと靴を揃えると奥へ入つていった。

「うわあっ！」思わず声が出てしまった。彼はなんとなく、好奇

心から部屋へあがっただけだ。ちらりと様子を見、自分が犯人と疑われる前にさっさと他の家を探すつもりだった。しかし、そうはいかなくなってしまったのだ。

乱れた様子の部屋の中に、一人の老婆が手足を縛られ、口にガムテープを張られた姿で床に座っていたのである。

男はとにかくおばあさんを助けなくてはと、ロープを解きながら、しきりに「大丈夫ですか、大丈夫ですか」と繰り返した。手足を解かれた老婆は、八十歳は超えているだろうか、しかし年齢よりもずっとしつかりとして元気な様子でもあった。手足が自由になると、そろそろと自分でガムテープをはがし、「ああ、痛かった。あなたのおかげで助かりましたよ。それにしてもね、あなた、大丈夫か、大丈夫かって、何度も何度も。答えることが出来ないのは見ればわかるでしょう。」と苛立たしそうに早口で言う。

「すみません。」男は小さくなって答えた。

「この年になってこんな目に遭うなんて思ってもみませんでしたよ。ああ、災難なこと。」まるで人ごとのように言う。その様子からはさほどショックを受けているようにも、怖がっているようにも見えない。

「肝の据わったおばあさんだな。」と男は思った。

「ところであなたはどちら様？」とがめるように老婆は尋ねた。

「あ、あのう、僕はセールスマンで、セールスに伺ったのですが、なんだか鍵が壊されてるようで、それで様子がおかしいなとなんとなく、思って、あの、中を見てみたら、おばあさんがいて、それで・・」男のしどろもどろの答えをさえぎるようにさらに老婆が尋ねる。

「ああ、そう、それで何を売ってるの。」男の心臓が早くなる。なにしろ、持参のこたいそうなビジネスバッグには、売り物もパンフレットもカタログも何も入っていないのだ。いや入っているものはあるが、それは鍵を壊すための道具、指紋を残さないための手袋、開かない引き出しをこじ開ける工具などであった。

「助けていただいたお礼になんでも買ってあげましょう。ほら、何を売ってるの？言いなさいな。浄水器？それとも安物のふとん？」

気の強そうな老婆に男はすっかり圧倒されてしまった。たった今強盗に入られ、荒れ放題の部屋の中でいったいこの人は何を言っているのだろう。運が悪ければ殺されていたかもしれないというのに、そう思いながらも男はますますうろたえる。顔が赤くなり、心臓の音を老婆に聞かれているのではないかと思った。

男をじろじろと見ながら老婆は、「私みたいな年寄りには売れないようなものなのかしらねえ。まあ、いいわ。部屋を片付ける前にお茶でも飲みましょう。あなたも飲んでいきなさいよ。」と言う。
「あの、部屋は片付けないほうがいいんじゃないんですか。お茶を飲むよりまず警察に連絡して、それで、このままの様子を警察に調べてもらったほうが・・・」

「あら、そうなの。それじゃあ片付けはやめときましょうか。でもおまわりさんと呼ぶ前にまずお茶くらい飲んだっていいでしょう。ずっと縛られていたのよ。まったくしんどいったらありやしない。」

「じゃあ、僕はこれで失礼します。」

「あら、お待ちなさいな。あなた、おまわりさんが来たら話しをしてもらえないかしら。私の代わりに。なにしろ私はこんな年寄りだし、あれこれ訊かれても面倒くさいじゃないの。」

とんでもない、と男は思った。こっちは空き巣なんだ。こんな事件に巻き込まれるなんて自分のほうこそ災難だ。警察が来る前にさっさと出て行かなくては、ぼろが出たら大変だ。

「いえ、すみません。僕、まだ仕事で行くところがあつて、遅れると社長に叱られるので・・・」

男がそう言うつと老婆は案外あっさりとしたものだった。

「あら、そう。ならしょうがないわね。では、ちよつとお待ちなさいよ。いいものをあげるわ。」その声を後にしたまま、男が玄関から出て行きかけたとき、老婆はその手に小さな黒い塊を持ち、奥から出てきた。

「お待ちなさいってば！これ、持っていきなさい。」と、男の手にその小さなものをつかませた。

「これはね、硯よ。案外、価値あるものなんだけど、強盗どもには価値もわからないでしょうから盗られることもなかったわ。助けてくださったお礼に差し上げるわ。あなたのものだから捨てようと使おうとお好きにどうぞ。それじゃあ、どうもお世話様でしたね。」そう言うとお婆はさつさと家へひっこんでしまった。

男は警察が来る前に早くそこを離れなくてはならなかった。硯をポケットに突っ込み、早足に立ち去ると、男はまっすぐに自分のアパートへと帰ってきた。

冷房などないその部屋は、夏のきつい日差しが入りこみ、すでに四十度を超えているようだ。敷きっぱなしのふとんの上に寝転び、男は今さっきの出来事について考えた。

すごいお婆あさんだったなあ。それにしても殺されたりしなくてよかったよ。何を盗まれたんだろう。あんな古臭い家だし、着物もずいぶんと古そうだったし、たいして金があるわけでもないだろうに。警察はちゃんと呼んだだろうか。

男はあの老婆のことが心配にもなった。いくら気丈でも年齢が年齢だ。突然、体調を崩したりはしていないだろうか。

しかし、あそこへはもう近寄らないほうがいい。男は自分が目撃者となったことに不安を抱いていた。警察は話を聞くために自分を捜しているかもしれない。身元を聞かれればセールスマンでもなく、どこの会社にも勤めてないこともすぐにばれてしまうだろう。なぜ、あそこを訪ねたか問い詰められれば、これまでのことも全部ばれるに違いない。警察が自分を指名手配犯のように探し回っているところを想像した。

寝そべった背中が汗でびっしょり濡れた。男はがばつと体を起こすと、やはり罰が当たったのだと考えた。俺は逮捕されるだろう。たとえば、小額であっても泥棒をしていたのは事実だ。あのお婆あさ

んを縛りつけた強盗と自分は同じだ、と男は今更ながらに思った。他人を傷つけることや、迷惑をかけるなどは考えたこともなかった。ただ自分は自由でいたかっただけなのだ。

そのとき、さっきの硯のことが頭に浮かんた。あれを売れば、どこか遠くへ行く資金にでもなるのではないかと思った。今はまだこの自由を失うわけにはいかなかった。

数日後、男は仕事用のスーツを着込むと、彼の住む街から遠い銀座へと向かっていた。相変わらずの真夏日だった。じつとりとした湿気が体にまとわりついた。上着を脱ぎ、シャツ一枚になっても背中がべたべたとしている。この暑さの中、きちんとスーツを着込んできたのは、少しでもまともな人物に見えるようにという配慮からだ。

男は老婆にもらった硯を売るため、電話帳で調べた骨董店に向かっているところだった。銀座も、そしてそんな店に行くのも、もちろん生まれて初めてのことだ。男には硯の価値などさっぱり見当もつかず、鑑定してもらえるかどうかは電話で確かめてあった。

その店は細長いビルの二階にあった。骨董店という場所の敷居の高さに加え、おかしい経緯から手に入れた品物であることも、男を必要以上に緊張させていた。

中へ入り、見回すと奥の壁際に、初老の男性が一人で座っている。「いらっしやいませ。」

「あの、硯のことで電話をしたのですが・・・。」

「ああ、はいはい。硯を持ってくるって言ってた人ね。」店主は急に笑顔になり、立ち上がると男に近づいた。

「どうぞどうぞ。こちらに座ってください。さっそく品物を見せてもらえますか。」この場にそぐわない雰囲気の方が入ってきたことなど、どうでもいいようだった。よほど好きなのだろう、興味の対象は硯だけという感じだった。取り出す硯を覗き込むように見つめている。

男は硯を、そのままポケットに入れて持つてくるのもどうかと思ったが、ふさわしい包みが思いつかず、結局コンビニのビニール袋にぐるぐると包んで持つてきていた。そして今更ながら、こんなふうにして持つてきたことを後悔していた。

これではいかにも安物ではないか。あのおばあさんも、それほど高価なものをぽんとくれるわけもないし、こんな店で買い取ってもらえない気がしてきた。こんなものを見せて恥をかくだけではないだろうか。それでももう引き下がるわけにはいかなかった。がさがさと袋から取り出して主人に手渡す。

店主は、硯をじっくりと、しばらく眺めた後で男に言った。

「あなた、これ、ご自分で買ったの？」

「いいえ。知り合いからいただいたものです。」

「そうですか。」少しの沈黙の後で、男が訊ねた。

「買い取ってもらえるようなものですか？」

「これはね、もしかすると案外いいものだと思うんです。ただもう少し調べたいので、二、三日待つてもらえませんか。今週中には必ずご連絡しますから。連絡先とお名前を書いていつてもらえますか。」男は自分の名前と携帯電話の番号を知らせると、店を後にした。

それは結局、遠くへ行くという男の計画を変えてしまうことになった。その硯は中国の古端溪であり、ひじょうに高額な品物だったのだ。

男が鑑定に行った骨董店の主人は、「これはもしかすると・・・」という直感に従い、硯専門店を営む友人にそれを見せた。そしてなんとその硯は昔、その店から、老婆の夫が購入したものであることが判明したのだった。

老婆の家は昔からの旧家であり、建築も贅を尽くしたものであった。しかし、こじんまりした大きさとその歴史ある古さのために、一見してそれほどの資産家には見えないのだが、その道の専門家たちには、名家であることは周知であった。

強盗事件を新聞記事で知っていたその店の主人は、この硯は盗品であると思い込んだ。そして犯人か、あるいはその関係者が換金に来たのだと思い、すぐに警察に通報した。男は実名も電話番号も書き記していたので、警察もすぐに連絡を取ることができた。

警察は男に連絡をとる前に、被害者である老婆にも確認をとっていた。硯は盗品ではなく、たまたまそこに居合わせ、拘束された老婆を助けた若者に与えたことも聞いていた。男は容疑者としてではなく、第一発見者として警察に呼び出されたのだ。

警察からの呼び出しを受けると、男は「すぐに伺います。」と返答した。ついに来るときが来た、と思った。硯についての事情を警察から聞かされ、「あのおばあさんは、そんなにすごいものを俺にくれたのだなあ。」と思った。

自分は泥棒するためにあの家に入った。しかし思いがけない場面に遭遇し、夢中でおばあさんを助けた。そしておばあさんは見も知らぬ自分に、こんな大切なものをくれたのだ。

男はあの日からずっと考えていた。おばあさんを助けたのは偶然であり、本当の自分は彼女を縛りつけ脅した強盗と同じ種類の人間であると。礼をしてもらった資格などまったくないのだ。

彼は、子どもの頃からずっと真面目に生きてきたつもりだった。しかし、ただ自分の自由を守るために、身勝手な犯罪を続けてしまった。それは本当に自由に続く道であっただろうか。

男はアパートを出、警察に向かって歩き始めた。

警察からの電話で、硯は貰ったものとわかつていること、そして彼女は男に感謝しているということを聞かされた。現場を一番先に見た人物として、話を聞かせて欲しいと男は言われていた。男は重い足取りで歩を進めた。自分の人生が変わってしまうかもしれないと考えていた。警察でうるたえ、これまで重ねた犯行がばれれば、刑務所暮らしは間違いなかった。

公園の前まで来たとき、彼はいつも以上にそこに人が多いのに気づいた。

「ああ。今は夏休みか。子どもやその親がいつもよりたくさん遊びに来ているのだろう。」

ふと見ると多くの子供連れが公園の片隅にある水飲み場の前に固まっている。小さな砂場と錆びついた鉄棒に挟まれたそこは、地面が畳一畳分ほどのコンクリート敷きになっている場所だ。その前に十人ほどの大人と子どもが立って、地面を見つめている。

「なにがあつたのだろう。」

実は警察に行く勇気が出ない男は公園に入り、立っている人々の隙間から、同じように地面を覗いてみた。そこには白いチョークのようなもので、びっしりと文字が書き込まれていた。人々の足がじやまをして全てを読むことは出来なかったが、見えた部分だけで男には充分だった。自分自身に向けられた言葉がそこにはあつたのだ。

“ 学校のノートの上

勉強机や木立の上

砂の上 雪の上に

君の名を書く

金色の挿絵の上

兵士たちの武器の上

国王たちの冠の上に

君の名を書く

ひとつの言葉の力によつて

僕の人生は再び始まる

僕の生まれたのは 君と知り合うため

君を名ざすためだった

自由と。

男はとぎれとぎれに見えるその文字を読みながら、自分が泣いているのに気づいた。その言葉が光線のように彼の心に差し込んだのだ。

自分が求め続けた自由。それを手放したのは自分自身であった。自由のためには、もう少し利口にならなくてはならないのだろう。自分の愚かさが情けなかった。

それでももう一度自由を求めることは出来るはずだ。一生をかけても真の自由と出会いたい。それに挑戦するだけの時間は、自分の人生にはまだたっぷりあると思えた。

警察署で男は、自分が老婆を見つけた理由を話した。これまでの犯行についても全て告白した。骨董店に預けたままになっている硯はおばあさんに返して欲しい。そして自分からの謝罪を伝えて欲しい、と言った。これが事件の内容の全てだった。

男は公園で読んだあの文については誰にも話さなかった。拘置所の中で時々、思い返してみる。正確な言葉は時間とともに少しずつ忘れてしまった。それでも、あのときの警察に向かう自分の気持ち、公園のむんとする暑さと子どもたちの騒ぎ声。そしてそこだけが別世界であるように、しん、としてあの文章を読んでいた人たちの姿を、はつきりと思い出すことが出来た。

その光景を胸に思い浮かべるとき、男は孤独に生きてきた自分の人生に、暖かい光が当てられたような、やわらかい気持ちになった。あの言葉は誰かが自分に贈ってくれた、「真の自由はいつでもお前の隣にある」という語りかけであると思えたのである。

男があの日読んだのは、フランスの詩の一篇であった。

ユリはその日、この事件を報道番組ではなく、ワイドショー的な

情報番組で知った。

「空き巣犯が強盗被害の老婆を助ける!？」といった内容でおもしろおかしく紹介された。老婆からもらった硯が、犯人の自首につながったことも伝えていた。

先日も似たようなことがなかったか、とユリは思う。そうだ、コンビニ強盗が自首したあの事件だ。なぜか最近、凶悪な事件以外で話題になるニュースが多い。現金の置き去り事件も、いまだ、時々起きている。これは社会がまだ捨てたものではないという、樂觀的な出来事ととらえてよいのだろうか。いずれにせよ、悲惨な出来事よりはずっといいと、ユリは思った。

・自由

ノポール・エリュアール／安藤元雄訳／フランス名詩選／岩波文庫
より

8月23日

ユリが、恋人と最後の電話で別れてから数日が過ぎた。終わった恋への未練はなかったはずだが、やはり宙ぶらりんに放り出されたような気分のままだった。

結婚には興味がないと言っていたいられたのも、いつかは人並みに家庭を持つと思っていたからだったのだ。それを失った今は、自分が本当はどうしたいのか、ますますわからなくなっていた。

その日、ユリは会社で仕事をしながら、「そうだ、祥子に会って話をしよう。」と思いついた。離婚したばかりの彼女なら理解しあえると思ったわけではないが、祥子なら「だから言っただけでしょう。自分が悪いのよ。」とずばりと言ってくれるだろうし、なにより一緒に笑いあいたいと思ったからだ。

「今日の夜、電話してみよう。」

終業時間になって、なにげなく携帯電話をチェックしたとき、古い友達からの着信履歴があった。祥子と同じ、大学時代の友人だ。彼女も結婚して、最近出産したばかりだった。

「今頃は夕食の準備で忙しいかな」と思いつつも、久しぶりの連絡が気になり、すぐにかけなおしてみた。

その電話は祥子が事故で亡くなったという知らせだった。それを聞かされてもあまりにも突然のことで、ユリにはまったく実感がわいてこなかった。

その二日後、ユリは葬儀にも出席した。それでもユリは祥子ももういないとはとても思えなかった。

祥子はその日、実家のある神戸に帰っていた。そして母親に、「ちよっとドライブしてくる。」と告げ、一人で車に乗り、そのまま

山道から谷底へ転落した。ブレーキ跡はなかったらしい。祥子は学生時代から車を所有しており、運転には自信を持っていた。それは事故として処理されたが、家族も友人も心の隅のほうで、「自殺なのではないか。」という悲しい推測をしているようだった。

祥子の家族によると、東京のマンションはすっかり片づけてあり、実家に戻ってから、置いてあった自分のものを整理し捨てていたそうだった。

しかし、それらのことが、自殺だったという証拠にはならないとユリは思った。祥子は、いろいろなものを捨て去り、新しい生活を始めようとしていたに違いない。そのために実家にあるものまで、過去をすべて整理しようと思ったのだ。ユリは、あの笑顔の裏に、祥子を追い詰めるものが潜んでいたなど考えたくなかった。

ついこの間会ったばかりの祥子の姿が、くつきりとユリの前に浮かんでくる。離婚の話をしたがら、あんなに元気そうだった。明日、世界が減びるとしても最後の日まで恋をしていたい、と笑った笑顔が思い出された。あれは本心であったとユリには思えた。

神戸から戻り、ユリは家でパソコンのメールボックスを開いた。祥子から届いたメールをもう一度読み返すためだった。最後に祥子と会った次の日に送られてきたものだ。いつもは携帯電話にメールする祥子が、珍しくパソコンに送信してきた。それはいつになく長文で、ずいぶん昔のことなど書いているのが、今となっては不思議だった。

「ユリ、この間は会えて嬉しかった。変わらず元気そうで安心しました。私はあの日話したとおり、離婚なんて経験してしまいました。が、元気でやっているのだから安心してね。これからは私もユリと同じ独身なので、またゆつくりと会いましょう。」

この間、ユリは人生ってなんだろう、何のために生きているんだろうなんて言っていたけど、この文章覚えてる？

“私は自分の中からひとりで出てこようとしたところのものを生きてみようと思っただけにすぎない。なぜそれがそんなに困難だったのか。”

大学るとき読んだヘッセのデミアンの中にあつた言葉です。あの頃、私たち二人ともいろんなことに悩んで迷つて、この文にすごく共感したよね。私はユリにすっかりしなさいなんて言っただけで本当は私もユリと同じ。今もこの文章が身にしみています。人生って何のためにあるのか、生きるってどういうことなのか、大人になってもよくわかりません。でも私は、それを正直に言うユリが好きです。ユリはこれからもずっと自分の中から出てくるものを探していけばいいと思うよ。

でも恋愛はちゃんと気合入れてしたほうがいいよ！また会おうね。バイバイ。祥子」

「デミアン」を、あの頃ユリは何度も何度も読み返した。自分が抱えた問題の先にある、喉から手が出るほど欲しかった答え、そのヒントが、この物語の中にあるように思え、それを探しながら読んだものだ。祥子にも読むことを薦め、二人で序文にあつたこの文章についておしゃべりをしたことがあつた。

お互いに自分が何者なのかまったくわかっていなかったあの頃。自分の中からひとりに出てくるもの、とはいいたい何だろう。もうすでにそれを考えることはなく、毎日ただ過ぎていくだけになった。

祥子はどうだったろうか。それを見つけたのだろうか。少なくとも、少しでもそれに近づくことの出来た一生であつただろうか。

この夏、ユリは恋人と別れ、そして大切な友人を失つた。しかし暑い日々は、それまで同じように過ぎていった。二人を失つた悲しみよりも、それを忘れていつもどおりの日常が続くことそのものが、ユリには悲しいことだった。

ユリは幼い頃から心の中に、ある淋しさを抱えていた。それは、この世界はすべて、別れや終わりを前提に成り立っているという感覚だ。それがどこから来るのかはユリにもわからなかった。

ユリにとって幸福と不幸、出会いと別れは、風ですぐにくるりと裏返る一枚の葉の裏表のようなものだ。大切なものであるほど、いつか失うという思いが強くなる。ユリは自分のその感覚を不思議に思っていた。子ども時代、なにか悲しい出来事があったわけでもない自分が、こんな考え方をするのはあまりにも暗いことに思えたからだ。

ユリは調和のとれた家庭で愛されて育ち、彼女もまた家族を大切に思っていた。家族への思いは、人よりもやや強すぎるほどでもあった。両親、そして姉妹、それは生活の全ての基盤であり、ユリの幸福のすべてはそこから発生していた。夏休みの家族旅行。クリスマス大きなツリーと皆で交換する贈り物。姉妹三人、夜中までおしゃべりして叱られた日々。毎年のひな祭りごとの写真。母の作る大量の手料理。ユリはずっと幸福な家庭で育ち、なんの苦労も経験していないのだ。

ユリは幼い頃、小さな子どもがよくそうであるように、家族を失う想像をして一人で泣いた。側で眠っている姉妹にも気づかれぬよう、声を殺して布団の中で泣いた。そんな想像をする自分が恐ろしくて、誰にもそのことを話せなかった。

両親が死ぬことや、なにか悲しいことが起きて家族がばらばらになるとか、そんな空想をしては泣いていた。ふつうは大人になるにつれ、そんな癖はなくなるのだろう。ユリも悲しい空想をすることをやめた。しかし、家族であれ、恋人や友人であれ、出会った人とはいつか必ず別れが来るという思いは成長しても消えることはなかった。

ユリには、大人になった今でも時々思い出す出来事がある。まだ幼稚園にも行っていない頃のことだ。家族でテレビを見ているときに、ある歌が流れた。それを聞いていたユリは突然大声で泣き出し、理由のわからない家族を驚かせた。

その曲は、その一年ほど前に放送されたテレビドラマの主題歌だった。幼いユリの心には、その歌を聞いたと同時に、一年前の風景がよみがえったのだ。ドラマを見ている両親の姿、コタツで食べるみかんの味、うとうとしている自分を父親が抱き上げてベッドへ連れて行ってくれたこと。そのすべての感覚がユリの中に戻ってきた。そのとき、幼すぎて言葉には出来なくとも、すべては過ぎ去っていくことをユリは知ったのである。日々はどれも似通っているが、同じ日は二度とないこと。過ぎた時間はけっして取り戻せないこと。そして取り戻せないもののほど、甘く感じられることなどを。

そしてユリはその頃から、幸せも永遠ではないという思いが、常に心のどこかに染みをつけるようになった。人は必ず死ぬ。人生もこの生活も、必ず終わりが来る。明確な言葉でわかっていたわけではない。しかし、この幸福は限定されたものであるということだけは感じていた。だからこそユリは、人生とは、人が思う以上に大事なものであるかという気持ちが強くなった。しかしそれは同時に、ユリの恐がりで現実に足を踏み込まない性質に影響を与えるものでもあったのだ。

成長したユリは、よりいっそうその感覚に自覚的になった。とくに誰かに話したことはなく、日常の中で意識することもない。とくに重要な特性だと思うわけでもないし、自分が心に傷を抱えているとも思わない。

しかし、自分の近くにいた人が去っていった今、ふいにこの感覚を思い出していた。やはり人は去っていくのだ、という気持ちだ。昔の恋にも、その悲しい感覚がいつもつきまとっていた。彼を大

切に思えば思うほど、相手が自分のものになり、一緒にいられるような気がまったくしなかった。みな、自分だけを置いて去っていつてしまう。今夜、一人で祥子のメールを読んでいると、それは悲しいというより、手出しの出来ないどうしようもないことに思えた。

ヘルマン・ヘッセ／デミアン／新潮文庫／高橋健二訳

8月27日

恋愛の終わりや、身近な人との別れを経験したとき、突然自分の人生が流動的なものであると気づくことがある。変化のなかった毎日に風穴が開き、敏感になった精神の隙間に、それまで見過ごしていたことが入り込む。そのときのユリもそのような状態になっていた。

暑さは相変わらず続いていた。毎日同じように仕事に向かい、夜になるとまた家へ帰ってくる。そんな同じような習慣を繰り返しつつも、心の中がこれまでとはどこか違っていた。

その夜、ユリは珍しく部屋でラジオをつけていた。最近妹とテレビを見てはしゃぐ気分にもなれず、自分の部屋で過すことが多かった。落ち込んでいるというのではない。ただ心が、風の吹かない湖面のようにしんと静まり返っているのだ。

ラジオではある女性歌手がゲストとして番組に招かれ、話していた。ユリが高校生のときにデビューしたその歌手が、久しぶりに新作アルバムを発表したらしい。

その人のデビュー時のCDをユリは昔、買ってもっていた。今ではまったく聴くことはないが、当時のことを思い出すと今でも曲が頭に浮かぶ。その唄は、クラスは違うが仲良くしていた女の子に教えてもらったものだ。

長い髪と白い肌をもつ友人。ユリは同性ながら、その女の子の外見の美しさに惹かれた。初めて彼女を見たときから、その圧倒的な透明感がユリの心を捉えていた。きれいな女の子なら同じクラスにもいたし、ユリ自身も可愛い女の子の部類に入るタイプだった。しかし、その子の柔らかさそうな髪や細い首、他の女の子たちのように

無駄に笑わないその雰囲気、当時のユリにはとても特別なものを感じられた。

彼女とは選択授業で同じクラスになり、あっという間に仲良くなった。学校以外で会うことは一度もなかったが、時間があるときにはよく二人でおしゃべりをした。彼女との話題は同級生とおしゃべりとは違って、いつもとても重要事項のように伝えたいことだけを話したものだ。クラスが違うために、おしゃべりをするのもほんの短い時間だけだ。その短い間に彼女は自分の考えを真剣に語った。

話の内容はほとんどがお互いの見つけた最近気になる音楽、マンガ、小説のことなどだ。特に音楽が好きだった彼女は、ライブにも出かけているようで、その興奮をよくユリに話した。そのきれいな女の子がロックのライブに行つて飛び跳ね、頬が高潮している姿を想像すると、なぜかユリはドキドキしたものだ。見慣れた制服姿ではない彼女は、より一層魅力的であろうと想像できたからだ。

おしゃれのこと、どの店で買い物をするかなども二人はよく話があった。ユリが十代の子に人気のお店で買うのに比べて、彼女は海外の高級ブランドの話をよくした。実際にそんな店で購入したものを身につけているらしく、またそれが容易に想像できるような子だった。私服姿のその子を想像するとき、学校では近くにいても、実際には自分とは遠い世界に彼女はいるようにユリは感じた。

今、ラジオに出ているのは、当時その子が「今、一番好きなの。」と教えてくれた人だ。

その頃のユリは、自分よりも大人のおいがする彼女を、崇めているようなところがあった。憧れ、他人からの影響、それらがその頃のユリをかたちづくっていた。姉、そして好きだった芸能人や小説、映画、マンガ。大好きなボーイフレンド。そして間違いなくその女の子もユリが、大きな影響を受けていた一人だ。彼女の話し方や書く字を真似てみることもあった。彼女の持つ雰囲気を自分も纏

うことが出来たらどんなに素敵だろうと想像した。

しかし、たった十数年しか生きていなくとも、人はしっかりとその背景によって雰囲気を決まづけられているのだ。彼女のその雰囲気は、裕福だが幸福ではない家庭に育ったバックグラウンドによって造られたものだ。美しく孤独で、プライドが高く、そして少女だけが持つ脆さを兼ね備えている。ユリには、平凡で幸福な家庭の次女として築かれた雰囲気があった。それはどうやっても取替えがきくはずもなく、だからこそユリはそれほど彼女に惹かれたのだ。

彼女が好きなその歌手のアルバムを、ユリは毎晩繰り返し聞いた。それまでに聴いていた誰とも違う個性的な声と歌詞。メロディとリズムを楽器と微妙にずらすような唄い方。ラジオから流れてくるその声は昔とまったく変わっていない。聴けばすぐにこの人だとわかる声だ。ユリは、制服を着た彼女の、あの美しい髪が初夏の風になびいたときの匂いを一瞬思い出した。

ラジオではDJが、歌手にアルバムにこめた思いについて聞いている。

「みんなそれぞれが行動することで世界がよくなるなんて、理想に過ぎないと思うこともあるの。でもね、それが夢物語か、それとも可能性のある真実かなんて、実はどうでもいいかって思っている。今年の異常な猛暑も、地球の危機であって、私にはそれを止めることはできないのかもしれない。でも、たとえ単なる理想、夢物語だとしても行動するかしないかは自由でしょう。私は世界が、そして人間が、少しでもよくなることを目指して唄いたいの。」

「私は昔から現実離れしているってよく言われていたし、実際変人だと自分でも思う。いつから大人になったのかさえ自分でもわからないの。でも自分はこれでいい、というより、これが自分だからどうしようもないの。この自分で出来ることをしていくしかない。この自分が作れる歌を唄っていくしかないのです。」

「今、世界中で起きている問題の多くは、人間自身が創り出したも

のでしょうか？つまりそれは元を辿れば、人間の精神が生み出したものだよ。だったら問題に立ち向かう方法として、直接、その部分に、人間の心に響かせるものこそが必要なんだと思うの。そして芸術や、音楽や文学、映像、そういうものって、そういうことでは政治よりもずっと力があるかもしれないと思う。」

ユリは、その言葉をひとつひとつ真剣に聞いた。その意味がユリにはとてもよく理解できる気がしていた。「自分がいつ大人になつたかわからない。」という言葉は、ユリ自身がいつも感じていたものだ。ユリはいつの頃の自分が子どもであり、どこからが大人といわれる自分になったのかわからない。自分はいつも同じ自分ではなかった。その気持ち、いつまでも現実離れたような子どもじみた自分の原因となっている、と思っていた。「これが自分だからどうしようもない。この自分で出来ることをしていくしかない。」その言葉を自分に向けて心の中でつぶやいてみた。

それにしても不思議だ、とユリは思った。先日見た昔のボーイフレンドの夢。そしてラジオを聴くことで突然に思い出した昔の友人のこと。これまでまったく思い出さなかったようなことをこの頃、思い出すのはなぜだろう。

そしてこのラジオのインタビューもそうだが、誰もが以前よりますます、世界や人間のことを考え始めている気がする。やはりこの夏の常軌を逸する暑さが、人々を無意識にその方向へ向かわせているのだろうか。

「このアルバムを製作するにあたって、ジョルジュ・サンドの言葉に触発されたというようなことをお聞きしたのですが、それについてお話していただけますか？」DJが歌手に尋ねる。

「ええ。読んだ本にあった言葉です。世界が苦しみに満ちているとき、芸術家や、たとえば私のように歌を歌うことは、理想を追い求めるばかりの無駄な存在ではないかと思うこともあるの。私は歌手

であって平和活動家ではないし、自分に出来る範囲も理解しているつもりではあるけれど、それでも時々、罪悪感を感じもする。サンドは、芸術家は感じやすく弱い存在だけれど、そんな時代にこそ、人の心に美しいものや良いものを届けることが使命だ、というようなことを言っていて、私はそれにとても救われたような気持ちになったの。私は自分に出来ること、つまり、歌を作って唄うことしかできないけれど、世界やこの気候とも無関係ではないと、心のどこかでは思っていたいの。そうでないと唄うことも虚しくなってしまう気がするから。」

インタビューの最後に歌手は、自分のホームページにその文章を載せていると言い、ユリはすぐにそれを読んでみた。

“人々が殺戮しあっている際に和合を説くことは、砂漠で叫ぶにひとしい。人々の魂が、直接の勧告はいっさい耳に入らぬほど激動しているような時代があるものだ。中略

ダンテのような荒れ狂う力強い天才は、その涙、憤懣、興奮をもって、一辺の恐ろしい詩、拷問と呻吟で埋め尽くされた一編のドラマを書くのである。彼のごとく、鉄と火もて鍛えられた魂の持ち主でなくては、地上の悲嘆という苦しい煉獄を眼前に見ながら、象徴の地獄の醜惡な事物の上にその想像力を傾けつくすというようなことは、とっていなしえないのである。

今日では芸術家はもつと弱く、感じやすくなっていて、自分と大体同じような時代全体の人々を反映し反響する人間に過ぎず、したがって、この場合にも視線をそらし、想像力を他に転じて、平穩と淳朴と夢想との理想郷に想いを馳せたいという、やみ難い欲求を感じる。彼がかかる行動をとるのは、その弱さのためである。が、それを恥じてはならない。なぜなら、それはまた彼の義務でもあるのだ。

人間が誤解しあい憎みあうことから世の中の不幸が生じているよ

うな時代においては、芸術家の使命は、柔和や信頼や友情を顕揚して、清浄な風習や、優しい感情や、昔ながらの心の正しさなどが、まだこの世のものであり、もしくはあり得るということを、あるいは心をすさませ、あるいは力を落としている人々に思い出させてやることである。

現在の不幸に直接言及したり、発酵しつつある激情に呼びかけたりすることは、決して救済への道ではない。むしろ、ひとつの甘い歌、ひなびた鳥笛の一声、幼子たちを怯えも苦しみもなく寝つかせるひとつの物語のほうで、小説の色づけによって一層強烈に陰鬱になった、現実の不幸を見せつけるにまさるのである。“

・ジオルジュ・サンド／愛の妖精／序文／岩波文庫／宮崎嶺
男訳

ユリは時間をかけて、かみしめるように全文を読んだ。一つ一つの言葉が心にしみこんでくるようだった。自分が子どもの頃から本を読み続けていた理由がわかったような気がした。

読書することでユリが見つつけてきた理想は、これまでの彼女にとって、実生活を邪魔するものでもあった。自己の中に築く理想が甘く美しいものであるほど、それに固執すれば現実を生き難くする。理想は理想として心の中にだけ存在すると割り切る必要があった。しかし、それは実際には無駄でも邪魔でもなく、現実が困難であるほど、それを打破する力の根源となるのかもしれない。もしそうであるなら、それこそユリが理想として憧れてきたことであつた。

8月29日

八月が終わりに近づいても、猛暑は終息の気配がなかった。世界各地で異常気象やそれによる災害が起きていた。

少し前にイタリアの小さな街を大型台風が襲った。その海岸沿いの小さな都市は、人口もさほど多くない面積としても小さな街だ。しかし、その美しい風景により世界有数のリゾート地として知られている。ヨーロッパとアメリカの富豪たち、そして有名人などもバカンス用の家をそこに所有していた。

バカンスの時期以外、住人たちがひっそりと静かに暮らすその街を、これまでに経験のない台風が襲ったのは、観光シーズンが始まる前のことだった。住居や店舗などの建物が強風に破壊され、なんとか残った建物も窓ガラスが飛び散り、大雨に浸された。

その頃、ユリもニュース映像で贅沢なリゾートホテルが廃墟のようになった様子を目にした。観光業に就く者が多い住人たちは、住む家とともに働く場所も失った。これからすべてを再建し、またあの美しいリゾート地に戻るまでにはかなりの時間がかかるであろうと思われる。

ユリはそのニュースを見たとき、自分もいつかは訪れてみたいと憧れていたその街の変わり果てた姿に驚いた。そこは、ユリが見るような女性雑誌でもよく特集されていた。古くから観光で栄えた小さな都市は海と街並みが美しく、とくに華美でなく歴史を感じさせる建造物に贅沢さが感じられた。その変わり果てた姿にユリは少なからず衝撃を受けていた。

そしてつい最近、その街を再建するためのチャリティーがパリで行われた。欧米の有名ミュージシャンたちが集まってライブを行うのだ。ハリウッド俳優などもゲストとして参加するそのコンサート

は、早くから世界中の話題となっていた。この一夜のコンサートが生み出す利益は相当な額になるはずであり、打撃を受けた街にとって大きな助けになるものだった。

ユリがテレビをつけっぱなしにしていると、番組後のスポット二ユースが、コンサートが大盛況のうちに終わったと伝えていた。何気なく画面に目をやると、アナウンサーがこう告げた。

「コンサートは成功を収め、最後はアメリカ人歌手Bさんの次のような言葉で締めくくられました。『もし明日世界が終わるとしても、私は今日、林檎の種をまくだろう』」大きな被害を受けたこの街を人間の力で復興させる、という力強いメッセージです。・・・ニユースをお伝えしました。」

それを聞いたユリは、この言葉は確かに聞き覚えがある、と思った。たしか、祥子が言っていたのだ。「明日、世界が滅びるとしても私は恋をするわ。」と。

それから、あの政治家の失言問題が起きたときには、やはりニユース番組でキャスターが言っていた。なぜ、この言葉を最近よく聞くのだろう、とユリは不思議に思った。この暑さといい、もしかすると本当に地球が危機を迎えている前兆ではないだろうか。

ユリは思わず自分自身でその言葉を口に出していつてみた。「明日、世界が終わるとしても・・・」言葉にすることで、何度も繰り返しこの言葉を耳にする理由がわかるかもしれないと思ったのだ。

これは本当に世界が終わりに近づいているという暗示なのかもしれない。一瞬、ユリは背筋が寒くなった。

大切な出会いも、書棚に詰め込まれた大好きな本も、すべてはいつか来る別れを前提に存在している。人生はいつか必ず終わる。しかし、だからといって、愛する人と関係を持たずに済まそうとか、

おいしいものを食べてもしようがないとか、おしゃれをしてもなんになるとか、普通、人はそんなふうには思わない。生まれてからいつか死を迎えるそのときまでは、生にのみ焦点を当てて生きるのが人間というものだろう。ただし、それが可能なのは「死」がいつ訪れるかを知らないからである。もし明日、地球の終わりとともに死を迎えると知ったら、それでも私は「生」に焦点を当てて、いつもと同じ日常を過せるだろうか。

「それでも私は今日、林檎の種をまくだろう……。」「ユリはもう一度声に出してつぶやいてみた。

8月30日

今日で何日、三十度以上の日が続いているだろう。この頃ではユリも嫌気がさし、天気予報の予想最高気温を聞く気も起きなかった。まもなく、この暑さも終わるといふ発表さえあれば、たぶん気分はずっと楽になるだろう。しかし、お天気キャスターは「この厳しい暑さはもうしばらく続くでしょう。水分を補給し、熱中症には十分に注意してください。」と同じせりふを毎日繰り返すだけだ。

その日も朝から三十度を超え、そして生ぬるい雨が降っていた。雨は細かい霧のように、じつとりと体にまとわりつく。

ここから駅まで歩く間に体中が湿ってしまっだろう。そしていつものようにぎゅうぎゅう詰め電車に乗る。ユリはうんざりした気分だった。

電車の中は冷房が強く効いているけれども、すし詰め車内では涼しさも感じられない。湿って熱を持つ体を人にくっつけあい、数十分間我慢することを思うと仕事を休んでしまいたい、とさえ思った。しかし本気で自宅へ引き返すわけではない。ため息をつきながらもユリは駅へと向かった。

いつものように電車はこれ以上はないというほどに混雑していた。暑さと湿気、寝不足、満員電車の不快感。

「ああ、もうだるいし暑いし、うんざり。仕事に行くのももう面倒くさい。休みたいなあ。それにこの隣のおばさん、どうして濡れた傘を私の体に近づけるの。もっと離れて欲しい。イライラする。」
ユリは心の中でつぶやいていた。

「うるさい！」突然、中年男性のイラついた声が社内に響いた。あまりのタイミングのよさにユリは思わず、自分が心で言った愚痴

に対して発せられた言葉なのかと思ってしまった。

「……まさか、声に出して言ったわけじゃないもの。ああ、あの子達に向かって言ったのね。」

さきほどから数人の若者がおしゃべりをしていて、時々笑い声を上げていた。それにたいしての怒鳴り声であつたらしい。

電車の中は一瞬、静まり返った。それまでは自分自身もイライラしていたユリだったが、「なにもあんなに怒らなくなつていいじゃない……。」と思った。朝の通勤電車は眠りこけている乗客も多く、昼間ほどざわついてはいない。だが、おしゃべり禁止のルールがあるわけでもないし、若者たちも大騒ぎというほどうるさかつたのでもない。

雨の不快さに加え、今の一件で「悪い“気”」が車内に充満したようでユリはますます陰鬱な気分になつた。

通勤電車の中で人間の嫌な部分を見ることは多い。自分の属する社会の中ではマナーを守る人でも、電車という他人ばかりの限られた空間の中ではそうでなくなる。

整列せずに乗り込む人、ぶつかつても謝らない人。混み合っているのを承知のうえでぐいぐい押してくる人。怒鳴る人やぶつぶつと文句を言う人。ゴミを置いて降りていく人。老人やハンディのある人に座席を譲らないこと。

通路をふさぐ、周囲の他人を無視したような大騒ぎ、食べ散らかす、メイクや着替えをすること。例を挙げればきりがない。ユリはそれらが苦手だった。注意をするほどの勇氣もなく、しかし許せるわけでもなく、不快感だけが募る。

今朝のユリがそうであつたように、ほかの乗客たちもイライラがピークに達していたのだろう。

さきほどの男性の怒鳴り声に続いて、どこかで言い争う声が聞こえてきた。混み合つた車内では、どのあたりで誰が口論をしている

のかはわからない。しかしいくら聞かないようにしても聞こえてくるその声がユリをますます落ち込ませた。男性の低く怒鳴るような脅すような口調。それに反論する若い女の子の声。しかしその言葉遣いは女の子とは思えないような口汚い罵りだった。

「ああ嫌だ。嫌だ。」とユリは思った。誰もが自分さえよければいいと思っている。そして驚くほどの寛容さの欠如。朝の通勤電車では一緒に乗り合わせた他人に対し、まるで憎むべき敵であるかのような態度をとる人がいる。

この街は以前からこうだっただろうか。少なくとも学生時代のユリは、こういった状況に気づいていなかった。社会に出て毎日通勤をするようになってから、朝の電車にはストレスが満ちていることに気づいたのだった。

「あつ！大丈夫ですか？」

ユリが、ひたすら早く駅に着くことを願っていると、再び大きな声が車内に響いた。

「たいへん。大丈夫ですか？」数人の人の声がしている。

「すみません。場所を空けてください。」

「そうつと。静かにしててください。」

「こちらにどうぞ。」

「横になっていたほうがいいですよ。」

落ち着いた男性の声、若い女性の声などが入り混じってユリの耳に聞こえてくる。

「こつち、こつち。どうぞ。早く。」

「誰か駅員さんと呼んだほうがいいんじゃないですか。」

「これを使ってください。」

「いいんです。いいんです。気にしないで使ってください。」

声のするほうを見ると車内の奥のほうで、それまでじつと立っていた多くの人がざわめいて位置を変えている。人々は身を寄せ合ってシートの前にスペースをつくり、様子を窺っているようだった。

誰かが気分が悪くなつて倒れ、座席に横にならせたようだ。周囲の人達が、皆で協力してその人を休ませて様子を見ているのだ。誰かが呼んできたのだろう、すぐに車掌が来て、「次の駅で降りられますか？」と聞いている。「はい。」小さな声が聞こえた。「次の停車で助けを頼んでありますから、そこで降ろします。救急車も手配しましたので。皆さん、ありがとうございます。」

倒れたのは学生のような若い女の子で、駅に着くと少しは良くなつたのか、車掌に抱えられて降りていった。降りがけに、泣きそうなか細い声で周囲の人達に「すみませんでした。どうもありがとうございます。」と繰り返している。それに答えるように中年男性が「お大事にね。」と言った。

電車の扉が閉まり、ゆっくりと動き出すと車内はまた静かになった。しかし、ユリは、いや誰もが、さきほどの男性の怒鳴り声や、争いのことは忘れていた。それよりも、今の倒れた女の子のこと、周囲の人がいつせいに見せた他人への優しさのほうへ心が向いていた。ストレスでいっぱい、他人には無関心に見えた乗客たちも、こうして何かが起きるとひとりの個人として思いやりの気持ちを見せてくれるのだ。

ユリはさっきまでのイライラした気持ちが消え、同時に自分は物事の悪い点ばかりを見ていたのではないかと思つた。そしていつか出会つた、電車の中、大声で唄い喧嘩の仲裁をしたサラリーマンのことを思い出した。

目の前で嫌なことが起こつても、それだけがすべてではない。日常の中では見えにくくなつていても、良いものが奥に潜んでいることもあるということか、とユリは考えた。

「世の中の善を見落としてはいけない。勇気ある行動は、あらゆる場所にあふれている。」

誰かがテレビで話していた言葉だ。それが不意にユリの心の中に浮かび上がったのだった。

8月30日(2)

ユリは昼休みにそばでも食べようかと一人、外へ出た。いつもは健康のため弁当を持参していたユリだが、この頃はずっと外食ばかりだ。この気候では弁当もすぐに腐りそうだし、なにしろ食欲もあまりない。このところ毎日冷たい麺類ばかりを流し込んでいる。

店は昼休みの勤め人たちで混み合っていた。注文を終え、ふと店内を見回すと、同じ部署の川田恭介と目があつた。

「あ、島村さん！」　ユリに気づくと彼は立ち上がり、「ここ、いいですか。」と隣に座つた。

二人でそばをすすりながら、食欲がない、眠れないなど、最近の暑さについての愚痴を言い合つた。恭介は「僕の部屋なんてエアコンもないから、もう寝不足もいいところですよ。だから最近では通勤電車の中が僕の寝場所なんですよねえ。」

「そう言えば、電車つて言えばね……」　恭介が“電車”という言葉を口にしたことで、ユリは今朝の電車での出来事を思い出して、話し始めた。

「今朝ね、倒れちゃった人がいたのよ。でも周りの人がさつと助けて、次の駅で降りられたので多分、大丈夫だったと思うけど。まったくこの暑さに、あの満員電車じゃ倒れもするわよね。」　すると、恭介が思いがけない質問をしてきた。

「島村さん、その助けた人達つてどんな様子でした？」

「え？　どんな様子つて？　私は少し離れたところにいたからよくはわからないけど、別にどうってことないわよ。まわりにいた7、8人の人達が、倒れた女の子を座席に寝かせて、車掌さん呼びに行つたの。」

「そうですか。　妙に親切な感じじゃなかったですか？」

「そりゃあ、人が倒れてるんだもの。普通に親切だったとは思うけど。どうして？」

「実は僕も最近、電車で気になることがあったんですよ。」と言う。
「へえ。やっぱり誰かが倒れちゃったの？」

恭介の話によると、朝のラッシュ時に痴漢に遭ったらしい女性が、男の手をつかんで叫ぶと、男のほうが開き直り女性を脅し始めたのだという。車内に一瞬、緊張が走り、いつもなら他の通勤客は見てみぬ振りをするか、せいぜい次の停車駅で駅員を呼んでくるくらいだが、その日は様子が違っていた。一人の男性が阻止に入り、またそれに対して男が威嚇し始めたとき、さらに数人の乗客が協力し、男を連れて車両の隅のほうへ移動したのだという。乗客の誰もがこの一件の行方を見守り、車内は静まり返っていた。そのために恭介の耳にも彼らのやり取りがはっきりと聞こえたのだそうだ。

人々が問い詰めると男はあくまでしらをきつたが、そのとき一人の女性の声が車内に響いてきた。

「わかりました。あなたは本当に痴漢なんてしていないのでしょう。私達はそれを信じますよ。誤解したことを謝ります。でもここに乗り合わせた人達はもうあなたの顔をすっかり覚えましたがね。これからこんな風に疑われるようなことがないよう、あなた自身も注意をしてください。それからいずれにせよ、混み合った電車内で怒鳴ったりするのはよくありません。」その声は冷静で、しかも優しさを含んだような、まるで母親が子どもを諭すような話し方だったと彼は言った。

「その男はいたたまれなくなつて、その後すぐに降りたんじゃないかなあ。こういう出来事に対して、周りの人間が当たり前に反応することのほうが、最近じゃありえないでしょう。だからなんだかびつくりしたんですよ。考えてみれば、怒鳴る男をみんなで注意するのは当然ですよ。でもそんなこと、最近のこの街ではあまりないから……。」

「そうよね。」

「そして、その話しかける女の人の声が、なんていうか不思議な感

じだったんです。そんな時なのにもものすごく落ち着いていて、しかもどこか優しくて懐かしいような。なんていうか、聞く者に有無を言わさない感じがあつたんです。それで結局、騒ぎはおさまっちゃったし、あいつ、多分もう二度と痴漢は出来ないと思いますよ。」

「たしかに不思議ね。でもその女の人はもしかすると学校の先生とか、婦人警官とか、なにかそんな職業だったのかも。いつも人を諭しているような……。ああ、そういえば私もこんなこともあったのよ。」

ユリは以前出会った、喧嘩の仲裁に入り、大声で唄うサラリーマンの話を恭介に話した。その酔っ払った男性が駅に着いたとたん、まったく酔っていないような様子を見せたことも聞かせた。

「ねえ。これも不思議じゃない？」

「はい。」

「なんだかおかしな、嘘みたいな話よね。この暑さで、みんなおかしくなってるのかしら。」

「でも、人助けだったり、問題を無視せず解決してるわけだから、おかしくなってるというより、むしろ、よくなってるってことじゃないですか。」と恭介は笑い、続けてこう言った。

「まあ、これは電車内に限ったことなんですけど、最近やたらと親切な人を見るんです。」

「どんな？」

「電車に乗っていると、必ずと言っていいほど“善行”に出くわすんですよ。たとえば他の人が捨てていったゴミを誰かが拾って持っていくとか、お年寄りがいたらみんな我先に席を譲ろうとしたり……。困ってる人がいれば、みんなが手助けをするし。」ユリは、以前出会った空き缶を拾っていた女の子を思い出した。

「痴漢のときもそうですけど、誰かが迷惑行為をしても、だいたい皆、見て見ぬふりをするのが当たり前ですよ。でも何故か最近はず誰かがはつきりと注意をするんですよ。もしそいつが逆ギレしても、ちゃんとまわりの人が協力して、一対大勢みたいな感じにな

って、結局そいつがいたたまれなくなっちゃうんです。」

「私が見た酔っ払いのときも確かにそんな感じだったな。」

「なんだか急にみんながいい人になってるんですよ。それはいいことに違いないけど、でもどこかおかしいと思いませんか？」

「確かにね。あの、いろんなところにお金をおいてある事件にしてもそうじゃない？ 何かに役立ててくださいなんて言って、お金をばら撒いてる。でも最近、世の中ずさんでいるもの。少しでもそんな風が変わってきてるなら、単純にいいことなんじゃないの？ きつとこの暑さや、世界中で起こる異変にたいして、みんな不安になっているのよ。だから、なんていうのかな、ある種の危機感を無意識に感じて、助け合い精神みたいのが出てきたんじゃないの。」

「そうなのかなあ。」

ユリが時計を見ると休憩時間が終わりに近づいていた。二人は話を終えて、慌てて職場へ戻った。

9月3日

その年、九月になっても暑さが去ることはなかった。この国に秋が来て、そして冬がくるといふ当たり前のことが、今は信じられないような気持ちにユリはなっていた。この星はますます熱を帯びている。人間の体温が、ある限界を超えると体を維持できなくなるように、星もまたその生命維持のための最低条件を超えてしまうのだろうか。

「島村さん。今日、帰りに時間ありますか？」 就業時間が近づいたところに川田恭介がユリに話しかけてきた。

「うん。あるけど。」

「実は島村さんにちよつと見て欲しいものがあつて。」 なんだろ う、と思ひながら、その日の帰りに、ユリは恭介と社内の休憩ルームで話をした。

「見せたいものつてなによ。」

「島村さんと、この間、電車の中で見たことを話しましたよね。そのとき、最近、いい行いをよく見ること話を話したじゃないですか。たとえばほら、あの現金があちこちにおいてあるやつとか・・・」

。島村さんが見た電車の中の酔っ払いの話も、どう考えても不思議じゃないですか？」

「うん、まあね・・・。」

たしかにユリも、あの出来事が、夢を見ていたような不思議な印象を心に残したことに気づいていた。他にも空き缶を拾っていた女の子のこと、世の中で起きている不思議な事件のことなど考えないではないが、正直、今はそれどころではないという気持ちでもあった。この異常な気候、世界中で起きている災害、悲惨な事件もあとをたたないこの時代に、電車の中で誰かがいいことをしたからとい

って、それがどうだというのだろう。ユリ自身も友人や恋人を失い、光が見えないような日々を過しているのだ。その気持ちを遮り、いっぴく真剣な面持ちで恭介は話し続けた。

「もしかすると、そういう一連の出来事すべてに理由があつて、つながっていると思つたことはないですか？」

「なにそれ。どうということ？　つまり、一日一善みたいなことにみんなで取り組んでるとか？」

「見せたいものっていうのは、実はこれなんですけど。」　恭介がユリに折りたたんだ紙を手渡した。開いてみるとA4サイズ用の紙にびっしりと文字が印刷されている。

「つい最近、友達から送られてきたメールをプリントアウトしたんです。そいつのところに、それがどこから送られてきて、僕にも見せてくれたつてことなんですけど。島村さんにも見せて、どう思つかを聞いてみたくて持つてきました。」

彼の大学時代の友人が受け取つたそのメールは、差出人不明で通常なら削除してしまうところだったが、タイトル部分に受信者のフルネームが入っていたことから、開いて中身を確認したのだと言う。チラシと見たところ、用紙は数枚に渡り、読むのにはかなり時間がかかりそうだとユリは思つた。枚数を確認するように、ユリが用紙をめくつてみると、恭介が「すごく長いですから、家へ帰ってから読んでいいです。」と言つた。

「島村さんがどう思うか、聞きたくて。なんとなく、自分ひとりでその内容を考えるのが恐いような、誰かと共有したいような気がしたから。」

ユリはそれを聞き、恐いとはどんな内容なのだろう、またなぜ、自分が川田恭介とそれを共有しなくちゃならないのだろうとも思つた。しかしそれは聞かずに、とにかくその内容を読んでみよう、と、自宅へ持ち帰つたのだつた。

そのメールにはこう書かれていた。

『今、世界は大きな危機に直面しています。このままでは地球の存続さえ危うい環境問題をはじめ、テロや戦争、差別、貧困、健康と衛生の問題。この国でも、最近では自殺、家族間の殺人、性犯罪、幼児虐待などが絶えません。それに加えて、他者への悪意による日常的な嫌がらせの数々。自分さえよければいいという、理性とモラルの欠如した風潮。政治家や大企業による嘘の数々。』

これらの問題は決してひとつずつ独立したものではなく、すべてが複雑に絡まり合っているように見えます。ひとつの問題を解決しても、無数にあいた穴を無理やり繕うようなもので、引つ張られたところにはまた別な穴が開いてしまうのです。その穴を開けているのは、私たち人間の精神の荒廃です。問題を解決するには、その原因に直接働きかけることが重要です。このメールはそのため世界に向けて送信されています。内容はあなたに強制するものではありません。無視するのも、読んでいただくのも自由です。どう行動していくかを、このメールを読み、あなた自身が選択してください。

精神はますます荒れています。そして潤してくれる何かを求めているのです。今、人間は進むべき方向がわからないまま、ただ闇雲に日々を生きていくのです。

動物には動物それぞれ、植物にも植物それぞれの生存方法があります。人間にも人間にふさわしい人生の送り方がありますが、それを伝えるものがないため、人々は目を半分つぶった状態で、まわりの様子をうかがい、人と似たようなやりかたで日々を過します。そして成長をする中で、「生きる」とは外的な条件を満たしていくことだと考えるようになります。つまり、生きる目的とは、外側にある欲望を満たすことだと刷り込まれていくのです。

人より偉くなること、より多くの金を手にすること、それによって人生が自分の思い通りになると思い込みます。幸福とは仕事の成功、恋愛の成就、若さや健康、肩書きと権力であると信じています。しかし、その喜びは永遠に持続するものではないことに、本当は誰

もが気づいてもいるのです。すべての条件を満たした人が、必ずしも幸福ではないという事実を見ても、それはわかるでしょう。

誰もが自分の欲望を満たすことだけを考えれば、そこに必ず争いが生まれることは小学生でもわかる事実です。自分の欲望のために他人から奪う人は、自らも他人から奪われることを恐れ、いつでも戦闘体制にいななければなりません。それに加え、現代は社会全体に対しても身構えなければならぬのです。環境汚染、犯罪、不況、保障や福祉制度の崩壊、企業モラルの低下……。こんな社会では、幸福に生きる道などないように思えて当然です。生きることへの不安は募ります。まわりを蹴落としても自分を守らなくては、国も社会も政治も誰も自分を助けてはくれないと思っています。そして人々は叫んでいるのです。「権利をふりかざせ。やられる前にやってしまえ。」と。

しかし、それは人間にふさわしい幸福の求め方ではありません。人間にふさわしい生き方とは、つまり人間にとっての幸福とは「理性に従って生きること」だからです。人間だけが理性を与えられています。それを最大限に發揮して生きることこそが、人間だけに与えられた本当の人生です。

「理性に従う」とは、違う言い方をすれば、「個人として考え、選択することです。私達はどんな状況にあっても、生活条件がそれぞれ違っても、自分の考えや行動は自分で選択しなければなりません。考え、そして自分の意思で選択することこそが私たちの人生なのです。

人ごみでまごまごしている老人に悪態をつくか、それとも手助けをするかを私達は選択することが出来ます。狭い道で向かい側から来た車に「どける！」と怒鳴るか、笑顔で「どうぞ」と譲るかを選択することも出来ます。理性に従った行動を選ぶことこそ、自分を自由にする唯一の方法です。その時はじめて、人間は欲望や自我にがんじがらめになった不自由さから解放たれるからです。

一人ひとりそれぞれが、理性に従う生き方を選択することで、人々は社会に対する恐れと不安を手放し、もう一度自尊心とモラルを取り戻していくでしょう。

この事実は、以前はもつと自然に、大人から子どもへ、人から人へ伝わっていました。「しつけ」であったり、「教育」であったり、あるいは「宗教」「芸術」なども人間に事実を伝える役割を果たしていました。しかし現在では、その自然な伝達方法も危うくなっています。

しかしいつの時代にも、経験することや学ぶことで、大切な事実に気づいていく人たちがいます。そして自分が知るだけでなく、重要なことは他者へ伝えていかなければならないと考えている人達が存在します。

そのためにどうすれば最も効果的であるかを考え、このメールが作成されました。一番伝えたい相手は、数多く存在している生き方に迷い問題を抱える人達です。しかし彼らは特定の人物の説教や、教育、芸術や宗教などには心を開かないでしょう。ごく普通の日常生活の中で、不幸せであると感じている、多くの人達を変えていくにはどうしたらいいのでしょうか。

この方法は組織だつて行うものではありません。あくまでも個人レベルで、個人の自由意志で、日常の中で行われます。それがいちばん重要です。グループを作ったり、声高に思いを叫んだり、ことを急いだりは決してしません。重要なのは、小さなことを、個人が日常の中で繰り返し行う、ということです。特定の団体として行動することは、より広く社会にそれを浸透させるという目的を、逆に遮ることになるからです。個人の生活のなかの行動こそが、社会を変える可能性を秘めているのです。それはある特定の場や状況においてではなく、ごく日常的に進められなくてはなりません。

その方法とは、まずは「理性にしたがって行動する」ということ。たとえば、自分の欲求を押し通したいときに、それを抑えてあえて人に譲ること。困っている人を助けること。与えられるものは惜しみなく与えること。（無理をしてまで与える必要はありません）これは物質だけでなく、労働力であつたり、自分に出来ることをするという意味も含んでいます。

そして、人間と世界の生命の存続にとって、よいと思う行動をすすんでとること。どんなに小さなことでもこれは大きな意味を持ちます。空き缶を拾うことでも、ゴミをしつかりと分別することでもいいのです。

声を荒げて、他人を変えようとせず、結果を急ぐことなく、日常の中でひとりひとりが静かに理性と言う種を蒔いていくこと。

もうひとつの方法として、あなたの心に潤いを与えたものを、出来るだけ他の人にも伝えてください。心に響く言葉、偉大な人物について、ポジティブな歴史的事実、美しい詩の一文。心に響いた芸術作品。もちろん、あなた自身の言葉でも構いません。

友人とのおしゃべりの中で、あるいは仕事上での発言の場所で、誰かに伝えてみてください。あなたの心に真に響いたものは必ず、誰かに伝わるはずです。あなた自身が心から大切だと思う真実を、人に伝えてください。

難しく考える必要はありません。世界は、実はとても単純に出来ています。本当に大切なことは、子どもの頃に絵本やおとぎ話で教わったことです。勇気を出すこと、思いやりを持つこと、命の大切さを忘れないこと、自然を大切にすること。そんな単純なことを大人たちはもはや信じていません。それは子どもの世界のおとぎ話であり、大人が幼子に与える決まり文句だと思っています。しかし、これこそが真実であり、私たちが一生をかけ貫くべきことなのです。

生きることは孤独な道であり、その道は途中で何本にも分かれています。人はその先を知らないまま、手探りで進み生き方に迷います。しかし、花が誰にも教わずに咲くように、私達も自ら道しるべを見つけることは出来るのです。それは文学や芸術作品の中にも、誠実に生き抜いた人が残した言葉に、歴史や科学の書物の中にもあります。それだけではありません。自然をよく見てください。空の変化、季節が見せてくれるもの。月や星が私たちに語りかけていること、種が花に実になりやがて土に還ること。それらが教えてくれているのは何でしょうか。

道しるべは、あなたの身近な場所にも存在しています。現在のあなたがいる環境、周囲の人々。日常の中で他人が語る言葉。街の中で目にする見知らぬ人の言動。それらすべてが、あなたの中にあるものを見せてくれていることを忘れずにいることです。すべてのひとは真実を知る必要があります。そして真実は人から人へ伝えられていくべきものです。

あなたがこのメールを読んで、少しでも賛同してくださったなら、どうか協力してください。今からすぐにこれらふたつのことを始めてください。

このメールにあることは、多くの宗教や文学、そしていま大きく広まっているニューエイジやスピリチュアルな思想が表現してきたことと似通っているでしょう。どれがもつとも真実を表すのかわかりませんが、すべて根底は同じであると思います。ただし、それを日常とかけ離れたものとしてではなく、あなた自身のいつもと同じ日々の中で表現するのです。現在の様々な問題や危機にたいする方法としては、学問や宗教、特殊な思想としてではなく、生活レベルで真実が浸透していくことが必要です。真実からもつとも遠いところにいる人たちにこそ、それを感じて欲しいのです。そのためにはひとりひとりの行動が重要な意味を持ちます。ひそやかに、しかし強い意志をもって行動することです。このメールを読んでいる人達

は、世界の中のごくわずかです。しかしまずそこから始まり、少しずつ理性と真の自由が広がるのだと信じています。

最後にひとつ注意点があります。このことを心にとめ、決して忘れずにいてください。まずひとつめはこのメールをあなた以外の人に知らせないことです。もしあなたがこの内容に賛同し、行動を始めてくださるなら、それによって周囲がどう変化するかをあなた自身の目で確かめて欲しいからです。

次に、行動を開始したなら、周囲が変化しなくともすぐにあきらめないでください。あなたの行動に対して反動が怒ることもありますが、それは良いものだけとは限りません。あなたの善意に対し、信じられないような悪意が返ってくることもあります。嘲笑されることもあるかもしれません。あなたの小さな行動で世界がすぐに変化するわけではありません。しかし、それでも簡単に投げ出さないでください。心が暗くなったときには、空を眺めてみてください。どれほど世界が悲しいものに思えても、あなたには必ず月や星、自然がこれまでに美しく見えるようになるはずです。少なくともあなたは、自分の自由を選択しているということを、いつも忘れないでいてください。理性という意思を持って生きる限り、世界は、そして人生は美しいものであると信じています。』

最後の一枚には、ウェブ上から集めた世界のニュース記事がプリントされていた。すべて小さなニュースでその国内での情報のため、ユリには読めない言葉もあったが、英語とフランス語で書かれたものについては、その内容をおおよそは理解できた。多分、理解できない他の国の記事も内容は同じものだっただろう。それは世界中で起きている、現金が街中に置かれているという出来事を伝えた記事だったのだ。

9月4日

次の日、ユリはあのメールをすべて読んだことを恭介に伝えた。

「そうですか。ありがとうございます。それで、どう思いますか？」

「そんなことより、あれを私に見せても大丈夫なの？他の人に知らせてはいけないうて書いてあったじゃない。」 ユリは、昨夜からずっとそのことが気になっていた。

「大丈夫です。大丈夫、……だと思えます。あれを俺に見せてくれた友達も、友人として信頼しているから見せてくれたんです。島村さんも、電車の中で見た人のことが気になっているみたいだし。そういう、世間の変化に気づいている人だと思ったから、見せたんです。」

「でも、あのメールが、本当に選ばれた特定の人だけに送られてるとしたら、川田君はその人の友人だろうけど、私は無関係な人間じゃない？ それなのに見てしまつてよかったのかな。」 ユリの質問に恭介は答えた。

「実は、あのメールが送られてきた友達と、島村さんつてどこか似ているんです。性格的な部分が。心の中の問題をあまり人に見せないところとか……。島村さんつて、女性にしてはいつもしゃりしていて、うわついたところがないじゃないですか。そういう女の人つて、この会社じゃ珍しいな、いつも思つてました。なにかあつても自分の中で整理をつけるつて感じで、強いというか、精神的に成熟してるといふか。」

「なにそれ。私はあまり感情が表に出ないだけで、別にしつかりはしてないし、女性として珍しいつて言われてもあまり嬉しくないけどなあ。」 ユリは思わず苦笑いの表情になった。自分の弱さや子どもっぽさを嫌というほど感じているユリは、一緒に仕事をしている年下の男性にとって、自分がそんなふうに見えるということが意外でもあつた。そして自分に似ているというその男の子はどんな人

なのだろうと思った。

「島村さん、この暑さいつまで続くと思います？」

「わからない。もちろん、いつかは終わると思うけれど。」

「もし終わらなかつたらどうします？」

「まさか。そんなことはないわよ。たしかに今年の暑さは異常だけれど、このまま地球全体が熱帯になってしまうとはまだ思えないもの。」 九月になつても一向に秋が訪れる様子はない。それでもそれがユリの正直な考えだつた。

「あのメールですけど、俺、あれが最後通告なんじゃないかつて思つたんです。もうすでに人間はやりすぎちゃつたんじゃないかつてそれでもかすかな望みがあるとしたら、それがあのメールに書かれてあつたことなのかなつて思つたんですよ。こんなこと言つたら、馬鹿だと思われるかもしれないけれど、あのメールはとても重要なものである気がするんです。いたずらや、おかしい意図で送られていのではないと思う。なんとか世界を守るための最終手段を僕らに伝えてるんじゃないかと思つたんです。」

「馬鹿だとは思わないよ。私もあれがいたずらメールとか、そういうものだとは思つてないし。もしそうだとしても、書いてあつた内容は間違ひではないと思つたし。」

「よかった。島村さんならそう言つてくれそうな気がしたんだ。あのメールには、ふたつのことを実行しなさいって書いてありましたよね。」

「うん。理性にしたがつて行動しなさいってことと、それから大事なことを人に伝えなさいってことでしょう。」

「はい。あれを読んで思つたのは、こんな異常な暑さが続いているのに、どうしてみんながこんなにのんびり構えているんだらうつてことです。世界と人間の生命にとってよいことをすべきだつてあそこに書いてありましたよね。」

今、世界はたいへんなことになりかけているのに、なぜもつと明

確な対策を打たないのでしょうか。個人がやるべきこと、企業がやるべきこと、国家単位でとりくむべきことはもつとある気がします。エコバッグを使おうなんて悠長なことを言っていていいんですかね。もつとエネルギーの消費そのものを抑える対策とか、たとえば車の使用を抑えるためのアイディアを出すとか方法はあると思うんです。

「

恭介の真剣に語る様子を見てユリは、彼はかなりあのメールに影響されているらしいと感じた。たしかにあの内容には重要なことが含まれているとユリも感じた。彼がユリに見せたのは、こうして自分の思いを聞いてほしかったのだらう。それにしても、消費社会の落とし子のような外見をした彼が、こんなふうに考えていることがユリには不思議だった。

「私が思うのは、もし本当にこの暑さの原因が人間のせいだったら、温暖化をストップさせるためには、いろんなことを手放さなきゃならないでしょう。車に乗るのもやめて、夜はお店も全部閉めてみんなが自然に近い暮らしをすれば効果はあるかもしれない。でもさ、たぶん今あるものを失くすっていうのは難しいでしょう。

でも、今あるものを失くすことは出来なくても、すでにあるものを増やす必要はないと思うの。必要ないものは手放して、それを必要なところに回してつてことを考えてる人は、きっと偉い人の中にもいっぱいいると思うよ。

先を急ぎすぎてはだめだって書いてあったじゃない。私たちは自分が思うことを行動していけばいいのよ。たぶんね。」

恭介と話した後でユリは、あのメールを読んだときに感じた不思議な感覚を思い出していた。彼は世界のためになる理性的な行動、具体的には温暖化対策に夢中なようだが、ユリがあれを読んで感じたのはまた別な感情だった。

メールには、幼い頃におとぎ話や絵本が自分に教えてくれたものの、花や空が見せてくれるものの中にこそ真実があると書かれていた。

外的な条件を整えていくことが人生ではなく、考え、感じ、そして選択することこそ人生であるとあった。

そのことが、この夏、ユリが見てきたものと奇妙につながっている気がしたのだった。

たとえば、ヨハネが「お前たちは真実を見ていない。」と告げた不思議な夢。恋人との別れ、友人の突然の死。昔のボーイフレンドが現れた夢の中で聞いた、「夢はたんに夢としてではなく、信じるべきものでもある」という言葉。テレビやラジオで、誰かが話していた美しい言葉の数々。報道で伝えられたいくつかの事件。そして電車や街中でユリ自身が目にした出来事。

すべてのことが絡まりあい、あともう少しで自分が知りたいことに明確な答えを与えてくれそうな気がした。答えが見えたときには、これまで長く感じている、自分が不全であるという感覚を、打破できそうな期待があった。そしてそれはまるで、楽しい夢を見た翌朝、思い出せそうで思い出せず、心地よい感覚だけが体に残るときのもどかしさにも似ていた。

9月6日

その日、ユリはちょっとした使いを頼まれ、社外に出ていた。時間は午後四時を回っている。暑さは相変わらずだ。ほんの少し歩いただけで、ユリは外気が暑いのかそれとも自分の体が熱を発しているのか、わからないような感覚になっていた。

横断歩道で青信号になるのを待つ。同じように信号待ちの人が多く立ち止まっている。誰もが暑さで上気した顔色をしているが、目の下が落ち窪んでいるようで、健康そうには見えなかった。

これほどの暑さになると、歩いているよりもこうして立ち止まるほうが辛い。すべての神経が暑さだけに反応し、動いているときよりいっそう、汗で張り付く衣服のことなどが気になるのだった。

信号が変わり、歩き出したユリは、向かい側の歩道の本陰にうずくまる人に気づいた。近づいていくと、老齢の女性であることがわかった。ざんぎりに切った髪が乱れ、襟元が伸びきったような服を着た彼女は、お世辞にも小きれいとは言えない。どちらかといえば、だらしなく、得体の知れない感じの女性だった。誰も声をかけるものはいない。これまでのユリなら、同じく見てみぬ振りをして通り過ぎていたはずだった。だが、その日は「気分が悪いのだろう。」という思いが先にたち、思わず近づいて声をかけていた。

「大丈夫ですか？気分が悪いんですか？」

「ああ、はい。すみませんね。」

「熱射病かもしれないし、ここにいてはだめだと思いますよ。おうちはお近くですか。」

「……………」 答える元氣もあまりないらしい。かなり悪そうだった。

「病院にいったほうがいいんじゃないですか。苦しいなら救急車を呼びましょうか。」

「いえ、たいしたことないですから。」　しかし、ユリにはそう見えない。

「病院に行きましょう。救急車じゃなくても、タクシーには乗れませんか？」

すると彼女は、今日はお金も保険証も持っていないので、病院には行けないと言う。

「大丈夫ですよ。保険証は後からもって行けばいいし、診療代も後から払えるはずです。もし今日払うなら、私もお貸しできますから。」

「そんな、知らない方に迷惑かけられません。」　と言いながら、女性は倒れるように木に寄りかかってしまった。

ユリは慌ててタクシーを止めると、運転手に手助けを頼み、近くの病院へと向かった。

そこは小さな個人病院だったが、院内は思ったよりも混み合っていた。中へ連れて入るときもタクシードライバーが手を貸してくれた。ユリが受付で事情を話すと、女性の様子を見てすぐに診察してもらえることになった。

会社へ電話で事情を告げた後、ユリはややほっとして待合室の椅子に腰を下ろした。

冷房の効いた空気に体が慣れてくると、ユリはだんだんと冷静さを取り戻してきた。おばあさんに声をかけてからここに来るまで、なんだか熱に浮かされているような気分だった、と思った。自分から知らない人に声をかけ、タクシーの運転手さんをお願いをし、病院では、早く見てあげて欲しいと頼んだ自分。突然にいつもどおりの日常生活から切り離されたような気分だ。

おばあさんに声をかけなければ、あのまま会社に戻って仕事をし、時間になったら退社して家へ帰っていたはずだ。それがこうして知らない人を連れ、来たこともない病院の待合室に座っている。冷えた空気の中でも体が暑くなるような、興奮した感覚だった。

ふとユリは、傍らに置いてある雑誌を手にとった。普段あまり読んだこともないサラリーマンが読むような週刊誌だった。ぱらぱらと中を見ていくと、ひとつの記事に目が留まった。ある物理学者のインタビュー記事だ。話が面白いことで評判の彼は、最近、テレビにもよく出演している。そのページに出ている顔写真にはユリも見覚えがあった。

その記事が気になったのは、「今私たちは生き方をもう一度学びなおす時」という言葉がタイトルにあったからだ。

暇つぶしにと、ユリはなんとなくそのインタビューを読み始めた。

「今は環境問題も含め、様々な点で社会が悪い方向に向かっていくように見えます。昔は治安が良いことで有名だった日本も、そうではなくなってきましたしね。」

しかし、問題を解決するのは夢物語かというと、私は決してそんなことはないと思っています。問題を生み出したのは人間ですからね。やはり解決するには人間が行動していくこと、自分たちが変わっていくしか方法はない。」

「先生のおっしゃる、今、日本人は生き方を学びなおすチャンスであるというのは、どのようなことでしょうか。」

「世界をよくしていくには、やはり人間がよくなっていかないことにはどうしようもないと思うんです。そして人間がよくなるということは、個人個人が幸せにならなきゃいかん、ということです。そのための条件は少なくともふたつある。金や名誉ではないですよ。まずひとつは、生きる方法を知っていること。次に自分自身を知ること。これがポイントだと私は思ってるんです。」

「生きる方法とは具体的には、どういうことでしょう。サバイバル力を持つということですか？」

「いや、違います。生きる指針ですね。人は何のために生きるか、生きるとはどういうことなのか。もっと具体的に言うと、日々、ど

う生きることが幸せにつながるのか、ということですよ。

人間が幸福になるために一番わかっていなきゃならんのは、偉くなる方法でもお金をもうける方法でもない。生きるとは何か、どう生きることが一番いいのかということですよ。

こつという哲学的な命題は、ものごとが上手くいつている時は辛気臭く思えるもんです。楽しいときは、そんなことを考えるより、快楽を求めて欲求を満たすことに夢中になる。しかし、生きる芯とも言える、この部分を考えていないといつかは必ず壁にぶち当たります。そんなときには金も権力も役立たないのではないかと思いますよ。」

「そういったことは、これまでいつの時代にも考えられてきたけれど、これが正解というのはあるのでしょうか？あるいは個人個人によつて違うのではないのでしょうか？」

「もちろん、具体的な方法はそれぞれの人間で違います。そのために自分自身をよく知らなくてはいけないんです。

極端に言うなら、泳ぐために生まれてきた人が絵を描いても幸せではないだろうし、穴を掘るために生まれた人が裁縫をしても幸せにはなれない。だから人は自分自身を知り、自分の本質を生かす生き方を求めていくべきと考えます。

しかし、それは外的条件に左右されるわけですから、たとえば泳ぐために生まれた人が、あるとき事故で泳げない体になったとするではそれでその人の人生は終わりかといえば、決してそうではない人それぞれ外的な環境は違いますが、根本にあるものはひとつだと私は考えています。それはその人の理性の存在です。それこそが人間を幸せにするものです。

泳げない体になったときに自分には何ができるか。何を求めて生きるといえば、つまりは理性に従うしかありません。たとえ泳げなくともまだまだ出来ることはありますからね。やけになって人生を放棄する代わりに、理性的な選択をするという自由が、いつでも人間には与えられているんですよ。

そのことを現代の人達は、どうやら忘れてしまっているようにしか私には見えないんです。外的な条件が少しでも悪くなると、自分の精神的な自由まで奪われたと思ひ込んでしまう。あるいは自分で選択する権利を投げ出す、生きる意味がわからないといって自殺してしまふ。生きる意味なんて若いうちにはわからないもんです。いや、年を重ねてもそんなに簡単にわかるものじゃあ、ない。でもわからないと言つて人生を投げ出したり、あきらめては人間として生まれただ甲斐がないですよ。

生きるとは何か、真の幸福とは何か。それははるか昔から、人間が考え抜いてきたことです。ということは私らなどより、ずっと頭のいい立派な先輩がそれについて、すでに考えてくれているわけです。だったら悩んだときにあきらめるかわりに、調べることもできる。本を読んで、人に聞いて、そして自分自身でよく考えてみればいい。一番悪いのはあきらめてしまふことです。」

「先生もお若いときには、その答えを求めて苦しみましたか？」

「もちろんですよ。今だつて悟りを開いたわけじゃなし、迷つたり悩んだりの繰り返しです（笑）。若いときはそうだなあ、なんで眠いのに朝早く起きなくちゃなんのか、そんなことさえ真剣な悩みの種でした。生きる意味なんてどこにあるかさっぱりわからなくて、女性とたくさんつきあふことでなにか見えてくるかもしれない、と思つてずいぶん女の人を好きになりましたよ（笑）。よく振られました、ますます苦しみましたがね（笑）。しかし、人を好きになつたり、そのせいで傷ついたりすることは、たしかに自分の中に何かを残してくれるものです。」

「恋愛以外では、やはり学問によつて、真実を追究していらしたのですね？」

「ええ。それはもちろん。でも自分の専門以外の本をいっぱい読みましたね。自分の人生の基礎になっているのはそういった読書だと思つています。当時は、今にもまして迷ひばかりでしたから、とにかくなにか少しでも答えを求めてずいぶん本を読みました。」

「その中で今でも、先生の支えとなったり、思考の基盤となったような重要な一冊はございますか？」

「ええ。そうですね、トルストイの人生論ですかね。」

これはね、十代の終わり頃かなあ、本屋で人生論っていうタイトルを見て、飛びつくようにに買いました。まさに人生とはなにかってことに悩んでましたからね。人生論というタイトルがついている以上は、人生についての答えがあるんだろうと思っていましたね。」

「実際に答えは書かれていたんでしょうか？」

「書かれてましたね。それは私がさっき話したことなんです。正直に言くと私の考えや生き方なんて、ほとんどは人の受け売りですから。」

「具体的にその書かれていた答えを教えてくださいませんか？」

「さっき言った、理性にしたがって生きる人生こそ幸福であるということですよ。小説でもノンフィクションでも、人生や生き方を教えてくれる作品はたくさんありますが、トルストイはこの本で、ずばりその答えだけを書こうとしたんじゃないかな。彼自身がどれだけ人生の矛盾点に悩んだか、そしてどんな答えに到達したか、その苦しみの過程が透けて見えるような文章です。それでも彼はあきらめなかったんでしょう。そしてこれを書いた。だから、これが答えだよ、ということ、人に伝えたくて伝えたくてしょうがないという、切羽詰った情熱が感じられる。しつこいくらいにくどくどと自分の考えを書いてますね。」

「トルストイはキリスト教的な作品を多く描いていますね。つまり理性に従う生き方とは、限りなく利他的に生きよ、ということでしょうか。つまり右の頬を打たれたら左の頬も打たせよ、というような。」

「たしかに、理性的に生きるとはそういう部分も含んでいます。しかし、この本でトルストイは、信仰によるものから答えを出したのではないと思います。信仰とは別の、彼自身の日常生活、体験、それらを通して得た答えだと私には思えましたね。それに、この人生

論の中でトルストイ本人が、人は信仰を通じてではなく、理性を通してのみ、ものごとを理解できると言っています。信仰しているものに思考のすべてを委ねてしまうことは、結果として理性を放棄することになりかねない、その危険性を言いたかったのだと思いますよ。」

ユリは、自分が今どこにいるかも忘れて、そのインタビュー記事を夢中になって読んでいた。それは、この内容が、先日読んだあのメールにあったことと、恐いほどに一致していると思ったからだ。この人ももしかすると、あのメールを読んだのではないだろうか。

「今でもよく覚えている文章があるんです。“ただの空間的時間的な生活など人生ではなくて、こうして上へむかおうとする運動こそが自分の人生にはかならない。理性の法則に従うことによって、はじめて、幸福も生命も約束されるのだ。人は、深い淵から舞いあがる翼を自分がもっているのを、悟らなければならぬ。人は自分の翼を信じなければならぬ。そして、その翼の導くままに、高く飛ばなければならぬのである。”」

私はあまり理想主義ではないし、自分の専門分野からして、かなり現実主義で合理的な人たちだと思います。でもね、なんていうんでしょうか、理屈を超えた人間のパワーってときどきあるでしょう。スポーツ選手なんかを見ているときなんかによく感じる、その人がその本質的な能力を極限まで出し切って、外へ表現しているとき、その周囲の人たちに、あるエネルギーを与えますね。それがつまり“感動する”ってことですが、それは心理的な要因だけじゃなく、あきらかにその人間からある物理的なエネルギーが発生して、それをまわりに波及させていると思うんですよ。それを受け取った人は、その一瞬で人生の意味さえ理解するような、大きな影響を受けることもある。

人間は素晴らしいものだとは思っています。それぞれが、自分の本質を深くから表現するときには、たんなる六十億分の一じゃない、世界全体に波及するような素晴らしい力を持っていると信じているんです。

それは決して世界を動かすような、派手で目立つ方法でなくとも、その人の日常の中でひっそり行われることであっていい。私ももうこの先、人生は長くありませんが、自分の専門をもっともったわりやすい言葉で、多くの人に伝えられる人間になりたいと頑張っていますよ（笑）。」

そのとき、ユリのところに看護師がやってきて声をかけた。

「あのう、今、急患でいらしたおばあさんを連れてきてくれた方ですよ。」

「はい。そうです。大丈夫でしょうか。」

「はい。血圧がかなり上がっていて、脱水症状を起こしていました。今、点滴をして安静にしています。それで、患者さんがあなたに迷惑をかけたって言って、お礼を言うておいて欲しいと私が言われまして。」

「そうですか。」

「もしまだ待っているようなら、申し訳ないのもうお帰りくださいとのこと。そして、これに連絡先とお名前を書いて欲しいということ。で預かったんですが・・・」

看護師が渡してくれた小さな白い紙切れは、どこかの店で買い物をしたときのレシートだった。

「一応、こちらを預かったんですが、もしよければ私のメモ用紙もありますけど。」と言いながら、看護師はボールペンをユリに手渡した。そのよれ曲がったレシートが、老婆の精一杯の気持ちなのだと思うと、ユリはなんとなくせつない気持ちになった。

「あ、いいえ、私、たいしたことしてませんし、名前なんて伝えなくて結構です。お大事に、と伝えてください。」

「そうですか。わかりました。では、ありがとうございました。」
と看護師は頭を下げると、あっさりと病室へ戻っていった。

病院の外へ出たユリは、自分の手に握られたレシートをもう一度見てみた。購入したものは、菓子パンとお茶で金額はたったの198円だった。

「おばあさん、一人暮らしなんだろうな。少ない年金をやりくりして、生活しているのだろうか。精一杯の感謝の思いで、私の名前を聞いてくれたのだろうか。」

このまま、彼女を置いて帰っていいものだろうか、とユリは心配になった。病院へ連れて行ったのは自分なのに、看護師の言うとおりに出てきてしまった。そう思うと、病室へ戻って、もう一度様子を見たほうがいいのかもしれない、とも考えた。

しかし、ユリはそのまま家へ帰ることにした。病院で見てもらっているのだから、きっとおばあさんは大丈夫だろう。ただ、これからも誰かが助けを必要としているときには、手を貸せる強さを持たなくてはいけないのだとユリは思った。

「人生論」トルストイ／米川和夫訳／

角川文庫

9月6日(2)

その日の夜、ユリはまたしても、不思議な印象を残す夢を見た。

夢の中で、ユリは今日出会い、一緒に病院へ行ったあのおばあさんと手をつないでどこかへ向かっていた。おばあさんは顔色も良く、すっかり元気そうで別人のようにも見えた。ニコニコと笑顔で「こっちだよ。」とユリをどこかへ連れて行こうとしている。

埃っぽく、石ころでゴツゴツした道を二人きりで歩く。歩きながら、ユリはなぜか懐かしさを感じていた。それは現実の体験とは別の、ユリの無意識の中に記憶されている場所である気がした。この人と二人、手をつないで歩くことがとても嬉しく、泣きたいような気持ちになった。自分が行きたくて仕方なかった場所。探してもたどり着けなかった場所へ、連れて行ってもらえるような気がしたのだ。

「おばあさん、どこへ行くの？」 ナリが聞くと、老婆は何も言わずにただ優しく微笑んだ。ユリもそれ以上何も聞かず、しばらく二人は黙ってただ歩き続けた。しばらく行くと広い草原がそこに広がっていた。気がつくあたりはすでに薄暗く、空には月がかかっていた。

「もう帰らなくちゃ。」とユリは心の中でつぶやいた。思った以上に遠くに来てしまったと感じたからだ。

月の光に照らされ、空は白く明るく輝いていた。地面にはタンポポだろうか、小さな黄色い花がびっしりと咲いている。そのもつとむこうへ目をやると、先のない真っ黒な闇があった。ユリは夜がこれほど暗いこと、月がこれほど輝くことをあらためて感じていた。

毎日、休みなく夜が訪れることの不思議、数時間後には朝にとつて変わられる夜の美しさに心が震えるようだった。そして同時に、とても心細く悲しい気持ちになった。

「おばあさん、ここはどこなの？私もう帰りたいな。」 ユリが
そういうと老婆は答えた。

「帰る必要はないのよ。だってここがユリちゃんの帰る場所だから。
」 それはどういう意味だろうとユリは思った。

「ユリちゃん、子どものときのことを覚えている？」と老婆がたず
ねた。

「覚えてることもあるし、でも忘れちゃったことのほうが多い。」

「人は時間がたつと大人になると思っているの。大人にならなきゃ、
と力を入れて頑張る。でも本当は違うのよ。子どもに戻るために生
きているの。みんなそのための道を歩いているんだよ。そしてここ
がユリちゃんの戻るところなの。」

その言葉を聞き、ユリの目に涙がにじんだ。自分が一番思い出し
たかったこと、一番大切なことなのに忘れてしまっていたなにかが、
わきあがってくるような気持ちになった。

「おばあさんはどうしてここがわかったの？」 その質問には答え
ずに彼女はこう答えた。

「みんながそこへたどり着けるといいねえ。そうすればきっとわか
るよ。この世界がどれほど美しいかってことがね。空、月、星、花、
樹。風も雨も雪も、そして朝も夜もどれだけきれいなことが。」

ユリは空を見上げた。やや欠けたその月の光はあまりにも優しく、
二人を包んでいた。ユリは顔に吹きつける風のあたたかさ、その優
しい手触りを感じた。

「世界は本当に美しい。」

ふと気づくと老婆はいなくなっていた。「おばあさん、どこ？」

一緒に帰らないと、と走り出したところで目が覚めた。外はすっ
かり明るく、カーテンの隙間から朝の日差しが差し込んでいた。ユ
リは自分が実際に泣いていたことを、湿った枕の感触で知った。

夢はユリの心に不思議な印象を残した。とてつもなく美しいもの

を見たという記憶、そして説明のつけようもない懐かしさが心に残っていた。その感覚を知ったことで、自分の中のなにかがひっそりと変化したように感じていた。いや、変化したというよりも、本来の自分自身、その本質がますます結晶化していくような気がした。それはユリにとって少し不安なことでもあった。昔から感じていた、現実との分離した感覚が強まるような気がしたからだ。

たとえば、この夢を見てから、仕事帰りに友人と出かけたとき、街の灯りが急に現実感のない薄っぺらな舞台装置のように見えた。夜の街の眩しい灯りを、これまでは身近に感じていたし、ふつうにきれいだとも思っていた。しかし、あの夜見た月の透明な白さ、地面で咲き乱れていた花の迫りくるような黄色、それに比べるとあまりにも雑多であり、むしろ醜悪なものであるようにさえ思えたのだ。街を歩くユリには、そこにあるすべてが「行き過ぎ」であると思えた。この街の夜は、過剰な装飾と眩しさ、多すぎる人の群れ、大きな声、似たような店の数々、そこから渦のようにあふれ出る物質で埋もれている。これまではごく普通に感じていたことが、ユリを窒息させそうな気がした。あの夢の中にあった静けさ、ひっそりとした清らかさ、それは現実にはどこにもないように思ったのだった。

9月9日

九月も三分の一が過ぎようとしている。暑さはまだまだ終わりそうにもなかった。この暑さが、確かに世界が変化している兆しであるとするなら、不思議なことにこの夏、ユリの中にも小さな変化が起こり始めていた。

この夏の期間が、ユリにとっては異様なほどに長く感じられた。友人が突然に亡くなったことや、恋人との別れを経験したことなどで、心の中がこれまでとは確実に違っていた。現実には引きずられるかのように、心の中がひっそりと静まり返っている。

子ども時代のように、無邪気の良いことだけを信じることや、体と心の全体で喜びに感応してはしゃぐことは、この先もう二度とないだろうという気がしていた。しかし、それは絶望というものではなく、この静かな心のまま、あらたな喜びや真実に出会えるかもしれないという、無意識の希望を含んでいた。

数日前に見た夢は、心を締めつけるような感覚をユリに残していた。あの不思議な夢を見たのは、たんに寝苦しさからではなかったと思う。なにかが自分の中で変化しているのだ。それは変わったというより、本来のかたちに戻りつつあると言えるかもしれない。

夢の中で老婆に言われた、「人は子どもに戻るために生きている」という言葉をユリは時々思い返した。それはつまり、「人は、本来の自分に戻るために生きている」ということだろうとユリは解釈した。

子どもの頃にはなんの疑いもなく、まっすぐに自分ありのままの心で生きていたと思う。しかし、成長するにつれ常識や他人に焦点を合わせ、本当の気持ちを失ってしまうのだから。そのうちに自分が何を求めているのかさえ忘れてしまうのだろう。

ユリは子どもの頃の自分を思い返してみた。静かに一人でいるこ

とが好きだったこと、本やマンガを読むのがなにより好きだったこと、その中にある人間の美しい部分を求めて読書をしていたこと、などがよみがえってきた。それによって、人と違う部分が自分の中に築かれたとしても、罪悪感を感じる必要はないのだと思えた。それは自分の特質であり、変えることの出来ない部分だ。そのことに気づいたことにより、あらたに外界に対して出来ることもあるだろうと思えた。

この暑さが地球温暖化という恐怖の始まりであっても、どれほど悲惨なニュースを見ても、以前のように苦々しい絶望感だけを感じていたのとは、少し気持ちが違ってきていた。それでも人々は生きている。小さな行動を起こし、何かを伝えようとしている人達は存在しているのだ。

この夏、気持ちの変化を自覚していたユリだったが、それと同時に、小さなことで心が波立たなくなってもいた。あの夢を見てからは、とくにその感覚が強まった。何をしていても、何が起きても、いつも自分の心の奥に向かって生活をしているような実感があつた。以前は仕事や恋愛、様々な人間関係など、外側の出来事に対して必死に手を伸ばしていたとユリは自分自身で思う。少しでもネガティブなことに会うつと不安になったし、反対に新しい出来事や出会いが刺激となり、瞬間的な幸福を感じることもあった。しかし、今はもつと静かで永続的な幸福が自分には常に寄り添っていると思うのだ。それは自分自身であり続けるということだった。静かで、そして穏やかな、一生失うことのない幸福がそこにはあると感じていた。

9月11日

「あなたの行動で世界が簡単に変化するわけではない」

たしかにメールにはそう書いてあった。ユリはそれを頭では理解していた。もしメールを読んだ人がこの日本にも大勢いて、皆がそれぞれに行動し始めているとしても、この暑さが突然和らぐはずはなく、思いやりにあふれた理想的な社会が出現するわけでもない。わかつてはいてもやはり、現金置き去りや、ちよつとした出来事をあのメールと結びつけ、未来への無責任な期待感を抱いていた。きつと少しずつでも世の中はよくなっていくに違いない。そう思えることは、毎日どれほど暑くても、ユリにこれまでにはなかった安心感を与えていた。

「あの日電車の中でゴミを拾った女の子、喧嘩を仲裁した人、お金をこっそりと置いていく人達、強盗にお金を渡したコンビニの店員さん、もしかするとみんなメールが届いた人なのかもしれない。」

しかしメールには、起こした行動に対しての反動がある、とも書かれていた。悪意となって返ってくることもある。それがこれなのだろうか、とユリは思った。

それは会社帰りの電車の中での出来事だった。優先席のすぐそばに、腰の曲がった小さなおばあさんが手すりにつかまって立ち、その横には仕事帰り風の中年女性がいた。その女性は優先席に座っている人達に向かって、穏やかな調子でこう話しかけた。

「あのう、すみませんが、こちらのおばあさんに席を譲って下さいませんか。」

そこに座っているのは学生風の男の子が一人。大きなバッグを体の脇に置き、それだけでも一人座れるほどの場所をとっている。耳にイヤホンをつけた彼は、女性の声も聞こえてはいないようだ。そ

の隣はサラリーマン風の三十代くらいの男性。かなり疲れた様子で不機嫌そうに目をつぶっている。女性の声に目を開けた男性は、その目で女性を睨みつけた。返事は一切しない。男と目が合った女性はもう一度静かに言った。

「すみません、おばあさんに……」すると男は悪意の限りをこめた調子でこう言った。

「うるせえよ。ばばあ。」さきほどからそのやり取りに気づいていた車内の人達は、一瞬しんとなった。隣の男の子もやはり立ち上がる様子はない。

ユリは比較的近くに座っていたので、いたたまれない気持ちでとっさに立ち上がった。

「あの、こちらに座ってください。」しかし、老婆もこのやりとりに萎縮してしまったのか、「いいえ、いいです。すぐに降りますから。」と座ろうとしない。そう言われても座りなおすわけにもいかず、ユリはおろおろしていた。声をかけた女性は何も言わずにじっとサラリーマンを見下ろしている。

「なに見てるんだ。ふざけるな。」男が大声で怒鳴った。車内はざわざわし始めている。それでも女性は何も答えず、そこに立ち続ける。ついに男は立ち上がると「死ね！」と叫び、違う車両のほうへ歩き出した。そのとき、突っ立ったままのユリの脇の扉をもろすごい勢いで蹴飛ばした。ユリは息が止まるほどの恐怖を感じた。老人は、思いがけずこの出来事に巻き込まれたことが迷惑のように困り顔で立ったまま、座席に座ろうとはしない。次の駅で停車すると、女性に言葉をかけるでもなく降りていってしまった。ユリはどうしていいかわからない気持ちで、つり革につかまったまま、じつと窓の外を見つめた。中年女性がユリに小さな声で「ごめんなさいね。」と言うと「いいえ。」とだけ答えて下を向いた。

家に着いてからもユリは、胸にずしりと重い石が詰まったようだった。何度か電車の中で人々の善意を目にして、勝手に期待して

いたのが間違いだっただ。誰かが助けしてくれるとか、善意には善意が返ってくると思い込んでいたのだ。私は席を立つただけで、あの男に対して意見することも、おばあさんを席に座らせることもできなかった。社内には嫌な空気だけが流れていた。それをどうすることも出来なかった。

その日、さらにユリを深く落ち込ませる事件が起こっていた。

老人が詐欺にあい、その犯人に殺害された。犯人の男は住宅を点検するという名目で老人宅を訪れると、何度も修理代を巻き上げていた。もちろん正当な修理などは行っていなかった。

犯人は一人暮らしの老人の親切心につけこみ、時には身内のように土産を携えて訪れるなどしていたらしい。作り話の身の上話をし、老人から金を借りた。老人は男を息子のように思っていたのか、金を渡し続けていたが、次第に蓄えも底をつき、借金の申し出に応えることが難しくなった。それに腹を立てた犯人は、あっさりと老人を殺害したのだ。

善意に出会っても心を動かされない人など大勢いる。その事実をまた思い知らされた。電車での憂鬱を引きずっていたユリは、少し開きかけた花が萎れてしまうように、心の中に生まれた希望を失いかけていた。夢を見て思い出しかけたあの美しい風景も、その気持ちも、今はもう薄れかけていた。

9月12日

会社で、川田恭介がユリに小さな声で話しかけてきた。

「島村さん。昨日のニュース知ってますよね。おじいさんが殺されたっていう事件ですけど。」

「うん。見た。」 そう答えた、ユリの表情の曇りに彼は気づいたようだった。

「やっぱり。島村さんもなんとなくがっかりしてますか？」

「そういうわけでもない。だって、今までだって嫌な事件はいつも起きていたもの。あのメールが世の中にはら撒かれたからといって、突然いいことばかり起こるわけないわよ。」

「たしかにそうですね。でもほら、前におばあさんに硯をもらって自首した泥棒の事件がありましたよね。メールに書いてあったように、あんなふうに善意が人に伝われば、何かが変わるかもしれないって島村さんとも思いませんでしたか。」

「それは思うけど、でもあのおばあさんも、今回のおじいさんもあのメールとは何の関係もないわ。あの人達はメールによって行動したわけじゃない。だいたい、お年寄りがパソコンや携帯を使っている可能性は低いでしょう。あの年代の人達はきっと私たちよりも人を疑わないし、他人に心を開いてるんだと思う。それが泥棒のときはたまたまよい結果を生み、今回は残念ながらその逆になったってことだと思うな。」

「そうですね。だけど俺はなんだかせつないです。きっと、あのメールを見て、自分勝手に期待をしすぎていたんだと思います。」

実際、自分自身もあのメールを読んで、最初のうちはなんだか興奮してたんです。これが正しい生き方だなんて思って、電車で席を譲ったり、街中で知らないおばあちゃんの荷物を持ってみたい、家族や彼女にも必要以上に優しくしたりして。人が喜んでくれると、すぐく心が高揚しちゃって、人のためになるって気持ちいいし、こ

れが幸せってことかなあ、なんて思いましたよ。」

「川田君は実際に行動してたんだ。偉いよ。」

でも世界は簡単には変わらない、ってメールにもあったじゃない。たしかに嫌な事件はあるけど、だからといってメールに書いてあることが全部まちがっているわけでもないよ。」 ユリは自分自身を納得させるようにそう言った。そしてあまり話したくはなかったが、昨日の電車での出来事を恭介に話した。

「このことがメールと関係あるかどうかはわからないけど、いずれにせよ、メールを読んだ人が行動を起こせば、こういうことはこれからもあり得るよね。それでも信じて行動する人は、ものすごい覚悟が必要じゃない？」

恭介はユリの昨夜の経験に同情した。そのような出来事に遭遇することが、ユリのような働く女性にとって、心を落ち込ませるのであることは容易に想像できた。

「あのメールがよくない結果を招く可能性だってあるってことですよね。」

「でもさ、だいたいあのメールがそんなに世の中に影響を与えているって証拠もないのよ。私たちが見たことやいろんな事件だって、偶然が重なっただけかもしれないじゃない。」 ユリがそう言ったのは、ユリ自身感じている、恭介と同じような不安を打ち消すためだった。

「そうですよね。」 恭介がぼそりと答えると、二人はそれ以上メールについてなにも話さなかった。

それから数日の間に、ユリの不安をさらに増すような出来事が続いて起きた。

深夜、ホームレスに嫌がらせをしている若者を止めにはいった学生が、暴行を受け重症となり、その後、死亡するという事件が起きた。テレビのワイドショーは、しきりに亡くなった学生の人柄や生活ぶりを報道した。どの番組も、その男の子が誰からも好かれる素晴

らしい青年だった、と伝えていた。しかし、ユリがいちばん気になり、そして悲しく思ったことは、彼の友人が話していた内容についてだった。

ある番組で、その友人が首から下だけをカメラに撮られ、話している様子がテレビで流された。

「高校からずっと一緒に仲良かったので、すごく悔しいです。優しい奴でみんなに好かれてました。でも乱暴なこととかは苦手で、夜、繁華街で誰かが騒いけると、避けて通るくらい、どちらかと言えば気が弱いほうだったんです。どうしても、そのときに限って、一人で止めようなんて思ったのかわからないです。見ないふりして帰ったってよかったんだ。みんなそうしてるんだし。そうじゃなくても黙って警察を呼べばよかったのに、と思います。」 そう言って、その男の子は泣くのをこらえた。

ユリの心に霧のように不安が広がっていった。

もし、この男の子がメールを読んでいたとしたら、そしてそれにしたがって命を落としたのだとしたら。それはあまりにも悲しすぎることだった。

誰が始めたことなのか、誰があメールを受信したのか、真実は何もわからない。また直接、受信していなくとも、ユリがその存在を知っているように、他にもどこから知った人達が多く存在しているかもしれない。

恭介が言っていたように、行動の指針を与えられ、それに従うことで人に感謝されれば、一種の高揚感が生まれるだろう。そのためにもあまりにも善良な人達が、行き過ぎたところまで行動をすることもないとは言えない。しかし、それが良い結果に終わらなかったとき、本人にとっても、その家族やまわりの人達にとっても、「それでも彼は正しい行動をした」などと言ってすむことではないだろう。

この夏の間に、ユリもいろいろなことを実際に目にしてきた。テ

レビで流されるニュースの他にも、電車の中で、街角で、人の善意を目にすることがたくさんあった。それはほんとうに素晴らしいことだと思えた。あのメールのことを知ってからにはユリも、きっと世界は大丈夫だ、もっとよくなれるのだと樂觀的に考えもした。

しかしいつの世にも、理想に向かうことに反発したり、邪魔や阻止をしようとする人達がいたのではないか。その人達がメールの存在を知れば、まったく逆のことを試みるかもしれない。すなわち他人から奪い、苦しめること。破壊し、汚すことを。

悪い予感を裏づけるかのように、悲惨な殺人事件が続いて起きた。それから世界中でいくつか小規模なテロがあった。

パリやロンドンの街中、公共の乗り物で小さな爆発や小火騒ぎなどが続き、日本では海外旅行のキャンセルが相次いでいると報道された。ニュース番組は次々に起こるテロに対し、ひとつの事件が刺激となり、こうして連鎖的にテロが起きていると分析していた。それを聞きながらユリは、これらの事件さえもメールへの反動なのではないかと想像した。

これまでも世界中で、恐ろしいことや悲しい事件が日々起こっていたはずだ。そしてユリが知り得る大国の大きなニュース以外にも、日常そのものが、争いや貧困と病の中にある環境に生きる人たちも大勢いる。

どこの国に生まれ、どう暮らしていても、この地球の一員であることには違いがない。しかしこれまでのユリは、どんな事件や出来事にも、一瞬は心を曇らせても、結局は自分とは無関係なものとして感じていた。キャンセルされた海外旅行も一ヶ月もすれば、また皆これまでどおり旅に出かけはじめだろう。どんなこともその一瞬は心を痛めても、またすぐに忘れてしまう。

しかしユリにとって、今ほど自分とこれらの出来事が無関係ではなく、たしかに結びついていると感じられたことはなかった。自分

も出来事の小さな一部なのだ、そんな気がした。すべてあのメールを読んだことから始まっている、とユリは思った。もちろん、直接関わっているわけでもなく、メールも自分宛に届いたものでもない。それでもメールを読んだことで、自分が周囲の小さな世界だけではなく、もっと大きな世界とつながって生活している、という実感を得ていたのもまた事実だったのだ。

9月16日

会社では川田恭介が「おはようございます。」といつもどおり、元気に声をかけてきた。最近の事件がユリの心にくらかの影響を与えていたが、同じようにメールの存在を知っている彼にはそれほど変わった様子はない。彼がどう感じているのがユリには気になっていた。

昼休み、ユリは恭介に、ホームレスを助けようとした男の子の話をしてみた。やはり、彼も同じように感じていたようで、「僕もあのメールと関係があるんじゃないかとちょっと思いましたよ。」と言う。

「それで、川田君はどう思っているの？あのメールが原因で、あの殺人が起きたのかもしれないのよ。」

「でも、こういう事件はいつでも起きています。もちろん、どうでもいいなんて思わないですよ。でも世界中で起きることにたいして自分が直接なにかできるわけじゃないでしょう？それでもただひとつ出来ることがあるとすれば、あのメールに書いてあったことなんじゃないですか？」

「でも、あのメールに従わなければ、起きなくてすむ事件だったかもしれない。」

「じゃあ島村さんはどうすべきだと思いますか？世界中の人達に向けて、やはり正しいことをするのは止めるって言いますか？何があっても見てみぬ振りをして、自分の身だけを守って、これまでどおり傍観してるのが唯一の手段だと思いますか？」そう言われるとユリには返す言葉がなかった。恭介はさらに続けた。

「自分に直接、降りかかっていないことについて議論するのは簡単ですよ。そんなことより自分に出来ることをあきらめずにやれとあのメールは言ってると思います。すべてのことを予測して、問題を阻止するなんて無理です。もしかすると、ものすごい力を持つ偉大

な人物ならそれも可能かもしれない。でも僕たちはちっぴけな普通の人間です。殺された男の子もそうだった。無理はしちやいけなかったと思う。なによりも大切なのは命ですからね。自分の力に合わせ、自分に出れることしか人は出来ないんだ。僕はもう今はメールの意味とか、正否についてはどうでもいいと思っています。ただ自分は、もつと自分自身をよく知って、できる範囲で行動していると思うっているんです。」

恭介の言うことはもつともであるとユリは思った。自分はいつもあれこれと考えすぎる。深く考えるのは悪いことではないが、そのことが現実から目をそらす原因であつてはならないのだ。世界について思うことで、自分の身動きがとれない状態に陥るなど本末転倒だ。

それにしても、ユリは恭介の意外な強さを見た気がした。これまではどちらかと言えば、自分よりも恭介のほうがメールに入れ込んでいるように思っていた。しかし、ここ最近の事件で自分がおろしている間に、彼はしっかりとそのエッセンスをつかみとり、心を強く保っていたのだった。

「島村さん、今日、帰りに少し時間ありますか？」

「うん。大丈夫だけど。」

「このメールを最初に受け取った友達に、会いに行こうと思うんです。」

ユリは以前から、このメールの受信者としてどういう人が選ばれているのかが気になっていた。少なくとも恭介は、実際にその人物を知っている。いったいどんな人なのだろうか。もし、それを知ることが出来れば、最近の嫌な事件について気持ちを整理できるような気がしていた。しかしそれを彼に聞くのはルール違反だとも思っていた。

受信者はこのことを人に話してはならない、とメールにはあった。その友人は恭介に信頼があるからこそ見せたのだろうし、恭介もま

たユリを信頼してコピーを読ませてくれた。そのうえ、受信者について知りたいというのはあまりにも度を過ぎた好奇心だ。

「このメールを見せてくれた友達なんですけど、そいつはこのメールが来るずっと前から、人のために、ってことばかり考えてるような奴です。俺なんかには比べるとほんとうに心が広くて、男の中の男みたいな奴で。俺はある意味、そいつに昔から憧れていたんだと思います。誰が考えてやったことかわからないけど、メールが俺じゃなくてあいつのところに送られてきたっていうことだけでも、信じられると思ってます。」

川田恭介はすらりとした外見に似合わず、大学時代はラグビーにうちこんでいたと話したことがあった。その彼がそれだけ信頼し、男らしさで一目置いている友人とは、多分、いっしょにラグビーをしていた仲間なのだろうとユリは想像した。

「島村さん、一緒に行きませんか？」

「ええ？私が？」

「はい。もうぜんぜん会っていないんです。島村さんはメールのことは何も知らないってことにして欲しいんですけど、一緒に行きませんか。」

「私はいいいけど、でも二人が会うのに私がついていくのはおかしくない？まったく知らない人なのに。」

「いいんです。そいつがやってる店のお客としていくんですから。」

「そうなの。」 ユリは本心ではとても行きたかったのだが、本当に自分がその人に会ってもよいものなのか、迷いもあった。なんとなく、恭介にもその友人にも申し訳ないような、なによりもメールそのものに申し訳ないような気がしたのだ。恭介は、そのユリの気持ち察したかのように言った。

「別に、メールを受け取った人に会うなんて思わないでください。

すごく面白い奴だし、僕の友達の店に遊びにいく、それだけですよ。」

「と彼は笑った。」

タクシーで着いた先は、繁華街から少し奥まった住宅街のさらに奥、静かな裏道だった。

「こつちです。」先に車を降りた恭介が手招きした。建物の間に挟まるようにある小さなビルには何の看板も出ていない。彼の後ろについて、地下への細くて暗い階段を下りていくと、やはりなんの飾りもないドアがそこにあった。

「これがお店？」と思いながらユリが中へ入ると、確かにそこは小さなバーであり、店であることに間違いなかった。しかし、これでは知っている人しか来られないだろう。秘密クラブのようだ、と思った。それでもカウンターには数人の客が座り、楽しそうにおしゃべりをしている。

「久しぶり。」と恭介が声をかけたのは、カウンターの中に立っているきれいな女性だ。彼は何度もここへ来て、お店の人とも顔見知りなのだろう、とユリは思った。

「島村さん、彼、というか彼女が僕の同級生です。」

「ああ、ええ？ごめんなさい。お友達って男の人だと思ってたわ。」

「そうですよ。こいつ、元々は男ですから。」自分で勝手に逞しいラグーマンを想像していたユリは、一瞬戸惑った様子を隠せなかった。

カウンターの中のその人は、そんなユリの様子をとくに気にするでももなく、にこにこ微笑んでいる。

「はじめまして。恭介のお友達の方ですか？私は佳織といいます。」

「はい。会社の同僚なんです。今日は突然お邪魔しちゃってごめんなさい。」ユリは自分がものすごく場違いであるように感じ、思わず謝ってしまった。

「そんな、お客様に邪魔な方なんていませんよ。ここはお酒だけじゃなく、食事もできますから、いつでも突然きてくださって大丈夫です。」

香織はユリよりもずっと年上であるかのように落ち着いた雰囲気を持っていた。ユリの知っているどの女性よりも美しく、それでい

て不思議な暖かさを感じさせる人だった。

出て来た料理はシンプルなものばかりだが、家庭の主婦が作るような安心感のあるしつかりとしたもので、ユリは満腹になるまで食べた。食事をしながら、友人同士の学生時代の思い出、おもしろいエピソードなどを聞き、ユリは二人と一緒に笑って笑い転げた。もちろん、メールについては誰も何も触れなかった。

佳織は頭の回転が速く、話していてもその話術や知識の深さに誰もが引き込まれる魅力があった。はじめて会ったユリにも、居心地の悪さを感じさせないための気遣いが感じられる。しかし、その気遣いはとてもさりげなく、そしてユーモアに満ちていた。

「佳織さんって、誰かが疑問に思っていることを聞いたら、納得のいく答えをしつかりと出してくれそうな人だな。」とユリは思った。

あのメールについて彼女はどう感じているのか、そして最近の事件についてどう思っているかを聞きたかった。彼女の答えを聞けば、自分のもやもやした思いにもなんらかの解決がつく気がした。しかし、この二人の信頼に傷をつけないためにも、自分が知っていることは隠し通さなくてはならないのだ。

三人でおしゃべりを続けるうちに、内容はさまざまな方向へと飛び、そのうち最近の事件のことに話が及んだ。ユリは佳織の考えを聞きたくて、自然と口数が少なくなった。

「あたし、最近のニュースを見るとたまらない気持ちになるわ。毎日毎日、殺人や強盗、自殺に、いじめに虐待でしょう。陰鬱になるわね。おまけにテレビをつけるたびに、政治家やどっかの会社の偉い人がそろって聞き苦しい言い訳ばかりしている。」

子どもの頃、大人ってというのはみんな、きちんとして偉いものだって勝手に思ってたのよね。全然そうじゃないってことをこう毎日見せつけられると、もう希望も未来もない気がしちゃうね。」

「本当だよな。いつからこんな世の中になってしまったんだろう。そして、事件そのものだけじゃなく、そのまわりの人間に失望している気がする。」

よく考えて、本気で話す人間があまりにもいないことにたいしてだよ。大人だって偉い人だって人間だからさ、間違いは犯すし、失敗もするってことは、自分も大人になったから俺だってわかるよ。だけど、人は自分の責任とか、自分の考えとかにもっと自覚的になるべきだろう？」

「そうね。でももっと悪いのは、あたしたちもそれに腹が立つくせに、結局は丸め込まれるっているか、腹を立てながらも、この人達もこの国も変わるわけがないって思っちゃうことよね。みんな、どうせ、しょうがないことだって思ってるのよ。どんなに憤りを感じることとも一週間もすると、もっと嫌なことが起きたりして、結局忘れてうやむやになる。いつも闘い続けるのはそれに巻き込まれた当事者だけよ。」

なんでも『しょうがない』って結論づけて、当事者は気の毒だけど自分には無関係なんて、本当は関わらずにすんであることを心のどこかで安心してる。あたしはそんな自分に一番腹が立つのよね。」

二人の話を聞いていたユリは、急にどうしても佳織に聞いてみたくなった。

「佳織さん、もしほんとうに私たちが本気でなにかを変えようと頑張ったら、この国はもっとよく変わると思う？」

「もちろん思う。すごく難しいことかもしれないけど、でも試してみる価値はあるんじゃない？」

この国がもっと、自分と自分の生活を大切にして暮らせるような場所であるといいと思うな。そしたらお互いのことだってもっと考えられるようになると思うし。」

なんだかんだ言っても日本にはまだまだいいところも沢山あると思うの。街は清潔だし、大多数の人はマナーがあるでしょう。よくね、私達は外国人に比べて自己表現が下手だし、羊みたいに群れる

のが好きって批判もされるけど、でもどこの国にも特徴ってあるでしょ。日本人は自分を押し出すのも下手だし、表現するのも下手。そんなだから多分、社交も苦手なのよ。でも苦手なことは得意な人に任せればいいじゃない。私達は謙虚で奥ゆかしい特徴を生かして出来ることをすればいいと思うの。

昔から日本人が持っていた感覚の鋭さ、情緒の豊かさ、それって自然を敬い、それと共に暮らすことで身についたものよね。それから持ち前の真面目さ、器用さ、勤勉さを生かせば、出来ることはいろいろあるような気がするの。ユリさんはどう思う？」

「そうね。たしかにそうね。私もニュースとか見てみると、ほんとうに嫌な気持ちになることが多かったの。でもその嫌な気持ちは、それをあきらめてる気持ちからわいてくるもので、もしなにか出来ることがあるなら、それに向かうことで嫌な気持ちは忘れられるのかもしれないよね。」

「ユリさん、着物は好き？」突然、ユリに佳織が尋ねた。

「好き。でも着るのはお正月と友達の結婚式だけかな。」

「あたしね、最近、着物に凝っててよく着てるのよ。そうすると、日本人の昔からの質素で理に適った生活っていうのが、この身にしてみて感じられるような気がするの。季節や気候に合わせて暮らす繊細な感覚とか、暦ごとの行事が心に与える意味の深さとか、そういうのよ。色ひとつとっても、萌黄色とか、鳩羽紫とか、浅藍ねずみとか、そういう微妙な感覚って日本に特有のものじゃないかな。それって素敵じゃない？昔ながらの自然に添った暮らし方ってすごく美しいと思うし、それにこの暑さに対抗できる唯一の手段かもしれないと思うのよ。」佳織はにっこりと笑った。

ユリと佳織はその後、女性同士としておしゃれやおいしいケーキ店の話なども楽しみ、まるで昔からの友達に会ったように心和む時間はあつという間に過ぎた。

「ユリさん、こいつと一緒にじゃなくても、いつでもまた来てくだ

さいね。」と、別れ際に佳織が言い、そこだけ男の子同士っぽく、恭介を「こいつ」と呼ぶのがユリにはおかしかった。ユリは、この人に今日会うことが出来て本当によかったと思った。店を出た後でユリは恭介に言った。

「あのメールはやっぱり送られるべき人に向けて送られてる気がするね。」

「やっぱりそう思いますか？」 彼が嬉しそうに笑って答える。

「あいつのことは尊敬しています。学生時代、僕もまあ勉強もそこそこ頑張ったし、ラグビーもそれこそすべての情熱をかけてました。これ、自慢じゃないですよ。誤解しないでくださいね、女の子にもかなりモテたし、まあ大学内でも俺はけっこう目立ったりしてたんです。働きたい会社も早くから決めていたし、そしてちゃんとその目標もクリアしました。それでもあいつには絶対叶わない。男として・・・というか、あいつは女なわけですが、なにをしても叶わない気がするんです。」

「でも大学時代の友達ですごく男らしいって言うから、私、勝手に体の大きなラグビー部員を想像してた。」

「そうでしょうね。」 と恭介が笑った。

二人は最寄の駅まで話しながら歩いた。

佳織の本名は海原太郎と言い、エスカレーター式の学校に通っていた恭介とは小学校から大学までずっと一緒だったという。小さい頃、恭介は佳織の特性には気づかなかった。多分、当時は、佳織本人も他人との違いなど気づいていなかっただろう。

恭介が香織の家へ遊びに行くと、彼は髪に女の子用のヘアピンを止めたり、スカーフを巻いて見せたりすることがあった。恭介は、香織がふざけているのだと思い、気にも留めなかった。

しかし時がたつに連れ、佳織は自分が他の男の子とは違うことに気づいていく。自分の特性が、時にテレビで笑いの的になっているものであることも知った。好きになる相手もちろん同性だった。

ごく普通の家庭に育った彼女は、家族を傷つけない一心で自分の本質を隠し続けたのだ。本心では出来るだけ、女の子に近い生活をしたかったが、佳織は大学を卒業するまで、それを周囲の人間に決して悟らせなかった。知っていたのは恭介だけだ。

卒業後、彼は両親が喜ぶような、いわゆる一流企業に一度は就職した。しかし、結局、二年ほど働いたあとで辞めてしまい、その後で今の小さな店を始めたのだそうだ。

もともと華奢で女性らしい外見だったので体を変えることはしていない。今でも実家へ帰るときには普通の男性として帰る。家族が新しい仕事や生活について細かく聞いてこないのは、本当のことに気づいているからだ、ということも佳織は知っている。しかし、いつかそうするしかない時が来るまで、自分から事実を言い出すことはないだろうとも思っている。

恭介は幼なじみとして佳織とずっと親しくしてきたが、ごく普通にスポーツにうちこみ、女の子と交際し、彼女とはまったく違う十代を過してきた。そのごく当たり前で健康的な姿、そして子どもの頃からにつきあいで知っている偏見のなさ、佳織に彼にだけは真実を打ち明けさせたのだった。恭介は、佳織の底知れない強さに驚く、と言った。

「あいつはふつうの、まあ、ちょっとフェミニンな感じの男として振舞ってたし、好きな男のことも絶対に俺にしか言わなかったんです。ああいうちょっときれいな女っぽい男なんて他にもいたし、あいつは顔もきれいだから女の子にも受けてて、すごい人気がありました。そういう女の子たちともうまくやってて、自分の本質を人に悟られないようにすごく気を使っていましたよ。」

それでも、中学、高校時代とか、まあ、いつでもどこでもそうだが、くだらない奴がいるんだ。ゲイかどうかとかっていうより、たんに自分と違う匂いにするものを敏感に嗅ぎつけて、それが自分にはなんの関係もないくせに攻撃したり、悪意をぶつけてくる奴が

いるんです。あいつはかなり傷つけられてたと思います。でも太郎が一番恐れてたのは、自分が傷つくことより、自分のせいで誰かが傷つくことだったんです。それを食い止めるためになら、いくらでも自ら進んで傷つきに行くような奴だった。」 恭介は昔を思い出すように話した。

「太郎は、子どもの頃から自分の運命を引き受けてたし、自分の本質を見据えていました。そしてまわりの人間のために、理性で自分をコントロールしていたんです。そういう姿をずっと見てると、自分がいくらスポーツで花形になっても、もう人間的にはぜんぜんかなわないんですよ。」

恭介は佳織のことがある意味では羨ましかった。人生の早い時期からあれだけ明確に、自分の本質を捉えられるということはそうそうあることではない。佳織は、他人とは違いすぎる大きな特徴のために、早くからそれを知っていた。しかし、それによって抱えるリスクもあまりにも大きかった。他人からの攻撃、自分自身の迷いや恐れ、自分を貫くことで大切な人達が傷つくこと。しかし、それを全部引き受けた上で、彼女は自分らしくあるための努力を続けてきた。人を傷つけないために本質を隠しても、けっしてそれを見失わない強さも持っていた。そして今、自分の本質を外界に表現して生きる道を選んだ佳織が、恭介にはまぶしく見えていた。

「俺、昔から、太郎は天使なんじゃないかって思うことがあったんです。」

「あまりにもきれいすぎて？」

「というか、それもありますけど、神様が人間たちに見せるために、この世にああいう人物を送り込んだんじゃないかって思ったんです。あ、俺、変な宗教とか入ってないですよ。」

「そんなこと思ってないよ。」

「太郎に限らず、体と心の性が同じじゃない人が自分の本質を貫くことは、波風が立つこともありますよね。自分の本質を人よりよく知っているにもかかわらず、それを表現しようとするのは普通の人

よりきついわけです。でも勇気を出してそうすることで、人は自分の本当のありのまま生きていいんだってことを、教えてくれる存在みたいな。少なくとも俺は太郎を見てるとそう思うんです。あいつの心の気高さは国宝級ですよ。」友人をあまりにも褒めすぎなのが恥ずかしいと言うように、少し照れ笑いをして彼は言った。

ユリにもその気持ちは分かる気がしていた。さきほど話した彼女は、初対面にもかかわらず、そして年下なのにもかかわらず、ユリにとっても懐かしい昔からの友人のように思えた。少し話しただけでも、その心の広さ、強さが暖かく伝わってきた。それは多分、恭介が言うように、彼が通り過ぎてきた悲しみや困難によって培われたかもしれないが、そんな境遇は関係なく持つて生まれた清らかさだとも思えた。

子ども時代、そして十代という、自分の本質に近いところにいる時代に、佳織のような友人がいることが、どれだけ個人に影響を与えるかを、人一倍多感な少女だったユリは理解していた。

「あのメールが佳織さんのところに来たのは絶対に、深い意味があるね。それにメールがいいかげんなものではないという証拠でもあると思うよ。」ユリは言った。恭介もそれに大きくうなづいた。

9月18日

夜、ユリが自宅でパソコンを開くと、差出人名もタイトルもないメールが届いていた。ウィルスを恐れながらも、なんとなく削除せずに開いてしまった。

「このメールは、以前にもメールを送った特定の人達に向け、再度送っているものです。」

これは、もしかするとあのメールだろうか。どうして私に送られてきたのだろうか。香織さんに届いたものを、川田君が私に送ったのだろうか。とりあえず、ユリは先を読み進めた。

「メールは、前回送ったものを最後にするつもりでした。予定を変更し、再度メールをしたのには理由があります。気づいている方もいると思いますが、私はいくつかの過ちを犯しました。それについて謝罪をしなくてはなりません。前回、皆さんが行う行動について反動がある可能性を伝えました。それから、メールの内容は他人には伝えないで欲しいことも書きました。しかし、その難しさを私はもっと把握しておくべきでした。」

もっとも効果的でリスクの少ない方法で、私は世界を良くすることを願いました。しかしまだまだ力不足だったようです。メールの内容に賛同してくださった方が、傷つくような出来事がありました。また狂信的に行動するグループもいくつか出来ています。それに反対する破壊活動も発生しました。

私は、未来への希望という小さな種を蒔くために行動をしました。しかしその種が苦悩の実をつける事実も知りました。それらについて私は、自分なりの方法で責任を負うつもりでいます。

最後にどうしても伝えたいことをここに記します。

ご自身と命を大切にしてください。自由を手放すことなく、考え行動することをあきらめないでください。世界はあなたと無関係ではありません。あなたの蒔く種が、世界を創っていることを忘れないでいてください。

人生とはあなたの外側にあるものではありません。人生とはあなたが何を考え、どう行動したかです。すなわちあなたの精神の辿る道筋こそが人生なのです。考えることが重要です。幸福は外側から与えられるものではなく、ましてやお金や権力で手に入るものではないことが、おわかりになるでしょう。

そして行動するときには、世界と人間にとって、その生命にとって有益であるかどうかを考えることです。そう信じられるからこそ、行動する意味と価値です。その反対のことがあれば根気強く、闘ってください。

私達は皆、無力感を抱いています。一人ではなにも出来ず、身近な人さえ幸せに出来ず、怒りの感情に支配されることもあるでしょう。そんなときも自分を卑下せず、どうかあきらめないでください。否定的な感情や思い通りにいかない状況は、生きていれば当たり前のように繰り返してやってくるものなのです。

他人を批判したり、惑わされたりしないように注意してください。批判はなんらかの結果につながる限り、たんなる時間の無駄でしかありません。あなたが知っていることを知らない人に出会っても、自分をおしついたり、人を抑えつけようとしてはなりません。ましてや見下したりなどしないでください。私達はそれぞれが出来る範囲で生きています。あなたはあなたの出来ることをしてください。

結果が出るのは遠い遠い未来かもしれない。いいえ、もしかすると結果は出ないかもしれません。それでも私はあなたに伝えました。もっと良いやり方をあなた自身がみつけて、そして多くの人に伝えていってください。

あなたという種が花を咲かせ、そしていつの日か実を結び、朽ちて土に還るその日まで種を蒔き続けてください。どれほど大きな樹も、はじめは小さな種であつたでしょう。どんな小さな花も、集まればそこが美しい草原になるでしょう。世界は美しく、人生は素晴らしいものであると信じてください。これが私からの最後のメッセージです。」

メールを読んだユリは、なぜ自分のところにこれが届いたのかはもちろんのことだが、その遺書のような内容が気になって仕方なかった。

「責任をとるってなに？まさか死んでおわびするなんてことじゃないわよね。人にはあきらめるな、なんて言っておきながら、それってどうなのよ。」

遺書であるという確信などあるわけでもなかったが、ユリはいてもたってもいられず、新聞を開くとどこかになにか関連するような出来事、記事がないかを探した。

「まさかね。」と思いながらも死亡欄に目をやった。そこにはいつもどおり、どこかの会社の元会長だとか、知らない海外の芸術家、祖母の時代の俳優などの名前が書かれている。その中にある国のジャーナリストの死が、小さな記事とともに載っているのがユリの目にとまった。その人は、平和運動家としても精力的に活動し、自分の死後は角膜から臓器までほとんどの部分を提供するという。死因は心臓発作、とあった。ユリは、もしかしてこの人が・・・、という思いに一瞬とらわれたが、彼はメールの差出人ではなく送られた側であつたようにも思えた。

毎日、新聞に載っているよい出来事も悪い出来事も、それがメールとは無関係なほうが確率的には高いだろう。すべて、自分が勝手に結びつけて考えているだけだ。結局のところ、誰にも本当のことはわからないのだ、とユリは思った。

この出来事はいつたい何だったのだろう。この夏、皆が暑さのこ
とばかり考えていたような時間だった。地球の未来への不安も、誰
もが否が応でも考えさせられた。それと同時に、自分自身のことも
世界のことも、これまでと違う視点で見たことも確かだった。不思
議な出来事にも遭遇した。それらは本当にあのメールから始まって
いたのだろうか。それともこれは、夏の暑さに興奮した誰かが、ち
よつとした思いつきで送ったいたずらだったのだろうか。

この暑さの中で目にした人々の善意、その中にはこのメールから
広がったものもきつとあったかもしれない。もしそうなら、このメ
ールという小さな種は、たしかに小さな花をいくつか咲かせたのだ、
とユリは思った。

9月19日

ユリは次の日、昨日届いたメッセージは川田恭介が送ったのかを、彼に訊ねた。

しかし、メールは恭介にも届いていたが、彼自身もどこから送られたのか分らないと言う。

「太郎に電話してみたんです。もちろんあいつのところにも送られていましたが、僕のところには転送はしてないって言うんです。なぜ、僕にあれが送られてきたのかまったくわかりませんよ。島村さんにも送られていたなんて……。いったいどういうことなんですかね。」

「それはやっぱり、前のメールを読んだ人間全員に送られてるってことなんじゃない？」

「でも、一回目のメールが届いていた太郎はともかく、僕たちがあれを読んだことや、メールアドレスは誰も知らないはずじゃないですか。それなのにどうして……。」

「さあ、それはわからないけど。もし誰かが、世界中あのメールの広がり具合を掌握しているとしたら、なんだか恐いわよね。それは個人では無理だよ。やっぱり大きな組織で運営してるってことなのかな。それとも太郎君、いえ、佳織さんが私たちには秘密で送ったとか……。」

「まさか。あいつはもしそうしたなら、正直に送ったよって言いますよ。」

「そうよねえ。でも私たちがあれを読んだことを誰かが知っても、メールの趣旨からすれば、なにか危害があるわけもないし、それはまあ、いいんだ。それに書かれてる内容もよくわかることだったし。やっぱり最近いろいろ起きてることについて、ちゃんと考えていたってことだよ。」

ユリはメールがなぜ自分に届いたのか、それよりもつと気になることがあった。

メールには、これは最後のメッセージです、とあったが、それによつてユリは、空中にぽんと放り出されたまま、置き去りにされたように感じていた。

前回のメールには、行動しなさいということと、その具体的な内容が書かれていた。それを読み、日々どう生きればいいのか、ヒントをもらえた気はした。それでもユリは、自分はまだ、一番大切なことを理解していないと思っていた。

もちろん世界のために、たとえば地球温暖化を遅らせるため効果的なことはするだろう。人に出来る限り愛想よく接し、必要なときは手を差し伸べることも、今後はもつと心がけるだろう。

しかし、それだけでなく、自分が自分として生まれてきた意味、自分の心と肉体が何を欲して存在しているのか、その答えが欲しかった。それは安易な自分探しであつたり、たんに適職に就きたいというようなことではなかった。たとえどのような環境にいても、どんな仕事をして、いつして消えることのない、絶えず燈る小さな火のようなものであるはずだ、と想像した。幸せになるためにそれが必要だというわけではない。見つからないからといって、人生を放棄するような逃げ道としてでもない。ただ人間として、いや、たとえ人間ではなくとも生命体として生まれた以上は、そのことを知る義務があるように無意識に感じていたのだ。

ユリがこれまで感じていた不安全感。自分の行き場所は必ずある、という自信を長くもてずにいたこと。それらはけつして結婚をしていないからでもなく、今の職業がアルバイトで専門職でないからでもなかった。なにか一番大切なこと、生きる以上は苦しくても答えを見つけないといけないこと、それを放置しているからなのではないかと、感じ始めていたのだ。それはあのメールを読んだことやこの夏に偶然に目にした人々の行動、そしてトルストイだの、サンドだのの言葉によつて気づかされたことだった。

メールが示してくれたヒント、そのもう少し先まで進まなくてはいけないような気がした。しかし答えを教えてくれるメールが届くことはもうない。一人で探していかなくてはならないのだ。

その夜ユリが見た夢に、再度あのおばあさんが現れた。あの夜と同じように、二人は黄色い花の咲き乱れる、静かな夜の中に立っていた。

「おばあさん。もう体はよくなったのですか？」

「ユリちゃん。あのときはどうもありがとう。すっかり元気になりましたよ。」と彼女が答えた。

あの日、老婆はここがユリの戻るべき場所だと言った。ユリはこの場所に立ったとき、日常では忘れていたような、とても脆く、蓋をしたままになっている、宝の入った小さな箱を開いたような気持ちになった。

それは幼い頃、時間や日常を忘れて本を読む気持ちに似ていた。またあの頃、家族に感じていた気持ちを思い出させた。母、父、そして二人の姉妹について感じた、すがりつきたいような愛と淋しさ。それは今のユリが彼らに対して持つ気持ちとは確実に違う思いだった。大切さは今も昔も変わらない。しかし、過ぎ去って戻ってこない時を思うとき、その思いはより幻想的に輝くものに見えた。

「私が戻る場所は、子ども時代、遠い過去にあるのかしら。」

ユリは独り言のようにつぶやいた。それに、答えるように老婆は静かに話し始めた。

「戻る場所は過去でも現在でも、未来でもないの。それは時間とは関係ないところにあるのよ。」

「それはどこにあるの？」

「ユリちゃんの中だよ。誰の中にも、ユリちゃんの中にも、ひとつずつ種が埋まっているの。」

人はね、お花と同じ生き物なの。なのに人間は、自分たちは植物

や動物とは違うものだど勘違いしてしまったのね。でも本当は人間も動物も小さな花と同じ、自然の中の同じ生き物。私たちがすることはただひとつ。種から伸びて芽を出し、花をつけて実を結んだら、今度はだんだん枯れて、そして土に還るの。そしてまた新しい種が生まれるんだよ。

ただそれだけのことなの。人間だけが特別だなんて思っちゃだめよ。生きることにはいろんな意味をつけて、命を勝手に操作してはいけないの。花は嵐に倒れることはあっても、自分以外の花を傷つけたりはしない。ただ生きて、花と実を生み出して、そして枯れていくの。それを全うすることが自然の役割なんだよ。それだけでいいの。花は小さくてもいい。実はおいしくなくてもいい。ただ自分がつける花と実を大切に育てなくてはね。」

「でも、おばあさん、人はなかなか種が探せないんじゃないかな？だから芽を出すこともなく、小さな花さえ咲かせることも出来なくて、萎れてしまうこともあるんじゃない？探せるのかな。私は本当にその種を見つけられるのかな。」

「そうねえ。見つからないこともある。でも見つけようとするだけでも、その種には栄養が与えられるのよ。もし、たとえ花も実もつけられなくても、その種は次に咲くまでに強くなっていくの。でもユリちゃんは、種を探す方法をちゃんと知っているはずだけだね。」

ユリが、それがわからなくて困っているのというように少し顔をしかめると、老婆は続けて言った。

「ユリちゃんの大好きなものに向かっていけばいいのよ。それが種を強くして、発芽させてくれるの。だけど、人間が勝手に作り出した嘘にだまされてはいけないよ。人が生きるために重要だと勘違いしてるもの、お金がいっぱいもらえる仕事とか、人を思い通りに動かそうとか、そんなこと、種にとっては意味がないの。そんなことに夢中になりすぎて、人は種のありかへ戻ることを忘れちゃったのかしらねえ。子どものころはみんな、知っていたはずなのにね。」

「子どもの頃、知っていたことって？」

「小さい頃に大切だったことが、本当は大人になってもいちばん大切だったことよ。」

家族、友達、自由ということ、学ぶこと、夢中になって遊ぶこと、思いやること、傷つけないこと、勇気を持つこと。きれいなものや可愛いものをいつくしむ気持ち。そういうことだよ。ユリちゃんは、今でもそれを忘れていないでしょう。ユリちゃんが好きなものを求めていけば、種のありかは、いつでも教えてもらえるんだよ。」

その言葉に、はっと目を覚ますと、まだ夜が明けていなかった。

ユリはあまりにも夢が鮮明だったことに驚いていた。この夏はこんな夢をよく見る。先日のも、そして前に見たいくつかの夢もそうだった。まるで夢と現実の境目がないように、曖昧なところがないふつつならば、夢はもつとぼんやりしていて、つじつまが合わないものだ。夢の登場人物が話した言葉など意味をなさなかったり、そうでなくても数日すれば、印象とともに記憶も薄れていく。しかし、この夏に見たいいくつかの夢は、その内容も聞いた言葉もいつまでもユリの中に残るのだ。

そういえば、とユリは前に見た夢で聞いた言葉を思い出した。そう、あれはまだ出会っていないはずの自分の娘に言われた言葉だった。

「夢はただの夢としてではなく、信じるべきものもある」というあの言葉だ。

夢の中で、おばあさんが自分に語りかけた言葉は、大切な真実なのだとユリは思った。自分が探しているものは多分、この種だった。自分が咲かせたい小さな花、その種を探していたのだ。人に見て欲しいからでもない、自分が幸せになりたいからでもない。ただひとつの生命体として、花をつけるため伸びることこそ自然の摂理であるだろう。人は誰もがそれを求めてもがき、時には道を誤る。しかし、無意識に求めていることは多分、みな同じことなのではないだろうか。

ユリは安堵感に似たものを感じていた。夢で言われた、ユリちゃんの好きなものに向かっていけばいいという言葉を噛みしめた。私は自分が咲かせる花も実もまだ知らない。それはどうでもいいのだ。ただ花をつけることを目指して伸びていけばいい。それだけが種のすべきことなのだ。実をつけるかどうかを心配することもない。植物はそんなこと思い悩まず、ただ命を全うすることにのみ、存在のすべてを傾けるだろう。命を紡ぐことは、善悪や、人間の創りだした道徳感を超えた自然のルールだ、とユリは暗闇の中で思った。

翌朝、朝食のときに家族がつけたテレビで、台風に襲われたあのイタリアの町が、少しずつ復興していると伝えていた。街の人々はうなだれた頭を持ち上げ、しっかりと前を向き行動をし始めていた。災害時、ユリがテレビで見た街の無残な姿は少しずつ整理され、青い海とともに輝きをとり戻しつつあった。パリで行われたチャリティコンサートで義捐金が、大きな補助となっているようだ。

ユリはもう一度、ある言葉を思い出していた。

「もし明日世界が終わるとしても、私は今日、林檎の種をまく。」
種は私の中にも、きつとひとつある。それを大事に育てることこそが生命あるものの仕事だ。今後、どんな道に迷い込んでも、その真実だけは迷い疑うことがないだろう。

おばあさんの言うとおり、私達は自然の一部なんだ。生命を持って生まれ、いつかは枯れ果てる。存在するだけで世界のバランスを保つ、植物や動物たちとまったく同じものであり、どこにも違いない。だとしたら自然を破壊すること、生命を無駄にすること、それを奪うような争いや武器を持つこと、それらにいったい何の意味があるというのだろうか。

エピソード

ユリは、職場でお使いを頼まれて社外へ出ていた。まだまだ暑さは終わっていない。午後二時過ぎの気温は、九月半ばを過ぎた今も真夏と変わりなかった。

会社へ戻ろうと信号待ちをしていたとき、そこはあの老婆が座り込んでいた場所であることを思い出した。

「ユリちゃん、種のありかは、いつでも自分が知っているんだよ。」優しく微笑みながら、そう話す声が聞こえるような気がした。

夢は信じるべきときがある。そうだ。あの、おばあさんに会いに行かなきゃ。なぜ、私が知りたかったことを、その答えを伝えに来てくれたのですか？ もう一度あの人に会いたいと突然に思った。

ユリはタクシーを拾うと、あの日行った病院名を告げた。彼女の名前も連絡先も知らないのだ。病院がそれを教えてくれるかどうかはわからないが、ユリにはそれしか方法が思いつかず、病院へ向かった。生真面目なユリにとって、仕事中、黙って私用で時間をつぶすことも初めてだったが、それさえ今は気にならなかった。

病院へ着くと、ユリは今更ながらここへ来てどうしようというのだ、という思いがわいてきた。おばあさんの名前もわからず、あの日ここで治療を受けたとは言え、今、入院しているわけでもないのに、どう聞けばよいのだろうか。

そのとき、ユリのすぐ目の前をあの日、おばあさんから預かったレシートを渡してくれた看護師が通った。慌てて、「すみません。」と声をかける。

「はい。なにか。」

「あの、10日くらい前に、ここに具合が悪くなったおばあさんをお連れしたんですけど、あの、わかりますか。看護師さんがおばあさんから預かったって言って、私にレシートの紙切れを持ってきて

「くださったんです。」

「ああー、覚えてます。あの時連れてきてくれた方ですよ。お世話になりました。」

「私、あの日、すぐ帰ってしまったんですけど、おばあさんの具合が気になっていたんです。よくなって帰られたんですよ。」

「・・・それが、あの患者さん、亡くなられたんです。」

「ええっ？ あのあとですか？」 それは、ユリが思ってもみないことだった。なぜか必ずもう一度会える気がしていたからだ。

「やっぱり、なにかご病気だったんですか？」

「いえ、あの日じゃないんです。別の日に再度診察に来ていただいて、それからです。心配していただいたのに、残念です。」

「そうですか。」 ユリは急に力がふつと抜けたようになり、身内でもないのにあれこれ聞くのもためらわれ、すぐに病院を後にした。たしかに健康そうには見えなかったが、突然、亡くなっていたなと思ってもみなかった。夢の中に現れたときから、まるで身内のような親しさを覚え、また必ず会えると思い込んでいた自分に気づいた。

早く仕事に戻らなくては、と乗ったタクシーの中、おばあさんはもうこの世界にはいないということを何度も思った。あの日、この場所で一瞬すれ違っただけの人が、なぜか何でも大切なことを伝えに来てくれた。病院へ来たときにはほとんど言葉を交わすこともなかったのに。この不思議はどう説明がつくのだろう。しかし、この夏の不思議はそれだけではなかった。ユリはいくつもの不思議を目にしてきたのだ。

思えば、世界は不思議なことだらけだ。四季が移り変わることから、自分が自分であることまで、不思議でないとと言えることなどあるだろう。そして、どんなに不思議に思えることも、きつとすべて自然のルールに沿って起こっている、そんな気がした。この暑ささえも。それを、あの見知らぬ人が自分に教えに来てくれたのだ。

「おばあさん。ありがとう。おばあさんは種を蒔いていつてくれ

たのですね。」 ユリは心の中でつぶやいた。

数日後、ユリは佐々木さんの結婚式に出席した。その日はこれまでに比べると、空気がさらりと乾いていて、ついに秋が来るのだという予感と呼んだ。朝の天気予報でも、「記録的な暑さは、これ有一段落となりそうです。」と言っていた。

退社後、挙式の準備を抜きなく完璧に進めてきた佐々木さんは、幸せのオーラを放ち、まさに輝くほどきれいだった。決めた道を進む迷いのなさが外にあふれ出ている、それはユリの大好きな、佐々木さんの本物の強さだった。

「ユリ、今日はありがとうね！」 大勢の人に囲まれた新婦とは、なかなか話せずにいたユリだったが、二次会の席で佐々木さんが隣に座ったとき、少し二人で話すことが出来た。

「おめでとうございます！佐々木さん、すつごく幸せそう。私も嬉しくて笑いが止まらないほどです。」

「あははは。私も止まらないのよ。だってほんとうに幸せなもの。ユリも幸せにならなさいよ。でも、ユリの場合は、ちょっと変わっているから結婚とかじゃないかもしれないわね。とにかく自分が一番やりたいように、やっていけばいいのよ。」 強い人とは、こうして鋭い視線で他人のことも見抜いているものだ、とユリは思った。

「佐々木さん、ひとつ聞いてもいい？」
「なに？」

「前に、佐々木さんの送別会とき、ほら、現金を置いてく事件の話になりましたよね。あのとき、佐々木さんは、あれはユーモアをもって世間の悪に対抗する手段だ、みたいなことを言ってたじゃないですか。どうしてそんなふうにしたの？」

「何よ、ユリは。こんなときにひとつ聞いていい、って普通、旦那様とはどこで知り合っただんですかあ？とか、ラブラブですかあ？とか、そういうことじゃないの？」

「それはもう何度も聞かされましたから。」

「あら、そうだっけ？ それにしてもどうでもいい質問ねえ。そう言えばそんなこと言ったような気もするけど、なんでそんなこと言ったのかなあ。

・・・そうねえ、人間の考え方っていうか、世間をどうとらえるかには二通りあるのよ。つまり、世間はそんなに悪いものじゃなくて、どんなに嫌なことがたくさん起きてても、それがたまたま間違いで、本当はいいものだって考えるか、それとも世間も人間も悪いもので、いいことがあってもそっちが間違いで元々はひどいものなんだって考えてるか。それで私は前者のタイプだってことね。そういうことなんじゃないの？ で、それがなに？」 それを聞いてユリは、嬉しくてたまらない気分になった。佐々木さんはやっぱりいいなあ、と思った。

「佐々木さん。結婚できて本当によかったねえ！」 とユリが言うと彼女は、「だから、なんでそんなこと聞いたの、って言ってるのに。なんなの、この子は。」 と、呆れ顔で言ったのだった。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8164d/>

星に蒔く種

2010年10月10日17時37分発行